
独立行政法人 国立健康・栄養研究所

研究報告

第57号(平成20年度)

独立行政法人
国立健康・栄養研究所

序

国立健康・栄養研究所は、1920（大正9）年に設立されて以来、90年近くにわたり、厚生労働省をはじめとする国の行政施策を下支えする研究機関として、栄養学を中心に広く健康・栄養に関する調査研究を行ってまいりました。

歴史を遡りますと、設立後20年経った昭和15年に公衆衛生院、体育研究所と合併され、厚生科学研究所国民栄養部に、昭和17年には厚生省所管の研究所となりました。大戦末期には、国民の食物の消費実態を調査し、これが戦後GHQにより実施された栄養調査に活かされ、食糧配給対策の基礎データとして、深刻な食糧難を乗り切ることに大きく貢献しました。

そして、昭和22年に新宿区戸山に「国立栄養研究所」として再建されて以来、これまで逐次の栄養所要量（現在の食事摂取基準）策定や毎年の国民栄養調査（現在の国民健康・栄養調査）をはじめ、各般にわたる調査研究を行ってまいりました。平成元年には、「国立健康・栄養研究所」と改称され、栄養・食生活のみならず、運動を取り入れた、より幅広い健康の保持増進の研究に取り組む体制となり、国民の健康づくりに不可欠な、食事や運動・休養に関する国の基準やガイドライン作成に寄与してきました。

さらに、平成13年には独立行政法人化され、第1期中期目標・計画期間には、新しい「日本人の食事摂取基準2005」の策定に主体的に参画したこと、国民健康・栄養調査により肥満者や糖尿病患者の増加の実態を明らかにしたこと、また健康食品の安全性・有効性に関する情報の収集・発信を開始するとともに、それを正しく消費者に伝えられるようNR（栄養情報担当者）制度を発足させました。

平成18年4月からは第2期中期目標・計画期間に入り、職員の身分を非公務員化するとともに、従前の部室制から、プログラム・プロジェクト制へ移行しました。栄養疫学、健康増進、臨床栄養、栄養教育、基礎栄養、食品保健機能の6つのプログラムは研究部門の柱として、また情報センター、国際産学連携センターは外部に向けた情報発信や産学官連携の拠点として位置づけています。

長寿社会の進展やライフスタイルの変化に伴い、肥満者やメタボリックシンドロームの増加、食育の問題など、食と健康に絡むさまざまな問題が生じています。広く国民に健康と栄養に関する正しい知識を普及するとともに、地方自治体、保健所、病院、学校給食などの実践の場で活躍する管理栄養士等の方々に的確な科学的エビデンスを提供することが当研究所に求められています。

平成20年度においては、国際的に評価の高い欧米学術誌を中心に、中期目標を上回る数多くの論文を発表するとともに、開かれた研究所として、海外への研究者の派遣・招聘をはじめ、国内外の大学・研究機関や民間企業等との連携強化に努めました。

皆様には、今後とも一層のご支援とご指導を賜りますよう、お願い申し上げます。

平成21年3月31日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 渡 邊 昌

目 次

I 研究所概要

1. 平成 20 年度研究・業務の概況	5
2. 評価委員会	5
3. 研究所主催・共催セミナー	6
4. 意見交換会	6
5. 研究倫理審査委員会	7
6. 栄養情報担当者 (NR)	7
7. 連携大学院	8
8. 他の研究機関等との連携	8

II 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	9
2. 年度計画	9
3. 進捗状況 (成果)	10

健康増進プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	12
2. 年度計画	13
3. 進捗状況 (成果)	13

臨床栄養プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	15
2. 年度計画	16
3. 進捗状況 (成果)	16

栄養教育プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	18
2. 年度計画	18
3. 進捗状況 (成果)	19

基礎栄養プログラム

1. プログラム (プロジェクトの概要)	20
2. 年度計画	20
3. 進捗状況 (成果)	20

食品保健機能プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要	21
2. 年度計画	21
3. 進捗状況 (成果)	22

情報センター

1. センター／プロジェクトの概要	23
2. 年度計画	23
3. 進捗状況 (成果)	24

国際産学連携センター

1. センター／プロジェクトの概要	25
2. 年度計画	25
3. 進捗状況 (成果)	25

Ⅲ 研究成果等の公表

1. 業績目録	
著書	28
原著論文	29
総説	34
解説等	36
研究報告書	38
国際学会等	40
国内学会等	44
2. 公的資金による研究	
厚生労働科学研究費補助金	52
文部科学研究費補助金	54
その他の公的研究費	55
3. 民間企業等の共同研究等	56
4. 研究所外での講義、講演等	56
5. 政府関係機関審議会、委員会等	63
6. 関連学術団体等への貢献	64
7. 併任、非常勤講師等	65
8. 国際貢献	66
9. 知的財産権等	66
10. 受賞等	66
Ⅳ 資 料	
1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標	67
2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画	70
3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画	79
4. 予算	89
5. 所内研究セミナー	90
6. 食品分析リスト	93
7. 海外出張	95
8. 人事異動	99
9. 特別研究員	101
10. 名誉所員	102
11. 客員研究員	103
12. 協力研究員	106

I 研究所概要

1. 平成 20 年度研究・業務の概況

当研究所は、平成 13(2001)年度より独立行政法人となり、平成 20 年度は第 2 期中期計画(～平成 22 年度)の第 3 年度に当たる。人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関として、「特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たす。厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担う」(中期目標)ことが、当研究所に求められる役割である。

こうした目標を達成するために、三つの重点調査研究業務を行っている。

- ①生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- ②日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究
- ③「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

その他にも、外部の競争的研究資金を獲得して、関連領域の基礎から応用、開発型の研究を行っている。また、今後の新たな研究展開につながるような萌芽的研究を若手研究者を中心に活発に行っている。(下表)

(表) 外部研究費の獲得状況 (単位: 千円)

		競争的研究費		受託研究費			計
		補助金	助成金	受託契約	共同契約	寄付金	
		(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	(件数) 金額	
公的機関	主任	(29) 285,285	(-) -	(3) 16,430	(-) -	(-) -	(32) 301,715
	分担	(15) 20,490	/	/	/	/	(15) 20,490
民間企業等	主任	/	(4) 9,450	(6) 15,939	(10) 40,685	(2) 980	(22) 67,054
	分担	/	/	/	/	/	/
計		(44) 305,775	(4) 9,450	(9) 32,369	(10) 40,685	(2) 980	(69) 389,259

個々の研究内容及び研究成果の発表については、各プログラム/センターからの報告及び、研究成果の発表を参照されたい。研究成果の公表実績の一部を下表にまとめた。

(表) 研究成果の公表実績

原著論文		学会発表(招待講演)		学会発表(一般演題)	
英文	和文	国際学会	国内学会	国際学会	国内学会
74	16	12	61	46	109

また、研究の成果を社会に還元し、国民の健康づくりに役立てていただけるよう、情報センター(情報部

門)及び国際産学連携センター(対外部門)、並びに事務部業務課が中心となって、ホームページ等を介した情報提供、NR 事業、セミナー(一般及び専門家向け)、研究所の公開(オープンハウス)等を行った。NR 事業としては、平成 20 年 6 月には第 5 回 NR 認定試験を行い、累計で 3,480 名の NR を世に送り出すとともに、有資格者へのフォローアップ研修を行った。専門家を対象としたセミナーとしては、都道府県等の健康・栄養調査手法の標準化を目指すセミナーを主催した。

若手研究者の育成という観点からは、お茶の水女子大学、東京農業大学、女子栄養大学、早稲田大学及び名古屋市立大学との連携大学院や、全国の管理栄養士を養成する大学・大学院での特別講義等を通じて、ネットワーク型の人材育成を着実に進めてきた。また、国際協力についてもアジア諸国における栄養関係の研究機関との連携を中心に、研究ネットワークの構築を進めている。

2. 評価委員会

(1) 外部評価委員会

下記の 9 名の委員で構成される国立健康・栄養研究所外部評価委員会については、平成 21 年 3 月 18 日(水)に平成 20 年度業務実績事後評価及び平成 21 年度計画事前評価を行った。

【委員】

五十嵐脩	(お茶の水女子大学名誉教授)(委員長)
伊藤 裕	(慶応義塾大学医学部教授)
逢坂哲彌	(早稲田大学理工学術院教授)
加賀谷淳子	(日本女子体育大学客員教授)
加藤則子	(保健医療科学院研修企画部長)
川島由起子	(聖マリアンナ医科大学病院栄養部長)
林 徹	((独)農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所長)
豊田正武	(実践女子大学教授)
三保谷智子	(女子栄養大学出版部書籍編集課長)

(2) 内部評価委員会

下記により構成される国立健康・栄養研究所内部研究業務評価委員会については、平成 20 年 11 月 20 日(木)にプログラム/センター中間報告会を、平成 21 年 3 月 18 日(水)には平成 20 年度事後評価を行った。

【委員】

芝池伸彰	(国際産学連携センター長(併任))
大森豊緑	(研究企画評価主幹)
森田明美	(栄養疫学プログラムリーダー)
田畑 泉	(健康増進プログラムリーダー)
門脇 孝	(臨床栄養プログラムリーダー)
江崎 治	(基礎栄養プログラムリーダー)
饗場直美	(栄養教育プログラムリーダー)
山田和彦	(食品保健機能プログラムリーダー)
梅垣敬三	(情報センター長)

3. 研究所主催・共催セミナー

(1) 当研究所主催第 10 回一般公開セミナー

主 題: 生活習慣と健康—メタボリックシンドロームを予防するために—

日 時: 平成 21 年 2 月 28 日(土)

場 所: よみうりホール(東京都千代田区)

主 催: 独立行政法人国立健康・栄養研究所

後 援: 厚生労働省、文部科学省、東京都、千代田区、国立保健医療科学院、国立国際医療センター、社団法人日本医師会、社団法人日本栄養士会、独立行政法人国民生活センター、財団法人健康・体力づくり事業財団、特定非営利法人日本健康運動指導士会

賛助企業: アサヒ飲料株式会社、エムジーファーマ株式会社、大塚製薬株式会社、オムロンヘルステック株式会社、株式会社カーブスジャパン、株式会社ニチレイフーズ、ネスレ日本株式会社、不二製油株式会社、マルサンアイ株式会社、株式会社ミツカングループ本社、株式会社リコム

プログラム:

○研究所の活動報告(大森豊緑)

(基調講演)「メタボリックシンドロームとはどんな病気か」

(国立国際医療センター研究所長 春日雅人)

(講演 1)「国民の健康・栄養の現状」(由田克士)

(講演 2)「食事バランスをいかに改善するか」

(饗場直美)

(講演 3)「身体活動量をいかに増やすか」

(宮地元彦)

(特別講演)「「ドラゴン」のネバーギブアップ運動!!」(プロレスラー 藤波辰爾)

(2) 当研究所主催専門家向けセミナー

ア. 調査実務編

日時・場所: 平成 20 年 8 月 1 日 (大阪府)

平成 20 年 8 月 7 日 (愛知県)

平成 20 年 8 月 8 日 (岡山県)

平成 20 年 8 月 26 日 (岩手県)

平成 20 年 8 月 30 日 (東京都)

プログラム:

(講義 1)「健康・栄養調査の信頼性を高める—標準化・精度管理の必要性—」(由田克士)

(講義 2)「国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について」(荒井裕介)

(講義 3)「適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について」(野末みほ)

(演習 1) 調査票を使った食事調査のデータ処理

(情報提供 1・演習 2) 調査票記入及び確認のポイント

(情報提供 2) 新たな栄養摂取状況調査集計ソフト

「食事しらべ(仮称)」の紹介について

(意見交換) より効率的、効果的な調査の実施に向けて

イ. 調査企画・解析・評価編

日時・場所: 平成 20 年 8 月 28 日 (東京都)

プログラム:

(講義 1)「健康・栄養調査の設計のポイント～事業評価や次期施策立案に向けての視点～」(国立保健医療科学院技術評価部研究動向分析室長 横山徹爾)

(講義 2)「健康・栄養調査の企画と事業評価のポイント～継続的な結果比較、評価のための企画、結果評価～」(由田克士)

(講義 3)「近年の管理栄養士・栄養士を取り巻く状況について」(厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室栄養・食育指導官 田中弘之)

(意見交換) 健康・栄養調査の企画・解析・評価に向けて

ウ. 食事しらべ編

日時・場所: 平成 20 年 10 月 29 日午前・午後の 2 回

開催 (東京都)、平成 20 年 10 月 30 日

午前・午後の 2 回開催 (大阪府)

プログラム:

(講義)「「食事しらべ」の使用方法について」(野末みほ)

(演習 1)「模擬調査票による、データの入力、エラーチェック、調査票提出時の対応方法」(由田克士、荒井裕介、野末みほ)

(演習 2)「処理データの活用方法等について」(由田克士、荒井裕介、野末みほ)

4. 意見交換会

(1) 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構 食品総合研究所

日 時: 平成 20 年 12 月 18 日(木)

議 題: 研究所の動向について
共同研究等について

(2) 独立行政法人国民生活センター

日 時: 平成 21 年 1 月 16 日(金)

議 題: 国立健康・栄養研究所における健康食品に関する情報の収集と公開状況等、国民生活センターにおける健康食品関連の対応状況等、今後の連携について

(3) 特定非営利法人日本健康運動指導士会

日 時: 平成 21 年 2 月 4 日(水)

議 題: 活動の現状について
健康運動指導者養成における役割と今後の両機関の連携について

(4) 社団法人日本栄養士会

日 時: 平成 21 年 2 月 15 日(日)

議 題: 平成 21 年度の事業協力、連携に関して、国立健康・栄養研究所「栄養療法データベース」運営の連携に関して、日本栄養士会「文献システム」の構築に向けての検討について

(5) 東京都健康安全研究センター

日 時: 平成 21 年 3 月 5 日(木)

議 題: 国立健康・栄養研究所における健康食品

に関する情報の収集と公開状況等、
東京都健康安全研究センターにおける健康食品等の関連業務、
今後の連携の可能性を踏まえた意見交換

(6) 財団法人健康・体力づくり事業財団

日 時: 平成 21 年 3 月 12 日(木)

議 題: 国立健康・栄養研究所の状況について、
健康・体力づくり事業財団の事業計画等、
今後の連携について

5. 研究倫理審査委員会

研究倫理審査委員会の各分会において、以下の課題について、研究計画の倫理的妥当性等を審査した。

(1) ヒトゲノム・遺伝子解析研究部会

- ・オーダーメイドヘルスケアのための生活習慣病危険因子および運動行動、摂食行動における遺伝的要因の解明

(2) 実験動物研究部会

- ・機能性食品素材の組合せによる有効性と安全性に関する研究
- ・視床下部腹内側核破壊動物の肥満病態に関する研究
- ・熱産生における脳および消化管ペプチドの役割
- ・睡眠とエネルギー代謝調節の脳機構の解明
- ・骨粗鬆症の予防に関する栄養学的研究
- ・糖代謝に及ぼす身体活動の影響
- ・筋萎縮発症機序の解明
- ・運動による生活習慣病予防機序の解明
- ・肝臓における脂質代謝・合成の制御による生活習慣病予防法の開発
- ・特定栄養素欠乏による脳血管障害への影響およびそのメカニズムの解明
- ・血管内皮細胞と膵β細胞における IRS-2 の役割について
- ・鉄過剰負荷の体内葉酸濃度に及ぼす影響

(3) 疫学研究部会

- ・現在の子どもの生活スタイルと身体活動レベル(PAL)に関する研究
- ・各種年代・活動レベルの対象における身体活動量の把握及び簡易な身体活動量調査方法の評価に関する研究
- ・睡眠時代謝量・基礎代謝量および身体活動レベルがその後の体重変動に及ぼす影響
- ・日本人糖尿病患者に於ける食事、運動量の評価のための予備的研究
- ・ITを用いた特定保健指導が内臓脂肪減少およびメタボリックシンドロームに与える影響
- ・「健康づくり・生活習慣病予防のための食育事例」の収集
- ・保護者の栄養とサプリメントに対する意識調査
- ・国際栄養分野の人材育成カリキュラム開発のためのニーズ調査
- ・大豆イソフラボン代謝産物の産生能に及ぼすフラクトオリゴ糖の影響

- ・生活習慣病予防のためのコホート研究「佐久健康長寿プロジェクト」
- ・ヒト血清免疫グロブリンの食品中アレルギーに対する特異性に関する研究
- ・若年成人の朝食欠食に関わる要因の検討 一親の食習慣や食育実施状況を含めて一
- ・食品及び料理の目安量に関する研究 一食事調査における申告値と摂取重量及び市場調査による検討一
- ・日本人の食育の意識に関する研究 (食育の文化的な分野の統一見解分析)
- ・南極越冬隊員の生活習慣と健康状態との関連に関する予備的研究
- ・新型テレビゲーム実施中のエネルギー消費量定量に関する研究
- ・高齢者を対象としたスローレジスタンストレーニング法の長期的運動効果に関する研究

【ヒトゲノム・遺伝子解析研究部会委員名簿】

芝池伸彰 (理事：委員長)
稲葉 裕 (実践女子大学教授)
後藤田貴也 (東京大学医学部附属病院助教授)
辻 誠治 (日本女子大学附属豊明小学校教諭)
大森豊緑 (研究企画評価主幹)
森田明美 (栄養疫学プログラムリーダー)
門脇 孝 (臨床栄養プログラムリーダー)
江崎 治 (基礎栄養プログラムリーダー)

【実験動物研究部会委員名簿】

江崎 治 (基礎栄養プログラムリーダー：委員長)
窪田哲也 (臨床栄養プログラム栄養療法プロジェクトリーダー)
永田純一 (食品保健機能プログラム食品分析プロジェクトリーダー)
大坂寿雅 (健康増進プログラム上級研究員)

【疫学研究部会委員名簿】

森田明美 (栄養疫学プログラムリーダー：委員長)
稲葉 裕 (実践女子大学教授)
辻 誠治 (日本女子大学附属豊明小学校教諭)
山口直人 (東京女子医科大学主任教授)
饗場直美 (栄養教育プログラムリーダー)
由田克士 (栄養疫学プログラム国民健康・栄養調査プロジェクトリーダー)
石見佳子 (栄養疫学プログラム生体指標プロジェクトリーダー)
田中茂徳 (健康増進プログラムエネルギー代謝プロジェクトリーダー)

6. 栄養情報担当者(NR)の養成

(1) 第5回栄養情報担当者認定試験

日 時: 平成 20 年 6 月 15 日(日)

場 所: 明治学院大学(東京都港区)

関西大学(大阪市北区)

受験者数: 1,404 名

合格者数: 798 名

(2) 第6回栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験

日時: 平成20年11月16日(日)

場所: 慶應義塾大学芝校舎(東京都港区)
関西大学(大阪市北区)

受験者数: 217名

合格者数: 83名

(3) 栄養情報担当者(NR)研修会の開催

仙台会場: 平成20年10月4日(土)

東京会場: 平成20年10月13日(月)

岡山会場: 平成20年10月18日(土)

福岡会場: 平成20年10月25日(土)

名古屋会場: 平成20年11月22日(土)

大阪会場: 平成20年11月29日(土)

(4) その他**NR制度のあり方検討委員会:**

・第3回検討委員会(平成20年6月18日(水))

・「栄養情報担当者(NR)制度のあり方検討委員会報告書」の提出(平成20年8月15日(金))

7. 連携大学院

(1) 国立大学法人お茶の水女子大学

(2) 東京農業大学大学院

(3) 女子栄養大学大学院

(4) 早稲田大学スポーツ科学学術院

(5) 名古屋市立大学大学院

8. 他の研究機関等との連携

(1) 宇宙航空研究開発機構(JAXA)

(2) 国立極地研究所

(3) 航海訓練所

(4) 陸上自衛隊

Ⅱ 研究・業務の進捗及び成果の概要

栄養疫学プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

栄養疫学に関する基礎ならびに応用研究を行い、日本人の食生活の多様化と健康への影響を明らかにするとともに、わが国の公衆栄養行政に不可欠な科学的根拠を提供する。具体的には、国民健康・栄養調査の集計業務を担当するとともに、結果の質の向上をめざした環境整備や基礎研究を行う。また、食事摂取基準の改定において必要とされる学術的資料を作成するとともに、そのための基礎研究を行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

- ・当研究所の法定業務である国民健康・栄養調査の集計・解析業務を担当する。
- ・国民健康・栄養調査等における調査精度の向上や技術的・学術的なレベルアップに寄与できる調査・研究等を実施する。
- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を中心に関連する事柄について研修や情報提供等の支援業務を行う。

b. 食事摂取基準プロジェクト

- ・5年ごとに改定されている「日本人の食事摂取基準」の策定に必要な栄養学的知見を系統的、かつ、網羅的に収集、蓄積、解読し、策定の効率化と質の向上の一助とする。
- ・日本人の食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るための、ヒトを対象とした栄養疫学研究を実施する。

c. 生体指標プロジェクト

- ・ミネラル、ビタミンA、ビタミンK、大豆イソフラボンの栄養生理学的意義を明らかにするとともに、これらの血中及び尿中濃度(生体指標)の定量システムを確立する。また、新規生体指標の開発を目指す。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

森田明美

プロジェクトリーダー：

由田克士 (国民健康・栄養調査プロジェクト)
 森田明美 (食事摂取基準プロジェクト／併任)
 石見佳子 (生体指標プロジェクト)

上級研究員：

西牟田守
 山内 淳

研究員：

荒井裕介

野末みほ

坪田 (宇津木) 恵

特別研究員：

河嶋伸久

大瀧裕子

客員研究員：

佐々木敏 (東京大学)

太田篤胤 (城西国際大学)

呉 堅 (日清オイリオグループ株式会社中央研究所)

吉武 裕 (鹿屋体育大学)

山本祐司 (東京農業大学)

藤井康弘 (大塚製薬佐賀栄養製品研究所)

協力研究員：

猿倉薫子 (お茶の水女子大学)

三宅裕子 (イルシージャパン)

祐成久美 (川崎市)

千葉大成 (城西大学)

王 新祥 (北京中医薬大学)

武山英磨 (東海学園大学)

岩本珠美 (県立広島大学)

島田美恵子 (千葉県立衛生短期大学)

大木和子 (昭和女子大学)

佐藤七恵 (聖徳大学)

児玉直子 (東京栄養食糧専門学校)

吉岡やよい

森國英子

松崎伸江

佐藤裕美 (千葉県立衛生短期大学)

技術補助員：

石井美子、大野尚子、福羅由美、鈴木洋子、

紙 貴子、峯 恵美、望月恵理子、岡村信子、

後藤千春、江崎潤子、井上絵里奈、吉田真咲、

石川由花、谷中かおる(平成20年7月～)、

小坂谷典子(平成20年12月～)

事務補助員：

高橋良子、近藤明子

研修生：

林 早苗 (昭和女子大学)

安部文子 (実践女子大学)

脇村智子 (東京栄養食糧専門学校)

2. 年度計画

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

- ・国民健康・栄養調査の集計業務を担当する。
- ・国民健康・栄養調査等における調査精度の向上や技術的・学術的なレベルアップに寄与できる調査・研究等を実施する。

- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を中心に関連する事柄について研修や情報提供等の支援業務を行う。

b. 食事摂取基準プロジェクト

- ・日本人の食事摂取基準 (2010 年版) 策定に協力し、厚生労働省並びに策定委員会に基礎資料を提供するためにその収集と解説 (系統的レビュー) およびデータベース化を進める。
- ・日本人における栄養素摂取状況と健康状態に関する栄養疫学研究および食事摂取基準の活用に関する調査研究を実施する。

c. 生体指標プロジェクト

- ・マグネシウム、カルシウム、ナトリウム等のミネラル、脂溶性ビタミン、大豆イソフラボンの栄養生理学的意義を明らかにするとともに、これらの血中及び尿中濃度 (生体指標) の定量システムを確立する。
- ・脂溶性ビタミンの新たな生体指標としての可能性を検討する。

3. 進捗状況 (成果)

a. 国民健康・栄養調査プロジェクト

●平成 19 年国民健康・栄養調査の集計

- ・平成 19 年国民健康・栄養調査について、厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室の指示に基づき、基本集計表一式を 6 月 30 日に生活習慣病対策室へ提出した (前年比 40 日の短縮)。なお、平成 19 年国民健康・栄養調査結果の概要 (速報値) は平成 20 年 12 月 25 日に厚生労働省より発表された。

●平成 20 年国民健康・栄養調査の集計

- ・平成 20 年国民健康・栄養調査については、各自治体からの調査票の提出を確認後、順次集計作業を開始・継続している。

●健康・栄養調査技術講習セミナーの開催

- ・都道府県、政令市、中核市、特別区等に勤務する行政栄養士を対象とした「健康・栄養調査技術研修セミナー (調査実務編)」を大阪府豊中市 (8 月 1 日)、愛知県名古屋市 (8 月 7 日)、岡山市 (8 月 8 日)、岩手県盛岡市 (8 月 26 日)、当研究所 (8 月 30 日) において開催した。また、「健康・栄養調査技術研修セミナー (調査企画・解析・評価編)」を当研究所 (8 月 28 日) において開催した。

●健康・栄養調査業務支援ソフトウェア「食事しらべ」の作成及びこれに関する技術講習セミナーの開催

- ・平成 20 年国民健康・栄養調査に向けて、栄養摂取状況調査ならびに身体状況調査に対応した業務支援ソフトウェア「食事しらべ」を新規に作成し、利用を希望する自治体へ配布するとともに、その利用状況や使い勝手等についてアンケート調査を実施した。なお、操作説明を兼ねた「健康・栄養調査技術研修セミナー (食事しらべ編)」を東京都千代田区 (10 月 29 日) で 2 回、大阪市 (10 月 30 日) で 2 回 (計 4 回) 開催した。なお、「食事しらべ」については、名称および著作権を登録した。

●平成 20 年国民健康・栄養調査及び各自治体等が実施

する健康・栄養調査に関する情報提供

- ・当研究所のホームページ上で平成 20 年国民健康・栄養調査の適正な実施に資する情報を提供した。今年度についても、過去に実施された国民健康・栄養調査の際に問い合わせが多かった事項や誤りが多かった点について、Q&A 方式の対応事例を追加した。また、実際の調査主体となる保健所における調査員の研修に用いる教材や具体的な練習問題についても内容を追加・改訂し充実させた。
- ・国民健康・栄養調査及び各自治体等が独自に実施する健康・栄養調査等に関して、質問や依頼があった場合は、個別に技術支援を行った。
- ・栄養摂取状況調査の精度向上と標準化を主たる目的とした「標準的図版ツール (試作第 2 版)」を作成した。これは前年度試作した「標準的図版ツール」を利用者の意見に基づいて発展的に改訂したものである。今年度も利用希望のあった保健所担当者へ配布し、実際の調査に試用してもらった後、それらの内容に関してアンケート調査を実施した。また、「栄養摂取状況調査のための標準的図版ツール (試作第 2 版)」に基づく重量目安表 (試作版) も作成し、同様の対応とした。
- ・国民健康・栄養調査を担当した地方自治体主管部局や保健所の管理栄養士等を対象としたアンケート調査を実施し、本年度の支援業務の評価と次年度以降における支援の在り方等について情報収集を行った。

●厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室との連携

- ・「平成 20 年国民健康・栄養調査」の企画、各種調査票の設計、食品番号表・調査必携の作成並びに厚生労働省が開催している担当者会議等に関して、生活習慣病対策室と密接に連携し、適切な調査が実施されるよう最大限の対応を行った。

●その他関連する受託業務等

- ・厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課からの受託業務として平成 16 年度より実施している「食品摂取頻度・摂取量調査」(国民健康・栄養調査方式の栄養摂取状況調査等を季節ごとに各 3 日間実施) について、データの集計・解析及び取りまとめを実施した。

b. 食事摂取基準プロジェクト

●日本人の食事摂取基準 (2010 年版) 策定

- ・所内各部署の研究者と協力して、日本人の食事摂取基準 (2010 年版) の策定業務に、策定検討委員、ワーキンググループメンバー等として参加するとともに、ワーキンググループ間の調整、連絡業務を実施した。
- ・日本人の食事摂取基準の策定のための REFERENCE 事務局をプロジェクト内に設置し、厚生労働省をはじめ策定検討委員等研究所内外からの文献資料の依頼に応じ、資料提供を行った。
- ・今後の日本人の食事摂取基準策定における作業の円滑化、科学的根拠を明確にするという目的から、実際の策定に使用した文献並びに参照した文献を登録、管理するシステム<データベース>を構築した。
- ・参考資料として、①2005 年版食事摂取基準使用文献、②2002 年以降の新たな関連文献、③前回検討不十分だった栄養素のメタ分析やレビュー、計 3086 件を収録した新たなデータベースを、食事摂取基準検討委員会

開始時に、各策定検討委員およびワーキンググループメンバーに配布した。

●栄養素摂取状況と健康状態に関する栄養疫学研究

- ・栄養疫学研究としては、肥満者の栄養教育・運動指導による介入研究「佐久肥満克服プロジェクト」を所内外の研究者等と共同で行った。肥満解消を目的とした1年間の栄養教育・運動指導の介入を行った結果、介入群において体格や血中生化学指標に改善が見られるとともに、エネルギー摂取は減少し緑黄色野菜や豆類の摂取が増加していた。

●食事摂取基準活用に関する調査研究

- ・全国6都道府県の介護保険施設を対象に献立作成時の食事摂取基準の利用と摂取エネルギー及び栄養素量の設定に関するアンケート調査を行った。多くの介護保険施設が、献立作成時に2005年版食事摂取基準を利用・参照しており、基本的な献立の栄養素については、食事摂取基準の推奨量もしくは目標量を使用していることが明らかになった。

c. 生体指標プロジェクト

●ビタミンKの栄養生理学的意義に関する研究

- ・ビタミンK2の骨代謝、脂質代謝及びその他の生体指標に及ぼす影響について用量依存性を検討するため、79名の閉経後女性を対象に、MK-4の二重盲検無作為割付比較試験を実施した。

●大豆イソフラボンの栄養生理学的意義に関する研究

- ・大豆イソフラボンの代謝産物であるエクオールの生理的意義を明らかにするため、閉経後女性を対象に二重盲検無作為割付比較試験を実施した。
- ・閉経後骨粗鬆症モデル動物を用い、エクオール産生を亢進させる食品成分の検索を行った。
- ・「健康食品」中の大豆イソフラボンの成分分析を行う

とともに、食品の表示に関する調査を行った。

●ミネラルの摂取量に関する研究

- ・就学前幼児の食事によるミネラル摂取量を推定した。対象は三重県T市在住の3歳、4歳、5歳の幼児で、各年齢の男女各15名、合計90名であった。夏、秋、冬の1日に摂取した食事を陰膳方式で採取し、化学分析によりカルシウム、マグネシウム、カリウム、ナトリウム、鉄、亜鉛、銅、マンガン摂取量を測定した。摂取量は食事摂取基準と比較すると大きく異なっていた。ナトリウムの摂取量は体重の増加とともに増加し、体重当たりカルシウム摂取量は年齢が上昇するにつれて低下した。
- ・たんぱく質の摂取量とカルシウム、マグネシウム、リンの出納との関係を出納実験のデータをもとに解析した。実験で設定したたんぱく質摂取量のレベルでは、たんぱく質の摂取量はカルシウムの尿中排泄量と正の相関を示したが、3元素の出納とは相関せず、食事摂取基準で言われている、たんぱく質の摂取量がカルシウム出納に与えるという根拠は示されなかった。

●生体指標の定量システム確立に関する研究

- ・昨年度に確立した時間分解蛍光免疫測定法による各種生体指標の測定系及びRIA法による血中25(OH)Dの定量システムを用い、ヒトを対象とした栄養素及び食品成分の栄養生理学的意義に関する研究で活用した。
- ・血中ビタミンKの定量システムの確立に向けた研究を開始した。

●新規生体指標の開発に関する研究

- ・メタボリックシンドロームの指標となるビタミンA結合タンパク(RBP4)遺伝子発現制御機構を明らかにするための研究を実施し、脂肪細胞におけるRBP4遺伝子発現制御に関与するプロモーター領域を特定した。

健康増進プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

健康増進プログラムは、(独)国立健康・栄養研究所中期計画に示された生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究を行う。

厚生労働省が5年ごとに行っている「健康づくりのための運動基準」と「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」及び「日本人の食事摂取基準」の改定作業に積極的に関与すると同時に、それらの改定のための科学的根拠の提示を行う。

また、エクササイズガイド達成のための積極的な休養法についての研究を行う。

さらに、身体活動・運動量の増加によるメタボリックシンドローム、生活習慣病の予防等に関する科学的根拠を明らかにするための研究を行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 運動ガイドラインプロジェクト

厚生労働省の「健康づくりのための運動基準」や「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」策定及びその普及・啓発に資する研究・調査並びに、それらを活用した生活習慣病予防の方策に関する以下の研究・調査を実施する。

- ・「健康づくりのための運動基準 2006」に示された生活習慣病予防のために必要な身体活動量・運動量・体力の基準の妥当性を検討するための大規模無作為割付介入研究を行う。
- ・安全で効果的な生活習慣病予防と介護予防のための筋力トレーニング法に関する研究を行う
- ・健康づくりのための運動基準ならびに運動指針作成のための文献収集並びに検討を行う。

b. エネルギー代謝プロジェクト

厚生労働省の「日本人の食事摂取基準」における推定エネルギー必要量、および「健康づくりのための運動基準」と「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」における身体活動量・運動量の把握に資する研究として、以下の調査・研究を行う。

- ・身体活動・運動の定量化の方法を開発する。
- ・身体活動レベルに寄与する活動強度や活動内容を対象特性別に明らかにする。
- ・運動の種類の違い(レジスタンス運動など)がエネルギー代謝と基質代謝に及ぼす影響を明らかにする。

c. 休養プロジェクト

「健康づくりのための運動指針 2006(エクササイズガイド 2006)」で示された身体活動量及び運動量の達成を可能とするために、適切な休養の取り方に関する以下の研究を行う。

- ・休養の必要性また回復をみる目的で、身体疲労と精神疲労の定量化に関する研究を行う。
- ・休養に重要である睡眠に関する研究を行う。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

田畑 泉

プロジェクトリーダー：

宮地元彦 (運動ガイドラインプロジェクト)

田中茂穂 (エネルギー代謝プロジェクト)

田畑 泉 (休養プロジェクト／併任)

上級研究員：

高田和子

熊江 隆

大坂寿雅

特別研究員：

谷本道哉

朴 鍾薫

流動研究員：

村上晴香 (循環器病研究振興財団)

大河原一憲 (循環器病研究振興財団)

客員研究員：

木村靖夫 (佐賀大学)

川中健太郎 (新潟医療福祉大学)

寺田 新 (早稲田大学)

真田樹義 (早稲田大学)

山元健太 (早稲田大学)

家光素行 (環太平洋大学)

二見 順 (東日本国際大学)

田中千晶 (桜美林大学)

引原有輝 (千葉工業大学)

井上修二 (共立女子大学)

協力研究員：

安田 剛 (株式会社ティップネス)

河野 寛 (早稲田大学)

片山利恵 (NPO 法人健康早稲田の杜)

緑川泰史 (早稲田大学)

別所京子 (聖徳大学)

鈴木洋子 (株式会社ウエル・ビーイング)

技術補助員：

佐々木梓、吉池秀之、曹 振波、大森由美、

埜 智史、田中憲子、丸藤祐子、川上諒子、

広佐古愛湖、小暮寛子、三宅理江子、安藤貴史、

田中祥子、坂田晶子、上野優子、東 保子、

山本久子、吉田美代子、京須 薫、阿部瑞江

研修生：

藤本恵理 (早稲田大学)

山口 航 (早稲田大学)

吉田明日美 (昭和女子大学)

吉川由佳里 (昭和女子大学)

吉田夏美 (昭和女子大学)

鈴木明子

魚住佳代

2. 年度計画

a. 運動ガイドラインプロジェクト

- 生活習慣病発症に関する大規模前向き研究に関して1,500名のコホートを構築し、ベースラインデータの分析を行うとともに、介入を開始し、その効果を検討する。
- 筋力トレーニングの効果と実施方法について、動脈のスティフネス、血管内皮機能並びに血流量に関して検討する。
- メタボリックシンドローム該当者に対して「エクササイズガイド 2006」に基づいた運動介入研究を実施する。
- 「健康づくりのための運動指針(エクササイズガイド)」の記載された簡便な持久力測定法の妥当性の検証を行う。

b. エネルギー代謝プロジェクト

- 成人と子どもの身体活動レベルや総エネルギー消費量の変動要因を、対象特性別に特定するとともに、質問紙や歩数を用いた身体活動レベルおよび総エネルギー消費量の推定法を確立する。
- 小児の代表的な活動の強度(メッツ値)の標準値を再検討する。
- レジスタンストレーニングが身体活動量や脂質代謝に及ぼす影響を明らかにする。
- 体重増加の予防に有効な身体活動レベルを、DLW(二重標識水)法を用いた観察研究により検討する。また、睡眠時代謝量や基礎代謝量と、その後の体重増加との関係について検討する。

c. 休養プロジェクト

- 健常な成人を被験者とし、一過性の肉体的負荷による身体疲労と精神疲労の発生・減衰を、睡眠時心臓自律神経バランスと心理状況アンケート調査を指標として明らかにする。
- 長距離選手等の運動選手を被験者とし、継続的な肉体的負荷による身体疲労の変動を血清生化学検査及び非特異的免疫能により明らかにする。
- 血清及び唾液の総抗酸化能の測定法を確立し、休養の新しい客観的指標として検討する。
- 成人女性を被験者とし、月経前症候群に代表される生理周期による精神的影響を心拍スペクトル解析による睡眠時心臓自律神経バランスの変動により明らかにする。
- 実験動物を用い、睡眠とエネルギー代謝調節の脳機構における視床下部プロスタグランジンとGABAの作用とその機構を明らかにする。

3. 進捗状況(成果)

a. 運動ガイドラインプロジェクト

- 運動基準 2006 で示された身体活動量、運動量、体力の基準値の妥当性について検討するための大規模無作為割付け介入研究について、本年度は、650名を3群に割り付け、非活動な介入群に対し三次元加速度計を用いた身体活動改善指導を実施した。

ベースライン測定結果を横断的に分析すると、体力(最大酸素摂取量)の低い者は高い者と比較して、動

脈スティフネス、血圧、体重、腹囲、血糖値などほぼ全ての生活習慣病危険因子が高いことが示された。また、3次元活動量計で評価した、3メッツ以上の強度の身体活動の量も、体力ほどその関連は強くないが、動脈スティフネスや中性脂肪と関連することが示唆された。

1年間の介入期間終了後、3メッツ以上の強度の身体活動の量が介入群のみで有意に増加した。また、介入群のみでHDLコレステロールの低下が見られなかった。それ以外の生活習慣病リスクファクターの変化に3群間で有意差は認められなかった。

- 新しい筋力トレーニング方法の一つである緊張力維持法(スロトレ)の効果を検討するために、37名の健康男性を対象として、スロトレ群、通常筋トレ群、対照群の3群を比較する無作為割付け介入研究を実施した結果、通常筋トレとは対照的に、スロトレは動脈スティフネスを改善すること、通常筋トレ群とスロトレ群両方で大腿筋厚や四肢血流量が増加すること、安静時代謝が増加することが示唆された。また、スロトレ実施後は、自転車運動などの動的運動中の活動筋放電パターンが、平坦化し、効果的な筋力発揮ができなくなることが示唆された。

「エクササイズガイド 2006」で示された持久能力の簡便な推定法の推定精度は低いことが明らかになったことから、より推定精度の高い歩数及び身体活動量等による最大酸素摂取量の推定法を開発した。

- 健康運動指導士がエビデンスに基づいた身体活動・運動指導を行うための研究論文データベースを、健康・体力づくり事業財団と協力して作成した。平成18年度末には約1,200本の論文データベースが構築されたが、本年度は歩数、身体活動、運動リスクマネージメントなどのテーマを中心に約50編の論文をデータベースに追加した。

- 佐久肥満克服プログラムの身体活動量評価ならびに身体活動・運動介入を担当した。平成19年7月の1年目測定から約12ヶ月間の身体活動量評価及び活動量計を活用した自己管理による介入を実施した結果、一日あたり約1,800歩の身体活動量の増加が見られ、収縮期血圧約8mmHg、体重4.5kg、腹囲4cm、並びに内臓脂肪量の低下が観察された。

b. エネルギー代謝プロジェクト

- 20~79歳の成人男女について、DLW法で測定した1日のエネルギー消費量と内藤らが開発した身体活動量評価の簡易質問紙により評価した活動量を比較し、その妥当性の評価、身体活動レベルに影響する活動の内容について検討した。その結果、本質問紙は従来の質問紙に比べ、DLW法により測定したエネルギー消費量との相関は高いが、身体活動レベルで区分する場合には、誤判別が多いこと、身体活動レベルには、かなり軽度の活動と中強度の活動の時間が関連していることが明らかになった。

- 小学生から高校生の身体活動量の評価の研究の一環として、高校生男女65名について、DLW法によるエネルギー消費量の測定、生活活動の調査、歩数の調査を実施した。サンプルの分析を進めており、中学生78

名のデータにおいて、総エネルギー消費量は $2,556 \pm 589$ kcal、身体活動レベルは 1.85 ± 0.28 であった。

- 69 名の小学生を対象に、様々な活動別の活動強度を測定するとともに、加速度計による推定法の妥当性を検討した。
- 成人を対象として、市販の加速度計について、歩行スピードとピッチを変えた時のエネルギー消費量及び歩数の評価の精度に与える影響について検討した。その結果、一軸の加速度計では、低ピッチの歩行においてエネルギー消費量を過少評価し、その傾向は歩行スピードが速くなるほど大きいことが明らかになった。
- レジスタンストレーニングによる介入の効果、およびボディビルダーと一般健常人との比較のいずれにおいても、ヒューマンカロリメーターにより評価した脂質酸化能に、対照群と有意な差はみられなかった。
- 睡眠時代謝量とその後の体重増加との間には、有意な関係はみられなかった。

c. 休養プロジェクト

- 大学生の長距離選手を被験者とし、10 日間の強化合宿による身体疲労と精神疲労の発生・減衰を、睡眠時心臓自律神経バランスと心理状況アンケートを指標として調査した。同じ合宿に参加した 44 名の選手については、心理状況アンケートのみを行ったが、強化合宿後の方が合宿前よりも疲労を含め心理状況は改善していた。
- 女子長距離選手において、夏期合宿による身体疲労が血清生化学検査における有意の変動として認められない場合でも、非特異的免疫である血清オプソニン化能の低下として認められることを明らかにした。
- 血清の新しい総抗酸化能の測定法を確立し、女子大学生 127 名について測定を行い、血清の総抗酸化能には尿酸の寄与が大きいことを明らかとした。
- 女子大学生 11 名を被験者とし、心拍スペクトル解析による連続した 3 日間の月経前の睡眠時心臓自律神経バランスの変動と睡眠に対する主観的満足度及び心理状況アンケートの関連性について現在解析中である。
- プロスタグランジン E2 による熱産生誘起に視床下部終板器官周囲部で GABA の作用を抑制する機構が存在する可能性、及び中枢性肥満の誘起に腹部臓器でアセチルコリン受容体を介した細胞増殖機構がある可能性を明らかにした。

臨床栄養プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

臨床栄養プログラムは、「重点調査研究に関する事項」の「生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究」に対応し、運動・身体活動による生活習慣病の一次予防、食事と遺伝的因子の相互作用の解明並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた研究を行う。近年、我が国において糖尿病患者は増加の一途をたどり、罹患者数は約 890 万人を数えるに到っている。糖尿病は高齢者における主要な疾患の 1 つであり、糖尿病に肥満・高脂血症・高血圧が合併するメタボリックシンドロームは動脈硬化を促進し、心筋梗塞・脳卒中のリスク増大を介して日本人の健康寿命を短縮する最大の原因となっている。糖尿病などの生活習慣病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病であり、その 1 つ 1 つの因子は単独では生活習慣病を発症させる効果は弱い、複数の因子が組み合わさって生活習慣病を発症させると考えられている。また近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、日本人が欧米人に比べ、膵β細胞のインスリン分泌能が低い(遺伝的素因)ために、高脂肪食などの食事内容の欧米化や運動量の低下といった変化(生活習慣要因)による肥満・インスリン抵抗性状態に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。このような生活習慣病の特性を踏まえて、本プログラムでは糖尿病や動脈硬化症の発症・進展の遺伝的要因、環境要因並びにその分子メカニズムを解明する。

(2) プロジェクトの概要

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

生活習慣病を効果的に予防するためには、生活習慣病の根本的な分子病態の解明とそれに立脚した生活習慣への介入が必須である。現在急増している 2 型糖尿病は、複数の遺伝因子に加えて環境要因が組み合わさって発症する多因子病である。そこで本プロジェクトは、2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型を同定し、その機能が未知のものに対しては、動物モデルを用いて解析する。また半定量食品摂取頻度調査に基づいた個々人の各栄養素摂取量並びに身体活動量と、これまでに同定した 2 型糖尿病を発症しやすくする遺伝子多型の組み合わせが、肥満度や血糖値などの臨床指標にどのように影響を及ぼしているか、コホート集団を対象に調査・解析する。

b. 栄養療法プロジェクト

近年の我が国における糖尿病患者数の急増については、高脂肪食に代表される食習慣の欧米化や車の普及などによる運動不足といった生活習慣に基因する肥満・インスリン抵抗性に対して、膵β細胞がこれを十分に代償できないことがその一因と考えられている。そこで、本プロジェクトでは高脂肪食負荷に伴うインスリン抵抗性と代

償性のインスリン分泌増加の分子メカニズムについてモデル動物を用いて詳細に検討する。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー：

門脇 孝

プロジェクトリーダー：

窪田直人 (メタボリックシンドロームプロジェクト)

窪田哲也 (栄養療法プロジェクト)

特別研究員：

栗澤元晴

客員研究員：

門脇弘子 (東京家政学院大学大学院・家政学部児童学科教授、保健管理センター所長)

野田光彦 (国立国際医療センター研究所・内分泌代謝・臨床検査部長)

原 一雄 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

協力研究員：

眞鍋一郎 (東京大学医学系研究科循環器内科)

窪田直人 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

松下由実 (国立国際医療センター研究所・国際臨床研究センター・国際保健医療研究部国際疫学研究室長)

流動研究員：

大石由美子 (東京大学医学系研究科循環器内科)

技術補助員：

加藤美智子、河野小由紀 (～10 月)、

篠原清子 (2 月～)

研修生：

高本偉碩 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

泉 和生 (財団法人国際協力医学研究振興財団)

加藤昌之 (財団法人国際協力医学研究振興財団)

井上真理子 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

勝山修行 (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

小島敏弥 (東京大学医学系研究科循環器内科)

笹本さやか (東京大学医学系研究科糖尿病・代謝内科)

内山弓子 (東京家政学院大学大学院・人間生活学研究科)

2. 年度計画

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

●各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討

これまで罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析と候補遺伝子アプローチを組み合わせた統合的解析によって PPAR γ 遺伝子、アディポネクチン遺伝子、PGC-1 遺伝子、AMP キナーゼ α 2 サブユニット遺伝子、HNF4 α 遺伝子が日本人におけるインスリン抵抗性や 2 型糖尿病の感受性遺伝子であることを明らかにしている。しかしながら、糖尿病をはじめとする生活習慣病は遺伝素因に環境因子の影響が組み合わさって発症する多因子病であり、個々人の易罹患性を予測するためには、個々の遺伝素因と環境因子に加えて遺伝素因・環境因子の相互作用を考慮に入れた解析を行いそのデータに立脚した易罹患性予測式を構築する必要がある。これまでアディポネクチン遺伝子多型は肥満者でより強く血中アディポネクチン値に影響を与えていることを明らかにしているが、本プロジェクトでは、これまでに明らかにしたインスリン抵抗性やインスリン分泌、2 型糖尿病に関与する遺伝子多型、各栄養素摂取量、身体活動量、それらの相互作用項を説明因子として、肥満度、血糖値、糖尿病の有無などの従属変数をどのように説明しうるかをロジスティック解析によって検討する。コホートの対象者についてアディポネクチン遺伝子、アディポネクチン受容体 1 および 2 遺伝子、AMPK α 2 サブユニット遺伝子、レジスチン遺伝子、HNF4 α 遺伝子、PPAR γ 2 遺伝子、 β 3 アドレナリン受容体遺伝子、PGC-1 遺伝子に加えて、欧米で報告され日本人でも 2 型糖尿病感受性遺伝子であることを確認した TCF7L2 遺伝子、HHEX 遺伝子のタイプングを行い、ロジスティック解析によってインスリン抵抗性、2 型糖尿病発症に関与する遺伝素因と環境因子の組み合わせを抽出する。

●遺伝素因の機能解析

これまでに 2 型糖尿病を発症させやすくしていることが遺伝子多型を利用した患者対照相関解析によって明らかになった遺伝子で、その機能が未知のものについては、遺伝子欠損マウスの解析を行う。実際に糖尿病を発症するかどうか高脂肪食などの環境因子を負荷して表現型を解析し、栄養と遺伝子多型の相互作用について検討する。

b. 栄養療法プロジェクト

●糖尿病の研究（インスリン分泌を中心に）

2 型糖尿病モデル動物、肥満モデル動物に高脂肪食を負荷した時の膵 β 細胞に与える影響について *in vivo* の系で解析を行うとともに、遺伝子操作動物の膵 β 細胞株を樹立して *in vitro* でも解析可能な系を確立することにより、膵 β 細胞増殖機構の分子メカニズムをさらに詳細に検討する。

●メタボリックシンドロームの研究（インスリン抵抗性を中心に）

高脂肪食は、肝臓や骨格筋の中性脂肪含量を増加させ、肝臓や骨格筋のインスリンシグナルを様々な分子メカニズムにより障害することで、インスリン抵抗性を惹起すると考えられるが、我々は最近、高脂肪食を負荷した生活習慣病モデル動物では、血管や血管内皮におけるインスリンシグナルが低下しており、このことが骨格筋のインスリン抵抗性ならびに動脈硬化の進展に関与している

可能性があるという興味深い知見を得た。そこで本プロジェクトでは、血管内皮をターゲットにした遺伝子操作動物を作出しその解析を行うことで、血管内皮におけるインスリンシグナルが全身のインスリン抵抗性や動脈硬化の進展に果たす役割を検討する。

3. 進捗状況（成果）

a. メタボリックシンドロームプロジェクト

●各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討

これまで罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析と候補遺伝子アプローチを組み合わせた統合的解析によって PPAR γ 遺伝子、アディポネクチン遺伝子、PGC-1 遺伝子、AMPK α 2 サブユニット遺伝子、HNF4 α 遺伝子、TCF7L2 遺伝子と HHEX 遺伝子が日本人におけるインスリン抵抗性や 2 型糖尿病の感受性遺伝子であることを明らかにした。さらに平成 20 年度は Whole Genome Association Study による解析から 6 回膜貫通型の電位依存性カリウムチャンネルである KCNQ1 が日本人の 2 型糖尿病感受性遺伝子であることを明らかにした。本遺伝子のリスクアレル頻度は 0.4~0.6 で、また糖尿病発症のオッズ比が 1.3~1.4 と非常に高く、今まで明らかにされた日本人の 2 型糖尿病感受性遺伝子の中でも最も主要な遺伝子の一つであると考えられた。さらに KCNQ1 遺伝子多型はアジア人においても日本人と同様に 2 型糖尿病感受性遺伝子であることが確認された。その機能については、リスクアレル保持者ではインスリン抵抗性の指標である HOMA-IR とは相関が認められなかったが、インスリン分泌能の指標である HOMA- β が有意に低下していたことから、KCNQ1 はインスリン分泌にかかわっている可能性が示唆された。

●基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究

これまでに 2 型糖尿病を発症させやすくしていることが遺伝子多型を利用した患者対照相関解析によって明らかになった遺伝子で、その機能が未知のものについて、遺伝子欠損マウスを作製し解析を行った。当該遺伝子欠損マウスに対してインスリン負荷試験と糖負荷試験を行ったところ、インスリン抵抗性は認めず、インスリン分泌低下に伴う耐糖能異常を呈していることが明らかになった。インスリン分泌低下のメカニズムを明らかにするために、膵島の面積を検討したところコントロールマウスと差を認めなかったが、当該遺伝子欠損マウスから単離した膵島では、グルコース刺激後の細胞内 Ca 濃度が有意に低下しており、当該遺伝子はグルコース応答性インスリン分泌機構において重要な役割を果たしている可能性が示唆された。また、当該遺伝子 SNP17 の 2 型糖尿病リスクアレル保持者は非保持者に比べて遺伝子発現が低下していることを確認した。

b. 栄養療法プロジェクト

●糖尿病の研究（インスリン分泌を中心に）

我々はこれまでに 2 型糖尿病モデル動物、肥満モデル動物を用いた検討から、高脂肪食誘導性のインスリン抵抗性に対する代償性インスリン分泌亢進において膵 β 細胞の代償性過形成が生じていること、その代償性過形成にインスリン受容体基質 (IRS)-2 が重要な役割を果たしていることを明らかにした。平成 20 年度は、その分子メカニズムをさらに解析するために、まず IRS-2 欠損膵

β細胞株の樹立を試みた。これまでに樹立した IRS-2flox/flox 膵β細胞株に Adeno-Cre を感染させると、Adeno-Cre 濃度依存的にゲノムレベルで IRS-2 が欠失し、さらに mRNA レベルや蛋白レベルでも IRS-2 の発現は 90% 近く抑制された。一方同じファミリーである IRS-1 の発現には影響は認められず、IRS-2 だけ欠損した膵β細胞株の樹立に成功した。この IRS-2 欠損膵β細胞株を用いてグルコース応答性インスリン分泌について検討を行ったところ、Adeno-LacZ を感染させたコントロール株とほぼ同程度に保たれていた。一方、細胞の増殖についてはコントロール群に比し、IRS-2 を欠損した膵β細胞株では増殖が有意に障害されており、IRS-2 が膵β細胞の機能ではなくむしろ増殖に関与していることが示唆された。

●メタボリックシンドロームの研究（インスリン抵抗性を中心に）

これまで、我々は血管内皮細胞において主要な IRS である IRS-2 に着目し、インスリン抵抗性と血管内皮機能について、血管内皮細胞特異的 IRS-2 欠損マウス (ETIRS2KO マウス) および高脂肪食誘導性肥満モデル動物を用いて検討を行った。その結果、血管内皮細胞のインスリンシグナル障害による血管内皮機能障害の結果、骨格筋の間質へのインスリンの移行が低下し、骨格筋の糖

取り込みが低下するというメカニズムが存在することが示唆された。そこで平成 20 年度は、血管内皮機能改善薬を ETIRS2KO マウスと高脂肪食誘導性肥満モデル動物に投与し、骨格筋のインスリン抵抗性が改善するかどうかについて検討した。ETIRS2KO に血管内皮機能改善薬を投与すると eNOS の mRNA と蛋白レベルがコントロールマウスの約 2 倍に増加した。また、ETIRS2KO で認めたインスリン刺激後の eNOS のリン酸化の低下は、コントロールマウスとほぼ同程度まで増加し、血管内皮機能が改善した。さらに ETIRS2KO で認めた骨格筋の間質のインスリン濃度の低下は、血管内皮機能改善薬投与によりコントロールマウスとほぼ同程度まで増加し、骨格筋のインスリン抵抗性が改善した。同様に高脂肪食誘導性肥満モデル動物に血管内皮機能改善薬を投与したところ、高脂肪食誘導性肥満モデル動物で認めた血管内皮機能障害が改善し、骨格筋の間質のインスリン濃度がコントロールマウスと同程度まで増加し、骨格筋のインスリン抵抗性が改善した。以上の結果から血管内皮機能が骨格筋インスリン感受性調節に重要な役割を果たしていることが明らかになった。

栄養教育プログラム

1. プログラム/プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

生涯を通じた健康づくりのための健康・栄養教育のあり方や環境整備について、食育・生活習慣病予防・栄養ケア・マネジメント(食介護)の 3 プロジェクトで研究する。

栄養教育(保健指導)や食育、食介護の実践現場で抱える問題点を掘り起こし、より効果的な事業展開をするための方法論や評価法の開発を含める実践的研究を産官学共同で取り組む。子供、成人、高齢者それぞれのライフステージにおける食生活および食習慣と健康に関する問題を明らかにする。また、コホートを使った研究によって、生活習慣病等の疾患発症とそれら疾患の発症に関連する種々の要因(環境要因、遺伝的要因)との関連性を検討し、栄養教育、食育等の実施への基礎データを構築し、テーラーメイド栄養介入の確立を目指す。

(2) プロジェクトの概要

a. 食育プロジェクト

平成 17 年に施行された「食育基本法」に基づいて、多くの団体(国、地方自治体、地域ボランティア、生産者、企業など)が積極的に展開している食育の実践活動を支援する。また、食育基本計画の中には、5年後の見直しを視野に入れた、数値目標が設定されており、その達成状況を評価する。食育活動展開の為の科学的基盤を得るためにフィールドでの調査研究を実施すると共に食育の現状解析と評価法について研究する。特に、食育の教育方法や評価法の開発に重点をおく。また、海外での食育の現状を把握するため、海外の食育に関する論文をレビューし、日本と海外の食教育に関する意識の差異について比較検討する。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

生涯を通じた健康づくりに有効な栄養教育方法の確立を目指して、特に成人期の生活習慣病予防のためのリスク因子抽出・介入方法検討の基礎的基盤を築く。

新規健診・保健指導に寄与するため、メタボリックシンドローム予備群・有病者群を減少させる効果的介入の科学的基盤を確立する。肥満者を対象に運動および栄養教育による介入研究を実施し、肥満や生活習慣病の発症にかかる様々な環境要因(食事・生活習慣・社会環境等)や遺伝的要因を総合的に検討し、効果的な栄養教育の方法や成果にかかる評価指標について研究する。

また、大規模コホートを設定し、肥満や糖尿病などのリスク因子抽出のための縦断研究を行い、肥満や糖尿病予防のための栄養教育法を確立する。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

高齢者の食環境を調査研究し、QOL を高く保つ方法を研究する。摂食・嚥下困難を有する高齢者に対する食事療法・栄養療法のあり方について問題の把握と対策を立案する。異分野の専門家によるワークショップを開催し、実行に向けて改善案を提言する。高齢者施設や在宅での

摂食・嚥下困難を伴う高齢者への栄養ケア・マネジメントの質的向上を目指して、わが国の高齢者の介護現場での食をめぐる問題点を抽出し、その改善策を検討する。特に、食介護(食を通じた介護)を食事を通じての全人的ケア・マネジメントとして位置づけ、「最期まで口から食べる幸せ」を維持できる、食介護を目指して、産官学共同で食介護のあり方について検討する。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー:

饗場直美

プロジェクトリーダー:

饗場直美 (生活習慣病予防プロジェクト)

Melissa Melby (食育プロジェクト)

手嶋登志子 (栄養ケア・マネジメントプロジェクト)

上級研究員:

山田晃一

特別研究員:

中出麻紀子

客員研究員:

石渡尚子 (跡見学園)

川上純子 (相模女子大学短期大学部)

協力研究員:

平川あずさ (「食生活」編集員)

日比野佐和子 (同志社大学)

石田淳子 (浜松大学)

山田五月 (多摩小平保健所)

技術補助員:

須田尚美、三上陽子、竹沢純

研修生:

清水智美 (御茶の水女子大学)

2. 年度計画

a. 食育プロジェクト

- 食育に関係する文化的要素を把握するため、共通認識分析(Weller 2007)を行い、食育実践にかかる問題について、食育に対する専門家と一般人の間の認識の乖離や共通認識を明らかにする。
- 若年成人における朝食欠食に関する要因を解析するための親子を対象としたアンケート調査を実施する。大学生とその親に対して食生活や食習慣、食嗜好についての調査を実施する。特に幼児期の親の子どもへの食態度や食意識について検討し、親の意識や食態度が子どもにどの様に伝播するのか明らかにする。
- DOHaD 仮説(バーカー仮説)を検証するため、母子健康手帳を使って、妊娠期の母親の状況、胎児期の発育状況から出生後 6 年間の母子の情報を収集し、胎児期、出生期、乳児・幼児期の発育状況と学童期の健康状態(肥満等)の関連性を明らかにする。
- 海外の食育に関する論文のレビューを用いて、日本と海外の食育に対する意識の比較し、日本の食育を世界に紹介する。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

- ・平成 18 年度から継続して行っている減量プログラムのフォローアップ調査を実施する。減量成功と不成功にかかる要因、リバウンドにかかる要因を明らかにするために、質的研究と量的研究の両面から解析し、介入後の体重維持へ向けたアプローチ（フォローアップ）を明らかにする。
- ・大規模コホートを設定し、肥満および糖尿病のリスク因子解析のためのデータ収集とデータベース作成を行う。
- ・特殊環境での生活習慣病予防のための栄養教育の在り方や給食サービスの在り方について明らかにするために、南極越冬隊および長期航海船舶での食事提供の実態と隊員（船員）の食事摂取や生活状況、健康状態についての実態調査を行う（食育プロジェクトと共同）。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

- ・昨年度実施した全国 6 地域の全高齢者施設における咀嚼・嚥下困難者に対する食介護に関するアンケート調査データを解析し、わが国の高齢者施設における食事提供に関する問題点を明らかにする。
- ・ワークショップを開催し、産官学共同で、食事提供について共通認識のもとで、食介護の観点から咀嚼・嚥下困難者に対する食事提供のあり方について確立することを図る。

3. 進捗状況（成果）**a. 食育プロジェクト**

食育に関する問題把握とその背景調査に関する準備を行った。

- ・Cultural Domains 調査ではアンケート調査表およびフリーリストを作成し、パイロットテストを実施し、調査法の有効性を検証した。
- ・若年成人（20 歳代）の朝食欠食の要因を明らかにするために、親子を対象とした食意識・食態度、親の子どもへの食育・食事提供態度日本語版（CFSQ）などの項目を含むアンケートを作成し、フィールドの設定を行った。
- ・DOHaD 仮説（バーカー仮説）の検証のために、現在の肥満の有無と出生およびその後の体格・生活状況との関連を母子手帳およびアンケート調査を行う準備としてアンケートの作成およびフィールドの設定等を行った。
- ・日本の食育を国際学会や国際シンポジウムにおいて紹介した。
- ・内閣府における食育推進のための企業との連携のあり方についての提言作りを行った。
- ・第 3 回食育推進全国大会（群馬・前橋）へ出典し食事バランスについての考え方について紹介した。

b. 生活習慣病予防プロジェクト

- ・佐久総合病院人間ドック受診者を対象とした肥満克服のための介入研究を継続している。対象者は、235 名

（男性 116 名、女性 119 名）で、無作為に 2 群に分け介入効果を検証中である。医師・栄養士・運動指導士などで構成するチームによる食事及び運動への行動変容教育を実施し、これまで食事・運動と本人の意欲の改善による肥満解消への効果及びその要因（血液生化学、エネルギー消費量および基礎代謝、遺伝性素因や性格傾向など）を解析している。本年度は、A 軍（RCT 介入群）における 1 年フォローアップ調査を実施した。現在データベースの更新を行っている。また、対象者における肥満に関連すると報告されている遺伝子多型解析を継続実施し、女性において血清グレリン遺伝子多型と肥満との関連性について明らかにした。減量成功と不成功における意識やストレスの有無などの関連について解析し、減量成功の要因としてストレスの有無、目的達成への意欲や目標達成への障害の有無が影響していることを明らかにした。

- ・縦断的大規模コホートを確立し、肥満および糖尿病のリスク因子解析のためのデータ（食生活、生活、生活活動、ストレス、身体計測、血液検査データ等）の収集を開始した。
- ・がん予防の基礎研究として、癌細胞の障害修復機構に関与する新しい因子を発見し、癌の化学療法等との併用による、癌治療への方向性を見出し、成果として論文を発表した。
- ・特殊環境における食事のあり方と健康との関連性を明らかにするために、2 研究所と共同で（南極昭和基地：国立極地研究所との共同研究、航海中船舶：航海訓練所との共同研究）給食内容および摂食状況等についての調査研究の準備を行った。南極越冬隊における給食における食事提供と隊員の摂食状況や活動状況に関するデータ収集を開始した。

c. 栄養ケア・マネジメントプロジェクト

- ・昨年度全国 6 地域の全高齢者施設（2,767 ヶ所）を対象として実施した食介護に関するアンケートのデータベースの作成を行い、高齢者施設における摂食・嚥下困難者に対する食事提供に関わる現状について把握し、その問題点について検討した。その結果、食事提供のための食形態の決定には、多職種（栄養士・看護師・医師・介護職・言語聴覚士）が関わり、ミールラウンズや本人の意志によって主に決定されていることを明らかにした。また、その実際に提供される食形態は、食事決定に関わる職種の種類によって異なる可能性があることを明らかにした。
- ・国の咀嚼・嚥下困難者を対象とした特別用途食品の基準の見直しに際し、これまでワークショップを通じて検討してきた基準を基に、科学的根拠を提供し、新たな基準作りに関与した。
- ・介護にかかわる異職種参加のワークショップを開催し、全国調査結果から得られた科学的根拠を基に、産官学で食介護の在り方や今後の方向性について共通認識を確認した。

基礎栄養プログラム

1. プログラム（プロジェクト）の概要

(1) プログラムの概要

マクロニュートリエント（脂質、炭水化物、蛋白質）の過剰摂取、過少摂取によって生じる病態や疾病の発症機序を分子レベルで解明し、その機序から疾病の予防、治療法を考案する。

(2) 構成メンバー

プログラムリーダー：

江崎 治

プロジェクトリーダー：

三浦進司（脂質・糖代謝プロジェクト）

上級研究員：

山崎聖美

研究員：

千葉 剛

客員研究員：

亀井康富（東京医科歯科大学）

渡辺光博（慶應義塾大学）

高橋真由美（お茶の水女子大学）（1月～）

技術補助員：

甲斐裕子、白石冨香（～12月）、白石梨沙、

岸本杏子（2月～）、榊原圭代子

研修生：

只石 幹（東京農業大学）（3月～）

2. 年度計画

a. 脂質・糖代謝プロジェクト

●運動による肥満/糖尿病予防機序の解明

・運動は脂肪組織で脂肪分解（リポリシス）を亢進させ、遊離された脂肪酸は筋収縮に用いられる。運動トレーニング（運動を繰り返すこと）を行うと脂肪を燃焼し易い体質になる。これらの機序に交感神経の活性化やAMP-activated protein kinase (AMPK) がどのように関与しているか、トランスジェニックマウスを用いて明らかにする。

●肥満/脂肪肝発症原因別の食事療法の考案

・飽和脂肪酸、一価不飽和脂肪酸、砂糖、アルコールを多く摂取すると、脂肪肝や肥満を発症する。これらの機序は栄養素により異なる。一方、魚、お茶（カテキン）、大豆の摂取は脂肪肝や肥満を予防するように働く。これらの予防機序も食品により異なる。どのような機序で生じる脂肪肝・肥満に対して、どのような食品を摂取することが最適か明らかにする。

●エネルギー摂取制限及び栄養素欠乏時に於ける代謝変動の分子メカニズムの研究

・エネルギー摂取制限は主要な肥満治療法であり、小動物に於いては寿命を延長させる。一方、栄養素の欠乏は脳血管障害、皮膚炎、発育障害などを生じるおそれがある。これらの機序については殆ど研究が行われていない。このため、エネルギー摂取制限によって生じ

る脂質、糖質代謝の変化、エネルギー消費量減少などの生体適応現象の機序及び臓器障害発症機序などを分子レベルで明らかにする。

3. 進捗状況（成果）

a. 脂質・糖代謝プロジェクト

●運動による肥満/糖尿病予防機序の解明

・定期的な運動は $\beta 2$ アドレナリン受容体を活性化し、転写共役因子 PGC-1 α 発現量を増加させる。PGC-1 α を筋肉で増加させると、ミトコンドリア量が増加しエネルギー消費量も増える。今年度、PGC-1 α には 3 つのアイソフォームがあることを見いだした。 $\beta 2$ アドレナリン受容体刺激や運動によって発現増加するのはこれまでに知られていた PGC-1 α (PGC-1 α -a) ではなく、新しい種類の PGC-1 α (PGC-1 α -b および PGC-1 α -c) であった。

・運動による脂肪酸酸化亢進に関する情報伝達系として、これまで AMPK の関与が想定されていたが、骨格筋の $\alpha 2$ -AMPK 活性を抑制した「骨格筋特異的優性抑制型変異体 $\alpha 1$ -AMPK 発現マウス」を作製し、骨格筋での脂肪酸代謝亢進作用を調べた結果、低強度の運動による脂肪酸酸化亢進作用は $\alpha 2$ -AMPK 活性化によるものでないことが明らかになった。

●肥満/脂肪肝発症原因別の食事療法の考案

・ddY マウスは、人と同じように、砂糖の多量飲料又は高脂肪食により脂肪肝が発症する。この疾患モデルでは、魚油摂取により砂糖摂取による脂肪肝は予防できるが、高脂肪食による脂肪肝に対しては予防ができない。今年度は高脂肪食により脂肪肝に対して有効な食品成分を見いだすため、スクリーニングを行い、 β -コングリシニンが砂糖摂取と高脂肪食による両方の脂肪肝に対して有効であることを見いだした。その機序として、砂糖摂取による脂肪肝に対しては SREBP-1c の活性低下、高脂肪食による脂肪肝に対しては、脂肪吸収の低下と PPAR $\gamma 2$ 活性の低下が推定された。

●エネルギー摂取制限及び栄養素欠乏時に於ける代謝変動の分子メカニズムの研究

・脳出血を発症する SHRSP ラットに於いて、マクロニュートリエントの中で、蛋白質比率が脳出血罹患に最も大きな影響を与えていることがわかった。通常の 10 en%～20 en%の蛋白食に比べて、低蛋白食（7.5 en%以下）で脳出血の増加、高蛋白食（45 en%）で脳出血の著しい減少が認められた。炭水化物比率、脂質比率は脳出血罹患に影響は与えなかった。

食品保健機能プログラム

1. プログラム／プロジェクトの概要

(1) プログラムの概要

中期目標は、健康増進法に基づく業務、及び、「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究を行う。

○健康増進法に基づく業務

- ・厚生労働省が収去した特別用途食品、栄養表示された食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。
- ・特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術が確立している食品成分の試験業務は、検体の受理から試験の回答までを2ヶ月以内に行うことを目指す。
- ・分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。

○健康食品を対象とした食品成分の有効性及び健康影響評価に関する調査研究

- ・保健機能食品等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、栄養表示及び健康表示の側面から、健康影響について調査検討する。
- ・栄養素以外の食品成分から広く健康影響を持つ食品素材をスクリーニングして、癌抑制及び動脈硬化抑制効果等、ヒトにおける有効性評価について細胞モデル及び動物モデルを用いて検討する。

(2) プロジェクトの概要

a. 食品分析プロジェクト

- ・食品分析業務(厚生労働省新開発食品保健対策室との連携)
- ・特別用途食品(病者用食品、乳児用調製粉乳、高齢者用食品、特定保健用食品など)許可時の食品成分分析を行う。
- ・収去食品の分析を行う。
- ・「特定保健用食品関与成分分析方法」の規格化及び技術的示唆。
- ・食品行政における分析に関する技術的サポート

b. 補完成分プロジェクト

- ・予防・治療が望まれる慢性疾患に対して栄養素以外の食品成分から有効な成分を検索し、その有効性を評価する。

c. 食品機能プロジェクト

- ・食品の持つ抗酸化能の生体影響を明らかにするため、日常的に摂取している食品に着目して抗酸化力及び含有抗酸化成分の測定に関する基礎的研究を行う。
- ・食品の抗酸化能について、他機関と連携して統一的な指標の確立を目指す。

(3) 構成メンバー

プログラムリーダー:

山田和彦

プロジェクトリーダー:

永田純一 (食品分析プロジェクト)

矢野友啓 (補完成分プロジェクト)

山田和彦 (食品機能プロジェクト/併任)

研究員:

竹林 純

松本輝樹

特別研究員:

遠藤 香

客員研究員:

江指隆年

中嶋洋子

中川靖枝

清瀬千佳子

久保和弘

協力研究員:

石田達也

佐藤洋美

木戸和貴子

花井美保

馬場貴司

渡部景子

前田剛希、

室田一貴

技術補助員:

佐賀加奈子、中村 礼、小林 香、伊南和佳奈、

二井千日、陳 健斌

研修生:

高野泰幸

中島啓介

原島恵美子

2. 年度計画

a. 食品分析プロジェクト

- ・収去した特別用途食品、栄養表示がなされた食品について表示とおりの栄養素や成分が入っているか確認する。
- ・特定保健用食品の新食品成分への技術的対応を図るための分析技術の規格化。
- ・厚生労働省への特定保健用食品許可申請時の関与成分分析及びそのヒアリング対応。
- ・分析精度管理を行うため、機械器具の保守、試薬等の管理、試験品取扱い及び確認試験実施に関する標準作業書に従った運用を行う。併せて、分析方法及び標準品等の見直し・規格化に関する検討を行う。

b. 補完成分プロジェクト

- 大豆食品加工の際に未利用な画分に多く含まれる機能性成分として特定された BBI について、補完成分としての有用性をマウスモデルを用いて評価すると同時に、BBI の体内動態を解析するための評価法の開発に着手する。
- トコリエノールの補完成分としての有効性を高める技術開発を行い、その有用性を評価する。

c. 食品機能プロジェクト

- 食品からの抗酸化力の摂取量と生活習慣病の発症リスクなどの因果関係を明らかにする研究の第一段階として、日本食品標準成分表に記載されている食品の中から、多数の食品（野菜・果物類を中心に 100 品目以上を目標）の抗酸化力を測定し、食品の抗酸化力データベースを構築する。
- 食品の持つ抗酸化力を個々の物質レベルで明らかにし、その抗酸化物質の吸収率などの体内動態を考慮した抗酸化力評価を目的に、Oxygen Radical Absorbance Capacity (ORAC) アッセイと HPLC ポストカラム法を組み合わせた抗酸化物質の多種同時分析法の開発等、食品中に含まれる抗酸化物質に着目した研究を行う。
- 他機関の研究者と連携し、食品の抗酸化力の測定法として ORAC 法を用いることを広め、ORAC を食品の抗酸化力の統一的な指標とすることに努める。

3. 進捗状況(成果)

a. 食品分析プロジェクト

- 特別用途食品許可時の分析
特定保健用食品を含む特別用途食品許認可時の分析を行っている。特に特別用途食品に関しては表示された栄養成分全般に関して、また特定保健用食品は関与成分の定量および定性分析を行っている。本年度の試験実績は 37 件(うち特定保健用食品 35 件)の分析を行った。
- 特別用途食品および栄養表示食品などの取去食品分析
厚生労働省の指示により各都道府県保健所が栄養成分表示の行われている食品群を取去し、12 月および 3 月中旬を目途に研究所に提出を行う。提出された取去食品の栄養成分分析を行い、市販されているこれらの食品群の栄養成分含有量の確認および適正表示の確認検査を行っている。平成 20 年度に報告した分析食品数は 55 品目であった。
- 特定保健用食品関与成分分析の規格化及び技術的指導
分析方法の規格化に関して従来の分析方法を順次見直すとともに、精度の向上と汎用的な分析方法への変更を促している。また、特定保健用食品申請資料における分析法の確認と適正化の指導を行っている。
- その他

厚生労働省新開発食品保健対策室と連携し、食品行政における適正な分析法の確立と運用に関する対応を適宜行っている。

分析精度の向上と結果に関する適正な評価および情報管理を行うための標準書に基づいた内部管理の実施。

b. 補完成分プロジェクト

- 慢性疾患の補完・代替医療に幅広く適用可能な新たな成分として特定した大豆由来の Bowman-Birk protease inhibitor (BBI) の抗腫瘍活性をマウス腫瘍移植モデルを用いて評価したところ、毒性が認められない経口摂取条件で腫瘍の有意な増殖抑制と肝臓への転移をほぼ完全に抑制した。また、その主な抑制機構として癌抑制遺伝子であるコネキシン 43 遺伝子の機能回復が関与していることを明らかにした。また、現在機能性の高いサプリメント成分として注目されているトコリエノールを包接・安定化することにより、生体利用性が改善されることを確認し、in vivo でのトコリエノールの作用が増強される可能性が推測された。

c. 食品機能プロジェクト

- 種々の生鮮食品素材の抗酸化力を測定しデータベース化することにより、それらを用いた調理品の抗酸化力を推算することが可能であるか明らかにするため以下の研究を行った。34 種のモデル献立を作成し、Oxygen Radical Absorbance Capacity (ORAC) 法で調理品とそれに用いた食品素材の抗酸化力を測定した。それぞれのモデル献立に対して[生鮮素材の抗酸化力を足し合わせた計算値]÷[調理品の抗酸化力の実測値]を求めた結果 91±28 % (平均±S.D.) となり、生鮮食品素材の抗酸化力から調理品の抗酸化力を推算することが可能であると考えられた。しかし、計算値が実測値と大きく相違したサンプル(最大値 170 %、最小値 40 %)が存在したことから、調理による加熱等の影響あるいは素材の組み合わせによる相乗・相殺効果も考えられた。
- 食品の抗酸化が生体に及ぼす影響を把握するには、食品の抗酸化能を測定し数値化すると同時に、食品中の抗酸化成分を同定し、摂取された食品が生体内抗酸化能にどのように影響するか研究する必要がある。市販飲料(茶、コーヒー、野菜ジュース)に着目して抗酸化能を測定し、含有されている抗酸化物質を同定、定量するための実験手法について検討している。また、血中抗酸化能測定法についても調査、検討を開始した。
- 平成 19 年度に複数機関の研究者と共同して確立した ORAC 法による食品の抗酸化力の測定方法をまとめ「食品機能性評価マニュアル第 II 集」に記載した。現在、分析方法の妥当性に関する研究室間試験を行っている。

情報センター

1. センター／プロジェクトの概要

(1) センターの概要

情報センターは、当研究所の情報発信の中核としての役割を担っており、健康と運動・栄養に関する研究成果や関連情報を収集・分析し、国民の健康づくりに役立つ情報としてホームページやニュースレターを通じて発信する。また、特定保健用食品(特保)や栄養機能食品といった保健機能食品制度に関する基礎的情報、いわゆる健康食品が関連した被害情報など、国の健康や食品・栄養に係わる制度を効果的に普及させるための取り組みを行う。

(2) プロジェクトの概要

a. 健康食品プロジェクト

健康食品に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止ならびに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、幅広く公開する。情報はホームページで一般公開し、ページアクセス数を6,000件/日以上維持できるようにする。また、社会的ニーズの把握、消費者とのリスクコミュニケーションの一つとして、現場の専門家、関係機関との連携が可能な新たなシステムの構築を検討する。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

所内の他のプログラムとの連携等により、これまでに収集・蓄積してきた情報をホームページ等を通じて継続発信するとともに、必要な情報の更新に努める。また、国民の要望や意見、健康・栄養分野の専門家が必要とする情報を、各種セミナー・シンポジウム等の機会や情報技術を用いて把握する。

c. IT支援プロジェクト

研究所の活動情報についてのデータベースや特許情報他、研究所の対外的な総合情報発信の基盤として、インターネットネットワーク、内部における研究活動の促進とデータの活用を促すためのイントラネットワーク、双方にまたがる総合的なネットワークシステムの基盤整備を行う。

(3) 構成メンバー

センター長：

梅垣敬三

プロジェクトリーダー：

梅垣敬三 (健康食品情報プロジェクト、～6月、11月～/併任)

卓 興鋼 (健康食品情報プロジェクト/7月～10月)

卓 興鋼 (健康・栄養情報プロジェクト/11月～)

廣田晃一 (IT支援プロジェクト)
(健康・栄養情報プロジェクト/～10月)

上級研究員

笠岡(坪山) 宣代 (11月～/健康食品情報プロジェクト併任)

研究員：

卓 興鋼 (～6月)

特別研究員：

瀧 優子

佐藤陽子

客員研究員：

橋本洋子 (秋草学園短期大学)

梅國智子 (人間総合科学大学)

技術補助員：

鈴木順子、古池直子、細井俊克、海老原美樹、梅澤淳、小島彩子(5月～)、中西朋子、佐々木菜穂、渡邊真紀子(～7月)、林欽、高橋穂澄(10月～)、米澤加代(9月～)、青木律子(12月～)、ナンティガ・バーゴーナ(6月～12月)、西山聡子(12月～)、山本紀子(3月～)、佐藤美津代(1月～)

研修生：

横谷馨倫 (昭和女子大学)

田山優子 (東京家政大学)

前島 恵 (東京家政大学)

山口 舞 (東京家政大学)

長崎友里 (昭和女子大学)

三浦志穂 (昭和女子大学)

荻野悠斗 (人間総合科学大学)

渡辺早季 (東京家政大学)

藤丸愛理 (東京家政大学)

西邑瑛美 (昭和女子大学)

千原佑香 (昭和女子大学)

2. 年度計画

a. 健康食品プロジェクト

・科学的根拠に基づく最新の健康食品情報、ならびに国内外の危害情報を継続的に蓄積し、ホームページ上で公開する。平成20年度は、特に既載情報の見直しと新たに特別用途食品の製品情報を公開するための準備作業に取り組む。また、健康食品全般として情報収集と提供をより効果的に実施するための関連機関との連携について重点的に対応する。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

・平成20年9月27日に、オープンハウスとして、運動実験施設等における体験コーナーや食事・体力診断等を含めて、研究所の研究・業務内容をより多くの人に

身近に知ってもらえるよう努める。また、アウトリーチ活動の一環として、中学・高校生等の見学にも積極的に応じ、健康や栄養にかかわる知識や関心の普及を図る。

c. IT 支援プロジェクト

- ・外部からの相談・問い合わせに効率的に対応するため、頻度の高い質問等については、よくある質問 (FAQ) としてとりまとめを進め、平成 20 年度は食事バランスガイドに関する FAQ を整備しホームページ上で公開する。
- ・ホームページ上で意見、要望等を収集するために試験的に公開したコミュニケーションチャンネル (『健康・栄養フォーラム』) について引続きセキュリティ等のチェックを進め、正式公開する。
- ・研究所の活動内容・成果等をホームページや『健康・栄養ニュース』(年 4 回刊行) を介して積極的に配信する。

3. 進捗状況 (成果)

a. 健康食品プロジェクト

- ・「健康食品の安全性・有効性情報」に関して、ニーズ把握及びデータベースのアップデート等に努めた。具体的には、国内外の安全情報・被害関連情報の提供 (週に 1-2 回)、健康食品素材に関する学術論文情報の収集とデータベースへの追加 (週に 2-3 件)、話題の成分に関する解説情報 (ビタミンとミネラル、特定保健用食品の上手な利用法、サプリメントと子供の食事、など) の作成と既載情報の修正・更新、ネット会員への更新情報のお知らせメール送付 (月 1 回) である。なお、「健康食品の安全性・有効性情報」のアクセス数 (ページアクセス) は、平日では約 8,000 件/日であった。
- ・特別用途食品の製品情報を収集して公開するとともに、新たに公開する予定の「特別用途食品・栄養療法エビデンス情報」の設計を行った。
- ・就学前の子どもを対象にサプリメント利用に関する予備的な実態調査を行い、親のサプリメントの利用や栄養・食品に関する誤解が、子どものサプリメント利用に関連していることを明らかにした。
- ・外部機関とも連携して健康食品の素材に関する安全性情報を収集するとともに、イチョウ葉エキスやコレウス・フォルスコリの安全性に関する実験的な検証を行った。
- ・「健康食品」の安全性・有効性情報データベースから危害情報を抜粋し、利用者の体質、医薬品の併用、過剰

摂取などが健康被害要因になっていることを明らかにした。

b. 健康・栄養情報プロジェクト

- ・研究所の公開 (オープンハウス) を平成 20 年 9 月 27 日 (土) に実施した。参加者は昨年 (212 名) であり、食生活診断や骨密度測定、健康体力診断及び健康フィットネス体験、所内見学ツアー、講演、インターネット体験、書籍展示、パネル展示・ビデオ上映などの実施内容も好評であった。また、高校生の見学にも積極的に応じ、健康や栄養にかかわる知識や関心の普及に努めた。
- ・健康・栄養研究に必要とする関連学術雑誌などの情報を収集し、ホームページにて提供した。
- ・大豆イソフラボンの血中脂質、骨 BMD、骨代謝マーカーへの影響について、メタ分析による評価を行った。
- ・機能性食品因子データベース (FFF データベース) の維持管理、外部からの問い合わせに適切に対応した。
- ・厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課新開発食品保健対策室に兼業し、特定保健用食品の表示許可にかかる審査に関する助言等を行った。

c. IT 支援プロジェクト

- ・当研究所の公式ホームページを始めとする各種サイトの維持管理と更新、当研究所各プログラムにおける研究成果・関連情報を公開した。また、今年度は研究所ホームページ (トップページ) の表示を大幅に変更した。平成 20 年 7 月 17 日 (変更日) ~平成 21 年 3 月 31 日までのページアクセス数は約 75 万件であった。
- ・平成 19 年度に作成した「保健指導 (食事、運動等)」に関する FAQ をさらに充実させ、食事バランスガイドに関する FAQ を整備しホームページ上で公開した。
- ・ニュースレター『健康・栄養ニュース』を予定通り発行、またホームページ上で公開するとともに、メールマガジンとして希望者に電子配信した (4 回)。
- ・ホームページ上で意見・要望等を収集するための新たなコミュニケーションチャンネル「健康・栄養フォーラム」を平成 21 年 3 月 1 日に正式公開した。
- ・「独立行政法人 国立健康・栄養研究所 情報ネットワークセキュリティポリシー」の改訂及び、「独立行政法人 国立健康・栄養研究所 情報セキュリティ対策実施手順」を制定し、これを遵守することで情報のセキュリティ確保に努めた。
- ・メールや電話での外部からの相談・問い合わせ等に関して的確な対応に努めた。

国際産学連携センター

1. センター／プロジェクトの概要

(1) センターの概要

国際産学連携センターは、当研究所の対外部門として、アジア地域をはじめとする国際的な研究ネットワークの構築、海外との学术交流や若手外国人研究者の受け入れ、大学や企業等との連携による研究開発、国際シンポジウムやセミナーの開催など、当研究所が国内外の関係機関等と連携して行うさまざまなプログラムの調整役を担っている。

(2) プロジェクトの概要

a. 国際栄養プロジェクト

国際栄養プロジェクトは国際的な学术交流(招へい事業、セミナー開催等)、情報提供及び国際機関との協力を行う。具体的には、海外からの研修生の受け入れ(「若手外国人研究者招へい事業」等)、国際シンポジウムの開催、アジア各国との共同研究、WHO など国際機関への協力・連携、海外向け情報発信等を通じて、国際的な研究ネットワーク構築を図ることを目指している。

b. 生物統計プロジェクト

統計学的観点から特定保健用食品等の有効性評価を目的としたヒト試験デザインに関して、検討を行う。メタボリックシンドローム等に関連する各種健康・栄養指標に関して、国全体としての推移、また都道府県地域差等を評価する手法の検討及び将来予測のためシミュレーションを行う。

c. NR・セミナー・社会ニーズ関係

「対外部門」としての国際産学連携センターの中で、講演会・セミナー等を通じた人材育成、栄養情報担当者(NR)の学術的基盤づくり、行政部門との各種調整等を行っている。

- ・NR業務(事務部業務課との連携):栄養情報担当者(NR)事業の学術面(試験、研修等)への対応を行う。NR制度のあり方や研究所の関わりについて検討を行う。

- ・セミナー業務:管理栄養士等の専門家を対象としたセミナーの企画・運営、外部団体・機関と連携した各種人材育成プログラムの企画等を、中長期的な視点から行う。研究の成果を社会に還元するため、一般向けセミナーを開催する。社会的ニーズを把握するため関連機関等と定期的な情報交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握する。

(3) 構成メンバー

センター長:

芝池伸彰 (併任/理事)

プロジェクトリーダー:

水野正一 (生物統計プロジェクト)

上級研究員:

笠岡(坪山)宣代

研究員:

三好美紀

技術補助員:

桑木泰子、角倉知子、小原恭子

2. 年度計画

a. 国際栄養プロジェクト

- ・「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」で1名(ベトナム)の研究者を受け入れる。また、同事業による過去の招へい研究者と受入研究者との共同研究を推進することを目的としたフォローアップ共同研究事業を開始する。研究所の研究成果、栄養行政に関する資料について、適時、英語版ホームページを通じて情報発信を行う。WHO、CODEX、OECD等の国際機関への協力を積極的に行うとともに、連携を強化する。WHO指定研究協力センターを設置する。

b. 生物統計プロジェクト

- ・臨床試験のデザイン、結果の解析、メタ分析等において生物統計学的観点から食品の機能性評価を行う。メタボリックシンドローム関連健康指標評価のための横断的、長期縦断的データの構築と解析をおこなう。

c. NR・セミナー・社会ニーズ関係

- ・NRの資格取得後のフォローアップ研修として、全国5~6カ所で研修会を実施。遠隔教育システムについても検討する。NRに関して情報収集、モニタリング調査等を行い、外部有識者による検討委員会であり方を検討する。一般向けの公開セミナー(第10回)を、平成21年2月に東京で開催する。健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等との意見交換会を年6回程度開催する。

3. 進捗状況(成果)

a. 国際栄養プロジェクト

- ・海外の研究機関との交流・共同研究および国際機関の活動への対応

ベトナム国立栄養研究所における人材育成を目指した研究協力の準備をすすめている。また、前年度より引き続き、WHO西太平洋地域における“Diet, Physical Activity and Health”の栄養学研究のWHO指定研究協力センターの設立に向けて準備中であり、WHO本部およびWHO西太平洋地域事務局の栄養担当官と具体的な連絡調整を進めている。

近年、国際栄養協力の重要性への認識が高まる一方で、これまで優先順位の高い課題やその解決策を系統的に検討したり、人材の確保・育成のための仕組みづくりがなされてこなかった。そこで、研究所が中核と

なり、国内の国際栄養分野の研究者及び研究機関との連携を強化し、国際栄養のネットワークを構築することを目的として平成 19 年 4 月に「国際栄養拠点ネットワーク検討会」を立ち上げた。同検討会における議論の成果を踏まえて平成 20 年 6 月に報告書を作成し、国内の国際栄養分野の研究者及び研究機関との連携強化、基盤づくりを行った。

・海外からの訪問・研修受入

本年度は中国、タイ、シンガポール、フランス、オランダおよびアジア医学生連絡協議会からの研究者の訪問を受け入れ、要請に応じて該当分野のプログラムとの打ち合わせの準備調整を行った。

本年度の「若手外国人研究者招へい事業」では、1 名（ベトナム）の研究者を受け入れ、受入研究者との共同研究が進められた。また、新規事業として過去の招へい研究者と受入研究者との共同研究を推進することを目的としたフォローアップ共同研究事業をマレーシアにおいて実施した。来年度の招へい研究者 2 名が決定しており、現在、受入および来日に係る準備手続きを進めている。

・国際シンポジウム・セミナー

研究所が主催する代表的な国際シンポジウムである「アジア栄養ネットワークシンポジウム」は平成 15 年度より隔年で開催されている。平成 18 年 3 月 3 日に開催した「第 2 回アジア栄養ネットワークシンポジウム」の講演集を Asian Pacific Journal of Clinical Nutrition の増刊号として発行し、アジアにおける食事摂取基準と食生活指針の連携を図るとともに、世界に向けて情報を発信した。専門家を対象とした日米ワークショップ「肥満対策への取り組み」を 8 月 29 日に開催し、今後も両国間で肥満対策に対する情報を交換することになった。

日米シンポジウム「食品の機能と表示の最新動向」を 12 月 1 日に開催し、国内外の専門家と議論を行い、社会ニーズの把握に努めた。

・広報・情報発信

英語版ホームページを通して、研究所の研究成果、栄養行政の情報を発信している。研究所のニュースレター「健康・栄養ニュース」（年 4 回発行）の英語版「Health and Nutrition News」を作成し、英語版ホームページに掲載している。また、専門課題のサイト拡充に努めており、「国民健康・栄養調査（概要）」の英訳版を掲載した。英語版ホームページに問い合わせ用メールアドレスを掲載し、海外からの問い合わせに対応している。また、第 15 回国際栄養士会議においてブース出展による研究所の紹介、諸外国の栄養士との意見交換を行ない、国際的な栄養士ネットワーク構築を図った。

b. 生物統計プロジェクト

「食後の血糖値の上昇を穏やかにする」特定保健用食品（特保）のヒト試験に関して統計学的に妥当性を評価し、食後の血糖の抑制については有効性を確認したが、糖尿病予防としての空腹時血糖、HbA1c の抑制に関しては結果は十分ではなかった。また、いくつかの機能性食

品の臨床試験の統計的解析、メタ分析に積極的に関与した。

肥満はメタボリックシンドロームの上流に位置づけられるため、アメリカでは BMI を評価指標として、成長期の肥満への対策が始められている。今回、最近の学校保健統計を解析し、我が国の成長期における肥満の動向を評価した。

メタボリックシンドローム関連指標として肥満等の評価を行うため、地域住民等を対象としての 30 年規模の健診時データに基づく retrospective-cohort の構築とその解析のためのプロトコールの作成に着手した。

c. NR・セミナー・社会ニーズ関係

・NR の養成・認定

公平・公正な制度運用を期すために、外部有識者を加えた NR 認定委員会を開催し、厳格な試験を実施した。

平成 20 年度に実施した「第 5 回栄養情報担当者（NR）認定試験」（平成 20 年 6 月 15 日実施）では、新たに 798 名の NR（受験者数 1,404 名、合格率 56.8%）が誕生し、累計で 3,480 名に NR の資格を付与した。また「第 6 回資格確認試験」平成 20 年 11 月 16 日実施）では、受験者数 217 名、合格者 83 名（合格率 38.2%）であった。

養成講座については、平成 20 年度に新たに 2 講座を指定し、全国における講座数は計 39 講座となった。

・NR 事業の学術面への対応

資格確認試験（第 6 回；平成 20 年 11 月）、NR 認定試験（第 5 回；平成 20 年 6 月、第 6 回；平成 21 年 6 月）の問題作成に関わる進行管理を行った。過去問題のデータベース化等を通じて、問題作成の効率化を図った。

・NR 研修会の開催

NR のスキルアップの一環として、当研究所が主催するフォローアップ研修会を、全国 6 カ所（仙台、東京、名古屋、大阪、岡山、福岡）で開催、他団体との相互単位認定を行った。

・NR 制度のあり方に関する検討

NR の活動状況等の現状と課題を踏まえ、NR 制度をさらに発展させるとともに、社会的ニーズに対応した環境を整備するため、NR に対するフォローアップのアンケート調査や、NR 養成講座の連絡会議の開催により、現状把握及び問題点の抽出を行った。外部有識者を加えた「NR 制度のあり方検討委員会」を立ち上げ、平成 19 年度中に 2 回の委員会を開催し、平成 20 年度に委員会意見の最終報告書を作成した。

・健康食品管理士認定協会との協力関係を深め、協会主催の研修会参加で認定更新に必要な単位を付与した。

・社会ニーズの把握、意見交換会

健康・栄養に関する機関（（独）農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所、（独）国民生活センター、NPO 法人日本健康運動指導士会、（社）日本栄養士会、（財）健康・体力づくり事業財団、東京都健康安全研究センター）との「意見交換会」を年 6 回

実施した。また、厚生労働省医薬食品局食品安全部及び健康局総務課生活習慣病対策室との間で、実務者レベルでの情報及び意見交換会を行い、行政ニーズに適宜対応した業務体制を整えるとともに、平成 21 年度計画に反映させた。

- ・セミナーの開催

第 10 回一般公開セミナー(テーマ：生活習慣と健康～メタボリックシンドロームを予防するために～)を平成 21 年 2 月 28 日(土)に開催した。プロレスラーの藤波辰爾氏による特別講演を企画し、一般の参加者に身近で、興味を引く内容とし好評を得た。

また、栄養士・管理栄養士の研修や生涯教育のプログラムに対し、職員を積極的に派遣するとともに、それらのプログラムの企画等への支援を行った。さらに、栄養士・管理栄養士の資質向上を目指し、関連サイトの監修・執筆等の活動を通じたネットワークづくりを進めた。

Ⅲ 研究成果等の公表

1. 業績目録

【著書】

a. 英文

- 1) Uehara M, Ishimi Y, Katsumata S, Suzuki K: Chapter8 Transformation of daidzein to equol and its bioactivity. Functional Food and Health. 2008; , American Chemical Society, Washington, DC
- 2) Yamada K: Today's circumstances and problems of dietary fiber in Japan - definition, analytical methods and energy value. Gordon TD, and Goda T. Dietary fiber-an international perspective for harmonization of health benefits and energy values. 2008; 25-30, AACC International, Inc. (St. Paul, USA)
- 3) Yano T, Nantiga V: Anti-cancer effects of tocotrienols and tocopherols irrespective of anti-oxidant properties . Tocotrienols:Vitamin E beyond Tocopherols. 2008, AOCS
- 11) 宮地元彦, 岡本正一, 三船智美, 新倉佳奈江: メタボ解消! 10分エクササイズ on DVD. 宮地元彦監修. 2008; 1-27, (株) 社会保健研究所
- 12) 宮地元彦: 2章: 運動・スポーツの生理学(1)、12章: 生活習慣病予防と運動・スポーツ(2)-高血圧症・動脈硬化-, 15章: 老化防止・介護予防と運動・スポーツ. 樋口満, 福永哲夫(編)、放送大学大学院文化科学研究科テキスト「スポーツ・健康科学」. 2009; 25-46, 191-207, 242-259, (財) 放送大学教育振興会
- 13) 宮地元彦: VI 生活習慣改善指導【2】運動・身体活動指導. 健診判定基準ガイドライン{改訂新版}. 2008; 282-289, 文光堂
- 14) 宮地元彦: Section 10 トレーニングと循環、2: 心拍出量と血管. 宮村実晴(編)、身体トレーニングー運動生理学からみた身体機能の維持・向上. 2009; 288-294, 真興交易
- 15) 宮地元彦: 生活習慣病対策と介護予防における体力の重要性. 体力の重要性と測定・評価 一新体力テスト. 2008; 1-17, (財) 健康・体力づくり事業財団

b. 和文

- 1) 森田明美, 佐々木敏, 渡邊昌: 食事指導のための基礎知識 食事摂取基準. 日本医師会 編 食事指導のABC(改訂第3版). 2008; 114-129, 日本医事新報社
- 2) 森田明美: 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック. 第一出版. 2008; 56-67
- 3) 西牟田守: ミネラルの食事摂取基準. 糸川嘉則監修 ミネラルの科学と最新応用技術. 2008; 95-103, シーエムシー出版
- 4) 石見佳子, 呉堅: トレーニングと骨格 栄養と運動の併用. 宮村実晴編 身体トレーニング. 2009, 真興交易医書出版部
- 5) 石見佳子: 骨粗鬆症、動物実験, 試験管内実験による研究、人を対象とした研究. 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック. 2008, 第一出版
- 6) 石見佳子: 第1部第8章イソフラボンのヒトの健康における役割(介入研究から). 食品機能性の科学. 2008, 産業技術サービスセンター
- 7) 坪田(宇津木)恵: 野菜・果物摂取と高血圧発症の関連: 大迫研究. 血圧. 2009; 16(3):206-207, 先端医学社
- 8) 由田克士: 栄養の現状~国民健康・栄養調査より. 「食生活」編集部 編 栄養指導のためのメタボ対策ガイドブック. 2008; 42-47, カザン
- 9) 引原有輝, 宮地元彦: 身体活動量の測定・評価. 運動療法と運動処方{第2版} 佐藤祐造編. 2008; 95-100, 文光堂
- 10) 家光素行, 宮地元彦: 運動の効果 PWV および中心動脈から見た予防医学と生活習慣. 小澤利男編 新しい血圧測定と脈波解析マニュアル. 2008; 186-189, MEDICAL VIEW
- 11) 宮地元彦: Section 10 トレーニングと循環、2: 心拍出量と血管. 宮村実晴(編)、身体トレーニングー運動生理学からみた身体機能の維持・向上. 2009; 288-294, 真興交易
- 12) 宮地元彦: 生活習慣病対策と介護予防における体力の重要性. 体力の重要性と測定・評価 一新体力テスト. 2008; 1-17, (財) 健康・体力づくり事業財団
- 13) 宮地元彦: 生活習慣病予防に関する保健指導、特定健診・保健指導における運動・身体活動指導. 人間ドック健診情報管理指導士テキスト 第2版ー特定健診・特定保健指導(監修: 奈良昌治, 山門寶). 2008; 176, 361-179, 368, 人間ドック学会
- 14) 宮地元彦: 体力・運動能力/身体組成の測定・評価. 運動療法と運動処方{第2版} 佐藤祐造編. 2008; 101-109, 文光堂
- 15) 宮地元彦: 第1章: 特定保健指導における運動・身体活動指導の基本的な考え方、第5章: 運動指導におけるリスクマネジメント. 宮地元彦(編) 行動変容につなげる保健指導スキルアップBOOK「エビデンスと運動実践から学ぶ運動指導」. 2009; 1-192, 中央法規
- 16) 宮地元彦: 第2章: 運動生理学. 青木純一郎、田畑泉ら(編)、健康運動実践指導者養成用テキスト. 2009; 13-28, (財) 健康・体力づくり事業財団
- 17) 大河原一憲, 田中茂穂: 3.2 肥満の予防および改善に必要な身体活動量. 安部孝 編 トレーニング科学 最新エビデンス. 2008; 96-106, 講談社サイエンティフィク
- 18) 大河原一憲: 運動・身体活動のメタボリックシンドローム改善に対するエビデンス. 宮地元彦編、エビデンスと実践事例から学ぶ運動指導. 2009; 41-70, 中央法規

- 22) 谷本道哉, 石井直方: ストレッチ・メソッド. 高橋書店. 2008;
- 23) 田中茂穂: 運動・身体活動量の測定と評価. 宮地元彦編, エビデンスと実践事例から学ぶ運動指導. 2009; 24-40, 中央法規
- 24) 田中茂穂: 運動療法の原則. 小児科臨床ピクシス6 小児メタボリックシンドローム. 2009; 164-165, 中山書店
- 25) 田中茂穂: 身体活動量の定量法とその実際. 運動指導者担当研修. 2009; 299-314, 中央労働災害防止協会
- 26) 田中茂穂: 第1部: 基本技術 エネルギー消費量測定の方法. 中村丁次・山本茂 編集主幹 管理栄養士技術ガイド. 2008; 12-17, 文光堂
- 27) 田畑泉: 健康運動実践指導者養成用テキスト. 青木純一郎, 川久保清, 沢井史穂, 田畑泉 編 健康運動実践指導者養成用テキスト. 2009; , 健康・体力づくり事業財団
- 28) 林貢一郎, 宮地元彦: 婦人科における応用 PWV および中心血圧の臨床応用. 小澤利男編 新しい血圧測定と脈波解析マニュアル. 2008; 178-181, MEDICAL VIEW
- 29) 門脇孝: あなたがメタボになる理由―「肥満遺伝子」が日本人を太らせる. PHP エディターズ・グループ. 2008; , PHP 研究所
- 30) 門脇孝: 驚異の脂肪細胞. 科学. 2008; 78(6); , 岩波書店
- 31) メリッサ・メルビー, 富永国比古: ベジタリアンは長寿か―アンチエイジング (抗加齢) 医学からの検証. アンチエイジング医学の基礎と臨床. 2008; 234-235, Medical View
- 32) 饗場直美, 中出麻紀子: 『食育』はわれわれの生活の中にどこまで浸透してきているか?. 食生活. 2008; 102(10):54-59, カザン
- 33) 饗場直美: メタボリックシンドローム脱出に役立つ食事法と食品. メタボリックシンドロームを治す知恵とコツ 主婦の友社. 2008; 132-136
- 34) 饗場直美: 特定保健指導実践者のための保健指導の実際. 2008; 日経BP社
- 35) 手嶋登志子: 摂食嚥下障害を考える―口から食べる幸せづくり (第2集). 2008; カザン
- 36) 手嶋登志子: 訪問栄養食事指導実践の手引―在宅での栄養ケアのすすめ方. 日本医療企画. 2008;
- 37) 江崎治: C. 肥満 D. 糖尿病. 独立行政法人 国立健康・栄養研究所監修 健康・栄養食品アドバイザースタッフ・テキストブック. 2008; 269-278, 第一出版
- 38) 江崎治: 食事指導のための基礎知識 アルコール. 日本医師会編 食事指導のABC (改訂第3版). 2008; 96-99, 日本医事新報社
- 39) 江崎治: 第5章 抗肥満に関わる骨格筋の役割: カロリー制限と運動療法の理論と実際. 河田照雄, 斉藤昌之, 小川正編 肥満と脂肪エネルギー代謝―メタボリックシンドロームへの戦略―. 2008; 85-108, 建帛社
- 40) 池上幸江, 山田和彦: アメリカ、ヨーロッパ、CODEXにおける食物繊維の定義と考え方. 日本食物繊維学会編集委員会編, 食物繊維 - 基礎と応用. 2008; 15-21, 第一出版
- 41) 矢野友啓: サプリメントは必要なもの? ; サプリメントと薬を併用する際の注意点は?. 女性とくすり Q&A-患者に適した薬剤選択のために-. 2008; , じほう
- 42) 佐藤陽子, 梅垣敬三: サプリメント. 日本医師会編, 食事指導のABC (改訂第3版). 2008; 422-424, 日本医事新報社
- 43) 卓興鋼, 陳健斌, 渡邊昌: 栄養素以外の食品成分. 日本医師会編. 食事指導のABC 改定第3版. 2008; 100-103, 日本医事新報社
- 44) 卓興鋼: 特定保健用食品データブック. 2008; 南山堂
- 45) 梅垣敬三: サプリメントのエビデンス. 日本抗加齢医学会編, アンチエイジング医学の基礎と臨床 (改訂版). 2008; 248-249, メディカルビュー社
- 46) 梅垣敬三: 健康食品の利用に関する基礎知識. 社団法人静岡県薬剤師会編, スキルアップのためのサプリ・トクホ相談Q&A . 2008; 2-6, 南山堂
- 47) 渡邊昌: 栄養学原論. 2009; 南江堂

【原著論文】

a. 英文

- 1) Abe K, Tamaki J, Kadowaki E, Sato Y, Morita A, Komatsu M, Takeuchi S, Kajita E, Iki M: Use of anthropometric indicators in screening for undiagnosed vertebral fractures: a cross-sectional analysis of the Fukui Osteoporosis Cohort (FOC) study. BMC Musculoskelet Disord. . 2008; 26(9):157
- 2) Goshima M, Murakami T, Nakagaki H, Shibata T, Sugiyama T, Kato K, Narita N, Nishimuta M: Iron, Zinc, Manganese and Copper Intake in Japanese Children Aged 3 to 5 Years. J Nutr Sci Vitaminol. 2008; 54(6):475-482
- 3) Ishimi Y, Oka J, Tabata I, Ohtomo T, Ezaki J, Ueno T, Uchiyama S, Toda T, Uehara M, Higuchi M, Yamada K, Wu J: Effects of Soybean Isoflavones on Bone Health and its Safety in Postmenopausal Japanese Women. J Clin Biochem Nutr. 2008; 43(suppl 1):48-52
- 4) Kamon Y, Okamura T, Tanaka T, Hozawa A, Yamagata Z, Takebayashi T, Kusaka Y, Urano S, Nakagawa H, Kadowaki T, Miyoshi Y, Yamato H, Okayama A, Ueshima H, Yoshita K: Marital status and cardiovascular risk factors among middle-aged Japanese male workers: the High-risk and Population Strategy for Occupational Health Promotion (HIPOP-OHP) study.. J Occup Health. . 2008; 50(4):348-356

- 5) Katsumata S, Uehara M, Ishimi Y, Adlercreutz H, Suzuki K: Dose-response relationship between isoflavone supplementation and bone and uterine weight in ovariectomized mice. *J Clin Biochem Nutr.* 2008; 43 (suppl 1):136-140
- 6) Koitaya N, Ezaki J, Nishimuta M, Yamauchi J, hashizume E, Morishita K, Miyachi M, Sasaki S, Ishimi Y: Effect of low dose of vitamin K2 (MK-4) supplementaion on bio-indices in postmenopausal Japanese women. *J Nutr Sci Vitaminol.* 2009; 55:15-21
- 7) Melby MK, T.Utsugi M, Miyoshi M, Watanabe S: Overview of nutrition reference and dietary recommendations in Japan: application to nutrition policy in Asian countries.. *Asia Pac J Clin Nutr.* 2008; 17(S2):394-398
- 8) Morikawa Y, Miura K, Sasaki S, Yoshita K, Yoneyama S, Sakurai M, Ishizaki M, Kido T, Naruse Y, Higashiyama M, Nakagawa H: Evaluation of the effects of shift work on nutrient intake: a cross-sectional study. . *J Occup Health.* 2008; 50(3):270-278
- 9) Na XL, Ezaki J, Sugiyama F, Cui HB, Ishimi Y: Isoflavone regulates lipid metabolism via expression of related genes in OVX rats fed on a high-fat diet . *Biomed Environ Sci.* 2008; 21:357-364
- 10) Ohtomo T, Uehara M, Penalvo JL, Adlercreutz H, Katsumata S, Suzuki K, Takeda K, Masuyama R, Ishimi Y: Comparative activities of daidzein metabolites, equol and O-deoxymethylangolensin, on bone mineral density and lipid metabolism in ovariectomized mice and in osteoclast cell cultures.. *Eur J Nutr.* 2008; 47(5):273-279
- 11) Shibata T, Murakami T, Nakagaki H, Narita N, Goshima M, Sugiyama T, Nishimuta M: Calcium, magnesium, potaasium and sodium intake in Japanese childrem aged 3 to 5 years. *Asia Pacific J Clin Nutr.* 2008; 17(3):441-445
- 12) T.Utsugi M, Ohkubo T, Kikuya M, Kurimoto A, Sato R, Suzuki K, Metoki H, Hara A, Tsubono Y, Imai Y: Fruit and vegetable consumption and the risk of hypertension determined by self measurement of blood pressure at home: the Ohasama study.. *Hys Res.* 2008;31:1435-1443
- 13) T.Utsugi M, Saijo Y, Yoshioka E, Sato T, Horikawa N, Gong Y, Kishi R: The relationship of occupational stress to arterial stiffness: a cross sectional study in Japanese workers. *International Archives of Occupational and Enviromental Health.* 2009; 82(2):175-183
- 14) Tamaki J, Ikeda Y, Morita A, Sato Y, Naka H, Iki M: Which element of physical activity is more important for determining bone growth in Japanese children and adolescents: the degree of impact, the period, the frequency, or the daily duration of physical activity? . *J Bone Miner Metab.* 2008; 26(4):366-72
- 15) Wakita Asano A, Miyoshi M, Arai Y, Yoshita K, Yamamoto S, Yoshiike N: Association between Vegetable Intake and Dietary Quality in Japanese Adults: A Secondary Analysis from the National Health and Nutrition Survey, 2003. . *J Nutr Sci Vitaminol.* 2008; 54(5):384-391
- 16) Cao ZB, Miyatake N, Higuchi M, Ishikawa-Takata K, Miyachi M, Tabata I: Prediction of Vo_{2max} with daily step counts for Japanese adult women. *European Journal of Applied Physiology.* 2009; 105(2):289-296
- 17) Cao ZB, Tabata I, Nishizono H: Good maintenance of physical benefits in a 12-month exercise and nutritional intervention by voluntary, home-based exercse: a 6-month follow-up of a randomized controlled trial. *J Bone Miner Metab.* 2009; 27:182-189
- 18) Chida D, Hashimoto O, Kuwahara M, Sagara H, Osaka T, Tsubone H, Iwakura Y: Increased fat-to-carbohydrate oxidation ratio in IL-1Ra^{-/-} mice on a high fat diet is associated with increased sympathetic tone.. *Diabetologia.* 2008; 51:1698-1706
- 19) Ishikawa-Takata K, Tabata I, Rafamantanantsoa HH, Okazaki H, Okubo H, Tanaka S, Yamamoto S, Shirota T, Uchida K, Murata M: Physical activity level in healthy free-living Japanese estimated by doubly labelled water method and international physical activity questionnaire. *Eur J Clin Nutr.* 2008; 62:885-891
- 20) Kawano H, Nakagawa H, Onodera S, Higuchi M, Miyachi M: Attenuated increases in blood pressure by dynamic resistance exercise in middle-aged men. *Hypertension Research.* 2008; 31(5):1045-1053
- 21) Kiba T, Kintaka Y, Suzuki Y, Nakata E, Osaka T, Ishigaki Y, Inoue S: Changes of neuron-specific and apoptosis gene expression levels after ventromedial hypothalamic lesions in rat intestine. *Exp Biol Med.* 2008; 233:1368-1378
- 22) Miyatake N, Miyachi M, Nishikawa H, Saito T, Numata T: Comparison of whole body reaction time between Japanese men with and without metabolic syndrome. *Int J Sports Health.*

- 2007; 5:122-124
- 23) Miyatani M, Kawano H, Masani K, Gando Y, Yamamoto K, Tanimoto M, Oh T, Usui C, Sanada K, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: Required muscle mass for preventing lifestyle-related diseases in Japanese women. *BMC Public Health*. 2008; 18(8):291
- 24) Miyatani M, Masani K, Oh PI, Miyachi M, Popovic MR, Craven BC: Pulse wave velocity for assessment of arterial stiffness among people with spinal cord injury: a pilot study.. *J Spinal Cord Med*. 2009;32(1):72-78
- 25) Ohkawara K, Nakadomo F, Nakata Y, Deurenberg P, Tanaka K: Bioelectrical impedance spectroscopy and single-frequency bioelectrical impedance analysis for estimating fat mass change during weight loss in Japanese female subjects. *Int J Body Comp Res*. 2008; 6(3):100-107
- 26) Ohkawara K, Tanaka S, Ishikawa-Takata K, Tabata I: Twenty-four-hour analysis of elevated energy expenditure after physical activity in a metabolic chamber: models of daily total energy expenditure. *Am J Clin Nutr*. 2008; 87(5):1268-1276
- 27) Okubo H, Sasaki S, Rafamantanantsoa HH, Ishikawa-Takata K, Okazaki H, Tabata I: Validation of self-reported energy intake by a self-administered diet history questionnaire using the doubly labeled water method in 140 Japanese adults. *European Journal of Clinical Nutrition*. 2008; 62:1343-1350
- 28) Osaka T, Tsukamoto A, Koyama Y, Inoue S: Central and peripheral administration of amylin induces energy expenditure in anesthetized rats. *Peptides*. 2008; 29:837-846
- 29) Osaka T: Blockade of prostaglandin E(2)-induced thermogenesis by unilateral microinjection of GABA(A) receptor antagonist into the preoptic area.. *Brain Research*. 2008; 1230:107-114
- 30) Osaka T: Prostaglandin E2 fever mediated by inhibition of the GABAergic transmission in the region immediately adjacent to the organum vasculosum of the lamina terminalis. *Pflügers Archiv European Journal of Physiology*. 2008; 456:837-846
- 31) Tanimoto M, Kawano M, Gando Y, Sanada K, Yamamoto K, Ishii N, Tabata I, Miyachi M: Low-intensity resistance training with slow movement and tonic force generation increases basal limb blood flow. *Clin Physiol Funct Imaging*. 2009; 29(2):128-135
- 32) Tanimoto M, Yamamoto K, Kawano H, Gando Y, Tabata I, Ishii N, Miyachi M: Effects of whole-body low-intensity resistance training with slow movement and tonic force generation on muscular size and strength in young men. *J Strength Cond Res*. 2008; 22(6):1926-1938
- 33) Zhang JG, Ishikawa-Takata K, Yamazaki H, Morita T, Ohta T: Postural stability and physical performance in social dancers. *Gait & Posture*. 2008; 27:697-701
- 34) Arai T, Hashimoto H, Kawai K, Mori A, Ohnishi Y, Hioki K, Ito M, Saito M, Ueyama Y, Ohsugi M, Suzuki R, Kubota N, Yamauchi T, Tobe K, Kadowaki T, Kosaka K: Fulminant type 1 diabetes mellitus observed in insulin receptor substrate 2 deficient mice. *Clin. Exp. Med*. 2008; 8:93-99
- 35) Awazawa M, Ueki K, Inabe K, Yamauchi T, Kaneko K, Okazaki Y, Nabeel B, Ohnishi S, Nagai R, Kadowaki T: Adiponectin Suppresses Hepatic SREBP1c Expression in an AdipoR1/LKB1/AMPK dependent pathway. *Biochem. Biophys. Res. Commun*. 2009;382(1):51-56
- 36) Fruchart JC, Sacks F, Hermans MP, Assmann G, Brown WV, Ceska R, Chapman MJ, Dodson PM, Fioretto P, Ginsberg HN, Kadowaki T, Lablanche JM, Marx N, Plutzky J, Reiner Z, Rosenson RS, Staels B, Stock JK, Sy R, Wanner C, Zamboni A: The residual risk reduction initiative: a call to action to reduce residual vascular risk in patients with dyslipidemia.. *Am. J. Cardiol*. 2008; 102:1K-34K
- 37) Fruchart JC, Sacks F, Hermans MP, Assmann G, Brown WV, Ceska R, Chapman MJ, Dodson PM, Fioretto P, Ginsberg HN, Kadowaki T, Lablanche JM, Marx N, Plutzky J, Reiner Z, Rosenson RS, Staels B, Stock JK, Sy R, Wanner C: The residual risk reduction initiative: a call to action to reduce residual vascular risk in dyslipidemic patients. *Diab. Vasc. Dis. Res*. 2008; 319-335
- 38) Fujisawa T, Endo H, Tomimoto A, Sugiyama M, Takahashi H, Saito S, Inamori M, Nakajima N, Watanabe M, Kubota N, Yamauchi T, Kadowaki T, Wada K, Nakagama H, Nakajima A: Adiponectin Suppresses Colorectal Carcinogenesis under the High-fat Diet Condition. *Gut*. 2008; 57:1531-1538
- 39) Hashimoto H, Eto T, Kamisako T, Hoya N, Hatakeyama T, Arai T, Yokosuka M, Ohnishi Y, Ito M, Hioki K, Suzuki R, Ohsugi M, Saito M, Ueyama Y, Yamauchi T, Kubota N, Tobe K, Kadowaki T, Tamaoki N, Nomura T: An

- Efficient reproductive method for Irs2-/- mice with C57BL/6J genetic background. *Exp. Anim.* 2008; 57(4):407-411
- 40) Kubota N, Kubota T, Itoh S, Kumagai H, Kozono H, Takamoto I, Mineyama T, Ogata H, Tokuyama K, Ohsugi M, Sasako T, Moroi M, Sugi K, Kakuta S, Iwakura Y, Noda T, Ohnishi S, Nagai R, Tobe K, Kadowaki T: Dynamic Functional Relay between Insulin Receptor Substrate 1 and 2 in Hepatic Insulin Signaling during Fasting and Feeding. *Cell Metab.* 2008; 8:49-64
- 41) Matsuda S, Mikami Y, Ohtani M, Fujiwara M, Hirata Y, Minowa A, Terauchi Y, Kadowaki T, Koyasu S: Critical role of class IA PI3K for c-Rel expression in B lymphocytes. *Blood.* 2008; 113(5):1037-1044
- 42) Miyake K, Yang W, Hara K, Yasuda K, Horikawa Y, Osawa H, Furuta H, Ng MC, Hirota Y, Mori H, Ido K, Yamagata K, Hinokio Y, Oka Y, Iwasaki N, Iwamoto Y, Yamada Y, Seino Y, Maegawa H, Kashiwagi A: Construction of a prediction model for type 2 diabetes mellitus in the Japanese population based on 11 genes with strong evidence of the association. *J Hum Genet.* publication online. 2009;
- 43) Oishi Y, Manabe I, Tobe K, Ohsugi M, Kubota T, Fujiu K, Maemura K, Kubota N, Kadowaki T, Nagai R: SUMOylation of Krüppel-like transcription factor 5 acts as a molecular switch in transcriptional programs of lipid metabolism involving PPAR- δ . *Nat Med.* 2008; 14:656-666
- 44) Okamoto M, Ohara-Imaizumi M, Kubota N, Hashimoto S, Eto K, Kanno T, Kubota T, Wakui M, Nagai R, Noda M, Nagamatsu S, Kadowaki T: Adiponectin induces insulin secretion in vitro and in vivo at a low glucose concentration. *Diabetologia.* 2008; 51:827-835
- 45) Takamoto I, Terauchi Y, Kubota N, Kubota T, Ohsugi M, Ueki K, Kadowaki T: Crucial role of IRS-2 in compensatory β -cell hyperplasia in response to high-fat-diet-induced insulin resistance. *Diab. Obes. Metab.* 2008; 10(Suppl4):147-156
- 46) Takasawa K, Kubota N, Terauchi Y, Kadowaki T: Impact of increased PPAR γ activity in adipocytes in vivo on adiposity, insulin sensitivity and the effects of rosiglitazone treatment. *Endocrine J.* 2008; 55:767-776
- 47) Uchida-Kitajima S, Yamauchi T, Takashina Y, Okada-Iwabu M, Iwabu M, Ueki K, Kadowaki T: 5-Hydroxytryptamine 2A receptor signaling cascade modulates adiponectin and plasminogen activator inhibitor 1 expression in adipose tissue. *FEBS Letters.* 2008; 582:3037-3044
- 48) Unoki H, Takahashi A, Kawaguchi T, Hara K, Horikoshi M, Andersen G, Ng DPK, Holmkvist J, Borch-Johnson K, Jorgensen T, Sandbaek A, Lauritzen T, Hansen T, Nurbaya S, Tsunoda T, Kubo M, Babazono T, Hirose H, Kadowaki T, Maeda S: SNPs in KCNQ1 are associated with susceptibility to type 2 diabetes in East Asian and European populations. *Nat. Genet.* 2008; 40:1098-1102
- 49) Wang G, Watanabe M, Imai Y, Hara K, Manabe I, Maemura K, Horikoshi M, Kohro T, Amiya E, Sugiyama T, Fujita T, Kadowaki T, Yamazaki T, Nagai R: Genetic variations of Mrf-2/ARID5B confer risk of coronary atherosclerosis in the Japanese population. *Int Heart J.* 2008; 49(3):313-327
- 50) Watanabe K, Ohnishi S, Manabe I, Kadowaki T, Nagai R: KLF6 in non-alcoholic fatty liver disease: Role of fibrogenesis and carcinogenesis. *Gastroenterology.* 2008; 135:309-312
- 51) Watanabe T, Kubota N, Ohsugi M, Kubota T, Takamoto I, Iwabu M, Awazawa M, Katsuyama H, Hasegawa C, Tokuyama K, Moroi M, Sugi K, Yamauchi T, Noda T, Nagai R, Terauchi Y, Tobe K, Ueki K, Kadowaki T: Rimobant ameliorates insulin resistance via both adiponectin-dependent and adiponectin-independent pathways. *J. Biol. Chem.* 2009; 284(3):1803-1812
- 52) Yamauchi T, Kadowaki T: Physiological and pathophysiological roles of adiponectin and adiponectin receptors in the integrated regulation of cardiovascular disease. *Int. J. Obes.* 2008; 32(Suppl7):S13-S18
- 53) Yano W, Kubota N, Itoh S, Kubota T, Awazawa M, Moroi M, Sugi K, Takamoto I, Ogata H, Tokuyama K, Noda T, Terauchi Y, Ueki K, Kadowaki T: Molecular Mechanism of Moderate Insulin Resistance in Adiponectin-Knockout Mice. *Endocr J.* 2008; 55:515-522
- 54) Yasuda K, Miyake K, Horikawa Y, Hara K, Osawa H, Furuta H, Hirota Y, Mori H, Jonsson A, Sato Y, Yamagata K, Hinokio Y, Wang HY, Tanahashi T, Nakamura N, Oka Y, Iwasaki N, Iwamoto Y, Kadowaki T, Kasuga M: Variants in KCNQ1 are associated with susceptibility to type 2 diabetes mellitus. *Nat. Genet.* 2008; 40:1092-1097
- 55) Ishiwata N, Melby MK, Mizuno S, Watanabe S: New equol supplement for relieving menopausal symptoms: Randomized placebo-

- controlled trial by Japanese women. *Menopause*. 2009; 16(1):141-148
- 56) Takezawa J, Ishimi Y, Yamada K: Proteasome inhibitors remarkably prevent translesion replication in cancer cells but not normal cells. *Cancer Science*. 2008; 99(5):863-871
- 57) Nakade M, Lee JS, Kawakubo K, Kondo K, Mori K, Akabayashi A: Changes in food intake patterns associated with body weight loss during a 12-week health promotion program and a 9-month follow-up period in a Japanese population. *Obes Res & Clin Prac*. 2009; 3(2):85-98.
- 58) Kamei Y, Miura S, Suganami T, Akaike F, Kanai S, Sugita S, Katsumata A, Aburatani H, Unterman TG, Ezaki O, Ogawa Y: Regulation of SREBP1c gene expression in skeletal muscle: role of RXR/LXR and FOXO1. *Endocrinology*. 2008; 149(5):2293-2305
- 59) Miura S, Kai Y, Kamei Y, Bruce CR, Kubota N, Febbraio MA, Kadowaki T, Ezaki O: α 2-AMPK activity is not essential for an increase in fatty acid oxidation during low-intensity exercise. *Am J Physiol Endocrinol Metab*. 2009; 296(1):E47 -E55
- 60) Miura S, Kai Y, Kamei Y, Ezaki O: Isoform-Specific Increases in Murine Skeletal Muscle Peroxisome Proliferator-Activated Receptor- γ Coactivator-1 α (PGC-1 α) mRNA in Response to 2-Adrenergic Receptor Activation and Exercise. *Endocrinology*. 2008; 149(9):4527-4533
- 61) Sakakibara I, Fujino T, Ishii M, Tanaka T, Shimosawa T, Miura S, Zhang W, Tokutake Y, Yamamoto J, Awano M, Iwasaki S, Motoike T, Okamura M, Inagaki T, Kita K, Ezaki O, Naito M, Kuwaki T, Chohnan S, Yamamoto TT, Hammer RE, Kodama T, Yanagisawa M, Sakai J: Fasting-Induced Hypothermia and Reduced Energy Production in Mice Lacking Acetyl-CoA Synthetase 2. *Cell Metab*. 2009; 9(2):191-202
- 62) Wada S, Yamazaki T, Kawano Y, Miura S, Ezaki O: Fish oil fed prior to ethanol administration prevents acute ethanol-induced fatty liver in mice. *J Hepatol*. 2008; 49(3):441-450
- 63) Aota A, Mawatari K, Takahashi S, Matsumoto T, Kanda K, Anraku R, Hibara A, Tokeshi M, Kitamori T: Phase separation of gas-liquid and liquid-liquid microflows in microchips. *Microchim Acta*. 2009; 164:249-255
- 64) Hagiwara H, Sato H, Ohde Y, Takanao Y, Seki T, Ariga T, Hokaiwado S, Asamoto M, Shirai T, Nagashima Y, Yano T: 5-Aza-2'-deoxycytidine suppresses human renal carcinoma cell growth in a xenograft model via up-regulation of the connexin 32 gene. *Br J Pharmacol*. 2008; 153(7):1373-1381
- 65) Sakurai N, Suzuki K, Nagaoka T, Saito T, Yoshimura H, Yano T, Sadzuka Y, Asano R: Connexin 43-dependent tumor-suppressing effect of the Bowman-Birk protease inhibitor on M5076 ovarian sarcoma-bearing mice. *Molecular Medicine Reports*. 2008; 1(5):689-693
- 66) Sakurai N, Suzuki K, Saito T, Yoshimura H, Nishimura Y, Yano T, Sadzuka Y, Asano R: Effects of a single-dose administration of Bowman-Birk inhibitor concentrate on anti-proliferation and inhibition of metastasis in M5076 ovarian sarcoma-bearing mice. *Molecular Medicine Reports*. 2008; 1(6):903-907
- 67) Sato H, Hagiwara H, Senba H, Fukumoto K, Nagashima Y, Yamasaki H, Ueno K, Yano T: The inhibitory effect of connexin 32 gene on metastasis in renal cell carcinoma. *Molecular Carcinogenesis*. 2008; 47(6):403-409
- 68) Takebayashi J, Nagata J, Yamada K: Improved Analytical Precision of 1,4-Dihydroxy-2-naphthoic Acid by High Performance Liquid Chromatography Using Dithiothreitol as Mobile Phase Additive. *Food Science and Technology Research*. 2008; 14(5):509-512
- 69) Takebayashi J, Yagi Y, Ishii R, Abe S, Yamada K, Tai A: Antioxidant properties of 2-O-beta-D-glucopyranosyl-L-ascorbic acid. *Bioscience, Biotechnology, and Biochemistry*. 2008; 72(6):1558-1563
- 70) Suzuki M, Ito Y, Fujino T, Abe M, Umegaki K, Onoue S, Noguchi H, Yamada S: Pharmacological effects of saw palmetto extract in the lower urinary tract. *Acta Pharmacol Sin*. 2009; 30(3):227-281
- 71) Taki Y, Yamazaki Y, Shimura F, Yamada S, Umegaki K: Time-Dependent Induction of Hepatic Cytochrome P450 Enzyme Activity and mRNA Expression by Bilobalide in Rats. *J Pharmacol Sci*. 2009; 109,459-462
- 72) Taku K, Umegaki K, Ishimi Y, Watanabe S: Effects of extracted soy isoflavones alone on blood total and LDL cholesterol: Meta-analysis of randomized controlled trials. *Therapeutics and Clinical Risk Management*. 2008; 4(5):1097-1103
- 73) Tomita M, Mizuno S, Yokota K: Increased Levels of serum uric acid among Ex-smokers. *Journal of Epidemiology*. 2008; 18(3):132-134

- 74) Udagawa K, Miyoshi M, Yoshiike N: Mid-term evaluation of "Health Japan 21" - focus area for the nutrition and diet. *Asia Pac J Clin Nutr.* 2008; 17(S2):445-452

b. 和 文

- 1) 島田美恵子, 吉武裕, 西牟田守, 齊藤和人: 高齢女性における低強度日常生活活動を対象とした身体活動量推定法の検討 心拍数法、加速度計法および歩数法による比較;. *生涯スポーツ学研究.* 2009; 5(2):13-18
- 2) 野末みほ, 猿倉薫子, 西条旨子, 藤井紘子, 荒井裕介, 石脇亜紗子, 吉池信男, 中川秀昭, 由田克士: 富山県の農村部における栄養素等・食品群別摂取量の季節間変動及び野菜類摂取量との関連についての検討. *北陸公衆衛生学会誌.* 2008; 34(2):58-64
- 3) 鈴木和枝, 橋場直彦, 藤田弘美, 西牟田守, 本吉光隆, 藤波襄二, 池田義雄: 過去 20 年間における推移からみた糖尿病栄養指導の実際. *糖尿病.* 2009; 52(1):55-57
- 4) 脇村智子, 西牟田守, 児玉直子, 吉岡 (日達) やよい, 山田英明, 武山英麿: 補足のない実験食を摂取した場合のたんぱく質摂取量とミネラル (カルシウム・マグネシウム・リン) 出納との関係. *栄養学雑誌.* 2008; 66(6):227-285
- 5) 熊江隆: ルミノール依存性化学発光を応用した血清総抗酸化能の 2 測定方法の比較. *体力・栄養・免疫学雑誌.* 2008; 18(2): 106-115.
- 6) 山本祥子, 高田和子, 別所京子, 谷本道哉, 宮地元彦, 田中茂穂, 戸谷誠之, 田畑泉: ボディービルダーの基礎代謝量と身体活動レベルの検討. *栄養学雑誌.* 2008; 66(4):195-200
- 7) 小長谷陽子, 渡邊智之, 高田和子, 太田壽城: 新しい認知機能検査、TICS-J による地域在住高齢者のスクリーニング. *日本老年医学会雑誌.* 2008; 45:532-538
- 8) 沼田健之, 宮武伸之, 松本純子, 藤井昌史, 宮地元彦: 5 か月間の生活習慣改善教室参加女性における体重変化量と腹囲変化量との関係. *日本予防医学会誌.* 2008; 3(2):13-16
- 9) 中村容一, 田中喜代次, 田中宏暁, 荒尾孝, 増田和茂, 柳川尚子, 宮地元彦, 田畑泉: 中高齢者の運動に基づいた健康づくりに関する学術論文の系統的レビューと文献検索システム. *流通経済大学スポーツ健康科学部紀要.* 2008; 1:99-106
- 10) 田中千晶, 田中茂穂: 幼稚園および保育所に通う日本人幼児における日常の身体活動量の比較. *体力科学.* 2009; 58(1):123-130
- 11) 鈴木洋子, 大坂寿雅, 仲田瑛子, 金高有里, 井上修二: カルバキュール連続投与による迷走神経活動上昇マウスの腹部細胞増殖促進. *日本臨床生理学会雑誌.* 2008; 38:151-158
- 12) 木戸和貴子, 松村康弘, 山田和彦, 矢野友啓: 日本栄養改善学会会員におけるビタミン E サプ

リメントの摂取状況. *栄養学雑誌.* 2009; 66(3):149-152

- 13) 遠藤香, 村上昌弘, 木村典代, 梅垣敬三: 鉄過剰負荷ならびに X 線全身照射が低タンパク質食摂取マウスの骨髄と肝臓の酸化障害に及ぼす影響. *栄養学雑誌.* 2008; 66(5):241-245
- 14) 清水雅之, 進士三明, 松本圭司, 吉川俊博, 朴美貞, 大門貴志, 梅垣敬三, 山田浩: 健康食品と医薬品の併用における有害事象の因果関係判定のための評価分類基準の検討. *臨床薬理.* 2008; 39(5):169-172
- 15) 所澤千香子, 佐野佳代, 笠岡(坪山)宜代: 魚油によるマウスの体脂肪蓄積抑制効果に対する脂肪摂取量の影響. *栄養学雑誌.* 2008;66(4): 181-188
- 16) 水野正一, 渡邊昌: 糖尿病用トクホの問題点. *Functional food.* 2008; 2(1):17-22

【総 説】

a. 英 文

- 1) Yoshita K, Arai Y, Nozue M: Measures and Systems for Health Improvement in Post-war Era -Focusing on Involvement of Nutritionists and Their Efforts in Areas of Nutrition and Dietary Life-. *JOURNAL OF THE JAPAN DIETETIC ASSOCIATION.* 2008; 51(7):22-25
- 2) Nagata J, Yamada K: Foods with Health Claims in Japan.. *Food Sci. Technol. Res..* 2008; 14(6):519-524
- 3) Yamada K, Sato-Mito N, Nagata J, Umegaki K: Health claim evidence requirements in Japan. *J. Nutr..* 2008; 138:1192S-1198S

b. 和 文

- 1) 石見佳子, 呉堅: 骨折予防を見据えた骨粗鬆症診療の現状: 骨粗鬆症の予防と治療における生活習慣指導の意義. *Pharma Medica.* 2008; 26(6):43-46, メディカルレビュー社
- 2) 石見佳子: 骨粗鬆症の分子機構とその予防と治療 - 2 食事と運動による骨粗鬆症の予防. *化学と生物.* 2008; 46(12):872-878, 学会出版センター
- 3) 石見佳子: 骨粗鬆症の予防における大豆イソフラボンの生体利用性に関する研究. *日本醸造協会誌.* 2008; 103(12):927-933, 日本醸造学会
- 4) 石見佳子: 閉経後女性の個体特性に着目した大豆イソフラボンの骨代謝調節作用. 更年期と加齢のヘルスケア. 2008; 7(1):19-25, サイエンス・フォーラム
- 5) 木戸和貴子, 矢野友啓: がん予防・治療における alpha-トコフェロールコハク酸エステル の有用性の評価. *ビタミン.* 2008; 82(3):200-201
- 6) 坪田(宇津木)恵, 笠岡(坪山)宜代, 渡邊昌: アメリカ・カナダにおける食事摂取基準活用の現状と課題—アメリカ ワシントンにおける食事摂

- 取基準ワークショップ事業報告書より一. 日本栄養士会雑誌. 2008; 51(12):28-35
- 7) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 戦後の健康づくり施策・制度一栄養・食生活分野での取り組みと栄養士のかかわりを中心として一. 日本栄養士会雑誌. 2008; 51(6):16-19
- 8) 宮地元彦: 生活習慣病における運動療法、特集: 運動と動脈硬化予防. 動脈硬化予防. 2008; 7(2):61-70
- 9) 宮地元彦: 特定健診・保健指導に向けての運動・身体活動指導. 日本補完代替医療学会誌. 2008; 5(2):115-122
- 10) 宮地元彦: 特定健診と保健指導一メタボリックシンドロームを標的とした動脈計機能評価と対策. Arterial Stiffness. 2008; 14:26-33, 臨床血圧脈波研究会
- 11) 宮地元彦: 特定保健指導における運動指導の方法. 体育の科学. 2008; 58(7):475-482
- 12) 田中茂穂: 生活習慣病予防に関する間欠的運動の効果. 体育の科学, 杏林書院. 2009; 59(3):184-188
- 13) 田中茂穂: 連載 運動・身体活動と公衆衛生 (5)「日常生活における生活活動評価の重要性」. 日本公衆衛生雑誌. 2008; 55(7):474-477
- 14) 田畑泉: 無酸素性トレーニング? -Tabata Protocol とは-. 体育の科学. 2009; 59(3):168-176, 杏林書院
- 15) 栗澤元晴, 植木浩二郎, 門脇孝: アディポネクチンとインスリン感受性一肝臓. アディポネクチンとその受容体. 2008; 96-103, フジメディカル出版
- 16) 栗澤元晴, 植木浩二郎: 小胞体ストレスと糖尿病. 内分泌・糖尿病科. 2008; 27(1):96-103, 科学評論社
- 17) 栗澤元晴: 膝島移植. レジデント(科学評論社). 2008; 1(4):95-96
- 18) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 門脇孝: 【わが国における最近の糖尿病メガスタディ】2型糖尿病患者を対象とした血管合併症抑制のための強化療法と従来治療とのランダム化比較試験 J-DOIT3. Diabetes Frontier. 2008; 19(5):647-651
- 19) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 門脇孝: 【糖尿病の予防戦略】J-DOIT3の概略と現状 糖尿病合併症予防のために. Mebio. 2008; 25(6):110-116
- 20) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 門脇孝: J-DOIT3. 内分泌・糖尿病科. 2008; 26(5):502-506
- 21) 岡崎由希子, 植木浩二郎, 門脇孝: Key words J-DOIT3が目指す集学的治療. カレントセラピー. 2008; 26(7):635-635
- 22) 岡畑純江, 門脇孝: 加齢のサイエンスと抗加齢医学 食事・運動療法の基礎と臨床. 眼科プラクティス. 2008; 22(207):211
- 23) 金子和真, 植木浩二郎, 門脇孝: 膵β細胞の脂肪毒性によるインスリン分泌障害. Q&Aでわかる肥満と糖尿病. 2008; 7(3):336-337
- 24) 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチンによる食欲調節と糖尿病. Diabetes Frontier. 2008; 19(4):470-474
- 25) 窪田直人, 門脇孝: 視床下部におけるAMPキナーゼ昨日. 生体の科学. 2008; 59(4):320-324
- 26) 窪田直人, 門脇孝: 新時代の糖尿病学(1)一病因・診断・治療研究の進歩一 2型糖尿病インスリン抵抗性にかかわる因子 PPAR γ . 日本臨牀. 2008; 66(3):454-461
- 27) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝: アディポネクチンと血管新生: アディポネクチンとその受容体. フジメディカル出版. 2008; 135-141
- 28) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝: 循環器疾患の抑止に向けたメタボリックシンドロームの治療. 心臓. 2008; 40(6):508-512
- 29) 窪田哲也, 窪田直人, 門脇孝: 動脈硬化症疾患とアディポサイトカイン、インスリン抵抗性. 呼吸と循環. 2008; 56(6):561-566
- 30) 原一雄: 特集「糖尿病と遺伝」. さかえ. 2008;
- 31) 原一雄, 門脇孝: 【解明されつつある糖尿病遺伝子】2型糖尿病と遺伝子 罹患同胞対解析によるアプローチ. Medical Bio. 2008; 5(6):43-47
- 32) 原一雄, 門脇孝: 【高齢者の肥満と痩せ・栄養】アディポネクチン分画測定法と病態診断. Geriatric Medicine. 2008; 46(5):501-506
- 33) 原一雄, 門脇孝: 2型糖尿病とその疾患遺伝子. 最新医学. 2008; 1934-1944
- 34) 原一雄, 門脇孝: TCF7L2 遺伝子. Medical Science Digest. 2008; 380-381
- 35) 笹子敬洋, 植木浩二郎, 門脇孝: 糖代謝と肝臓. 臨床消化器内科. 2008; 23(6):685-691
- 36) 山内敏正, 窪田直人, 門脇孝: 見る脂質のページ 遺伝子操作実験動物 アディポネクチン受容体ノックアウトマウス. The Lipid. 2008; 19(2):112-118
- 37) 山内敏正, 門脇孝: 【大きく変わる肥満症のとりえ方 摂食とエネルギー消費のバランス機構】末梢からのアプローチ アディポネクチンとアディポネクチン受容体. 最新医学. 2008; 63(10):60-71
- 38) 山内敏正, 門脇孝: 【糖尿病 最近の話題】正常者空腹時血糖値をどう考えるか? 特定健診における耐糖能異常の基準値. 成人病と生活習慣病. 2008; 38(4):376-380
- 39) 山内敏正, 門脇孝: 【糖尿病と機能性食品】糖尿病の発症のメカニズムと病態. Functional Food. 2008; 2(1):5-11
- 40) 山内敏正, 門脇孝: アディポネクチン/アディポネクチン受容体とメタボリック症候群. 実験医学. 2008; 26(15):184-190
- 41) 山内敏正, 門脇孝: アディポネクチンと動脈硬化. 進歩する心臓研究 XXVIII. 2008; 13-20
- 42) 山内敏正, 門脇孝: 血管疾患発症基盤としてのメタボリック症候群. CARDIAC PRACTICE. 2008; 19(3):29(263)-38(272)

- 43) 山内敏正, 門脇孝: 治療 CKD 進展リスクファクター対策 耐糖能異常・糖尿病. 日本臨床. 2008; 1753-1760
- 44) 山内敏正, 門脇孝: 心血管病に対する脂肪細胞の関わり. Pharma Medica. 2008; 106-107
- 45) 山内敏正, 門脇孝: 新時代の糖尿病学 (1) - 病因・診断・治療研究の進歩 - 糖尿病基礎研究の進歩 糖尿病と耐糖能低下の成因分類と発症機序 2型糖尿病 インスリン抵抗性にかかわる因子 アディポネクチンとアディポネクチン受容体. 日本臨床. 2008; 66(3):447-453
- 46) 山内敏正, 門脇孝: 新時代の糖尿病学 (3) 塩酸リボグリタゾン (PPAR γ アゴニスト). 日本臨床. 2008; 432-439
- 47) 山内敏正, 門脇孝: 耐糖能異常・糖尿病. 日本臨床. 2008; 66(9):1753-1760
- 48) 山内敏正, 門脇孝: 糖尿病合併症と炎症性因子、肥満関連因子. 総合臨床. 2008; 57(7):1984-1993
- 49) 山内敏正, 門脇孝: 内臓脂肪 トータルアディポネクチン、高分子量アディポネクチン、レプチンなど. 内分泌・糖尿病科. 2008; 27(1):43-51
- 50) 山内敏正, 門脇孝: 肥満症の診断と治療. 内分泌・糖尿病科. 2008; 26(5):425-431
- 51) 勝山修行, 窪田直人, 門脇孝: 【臨床検査を知っていますか?】アディポネクチンとは?アディポネクチンについて教えてください. Q&A でわかる肥満と糖尿病. 2008; 7(3):336-337
- 52) 大須賀淳一, 門脇孝: 高脂血症とメタボリックシンドローム. 臨床と研究. 2008; 66(9):1753-1760
- 53) 大杉満, 植木浩二郎, 門脇孝: 日常臨床で遭遇する“悪性”高血糖. 東京内科医会誌. 2008; 23(3):212-212
- 54) 大杉満, 門脇孝: 【インクレチン Mimetica 基礎と臨床】DPP-IV 阻害剤. Medical Science Digest. 2008; 34(4):155-159
- 55) 門脇孝, 山内敏正: 糖尿病からみた RAS 抑制の意義. (第 12 回アンジオテンシン II シンポジウム 第一部『肥満と ARB』). 血圧. 2008; 15(6):67-70
- 56) 門脇孝, 山内敏正: 肥満と ARB 糖尿病からみた RAS 抑制の意義. 血圧. 2008; 15(6):525-528
- 57) 門脇孝, 植木浩二郎, 野田光彦: 糖尿病対策の現状 糖尿病予防のための戦略研究 (J-DOIT3). 糖尿病学の進歩. 2008; 198-204
- 58) 門脇孝: 「インスリン抵抗性分子メカニズム 総論:特集にあたって」. Bio Clinica. 2009; 16-19
- 59) 門脇孝: 2型糖尿病の成因を追い求める旅—真理への希求. 糖尿病. 2008; 51(11):949-959
- 60) 門脇孝: メタボリックシンドロームと循環器疾患. 心臓. 2008; 40(6):495-495
- 61) 門脇孝: メタボリックシンドロームの病態と治療戦略. MINOPHAGEN MEDICAL REVIEW. 2008; 53:67-73
- 62) 門脇孝: メタボリック健診と糖尿病. SRL 宝函別冊第 4 回 SRL Update Forum 講演集. 2008; 12-17
- 63) 門脇孝: 新時代の糖尿病学 (1) - 病因・診断・治療研究の進歩 - メタボリックシンドローム発症の分子メカニズム. 日本臨床. 2008; 66(3):59-69
- 64) 門脇孝: 糖尿病の病態と診断に関する最近の知見 メタボリックシンドローム健診の目的と概要. 分子糖尿病学の進歩. 基礎から臨床まで. 2008; 2008:86-94
- 65) 鈴木亮, 門脇孝: 糖尿病の疫学・病態. 診断学の進歩 糖尿病にみられる各種病態タンパク質およびアミノ酸代謝異常 1 型糖尿病におけるタンパク質代謝. 日本臨床 66 増刊 4 新時代の糖尿病学. 2008; 56-60
- 66) 脇裕典, 門脇孝: インスリン作用の分子機構 PPAR γ をターゲットにした新しいインスリン感受性増強メカニズム. 糖尿病学の進歩: 基礎から臨床まで. 2008; 2008:56-63
- 67) 手嶋登志子, 石田淳子: 高齢者の栄養状態—アセスメント何を発見したいのか. ニュートリションケア. 2008; 6:10-15
- 68) 手嶋登志子: 食介護の視点からみた摂食・嚥下障害. 保健の科学. 2008; 50(4):220-224
- 69) 江崎治, 三浦進司: 生活習慣病予防の機序 運動の抗肥満効果. 臨床スポーツ医学. 2008; 25(10):1155-1161, 文光堂
- 70) 江崎治: ω 3 多価不飽和脂肪酸の摂取基準: 最近 5 年間の研究報告のシステムティックレビュー. The Lipid. 2008; 19(4):24-31, メディカルレビュー社
- 71) 江崎治: 生活習慣病予防と栄養管理のエビデンス. 栄養 評価と治療. 2008; 25(2):118-128, メディカルレビュー社
- 72) 三浦進司, 江崎治: 運動の抗肥満効果. ILSI JAPAN. 2009; 96:10-22
- 73) 永田純一: トランス脂肪酸に関する最近の話題—国際的な動向と国内の現状について. 日本食生活学会誌. 2008; 18(3):211-215
- 74) 矢野友啓: 日本におけるビタミン E 類サプリメントの摂取状況. ビタミン. 2008; 82(1):615-616
- 75) 益崎裕章, 笠岡(坪山)宜代, 岡田定規, 中尾一和: 肥満症・メタボリックシンドロームの治療・管理「食事療法」. 治療. 2008; 90:1685-1689, 南山堂
- 76) 三好美紀, 吉池信男: 日本と諸外国の食塩摂取量. 成人病と生活習慣病. 2009; 39(3):238-243

【解説等】

a. 和文

- 1) 西牟田守: 今日求められる健康医学について—人間栄養学の立場から—. 日本健康医学会雑誌. 2008; 17(2):4-8
- 2) 西牟田守: 精神医学に対する生理学的アプローチ

- チ. 最新精神医学. 2008; 13(1):23-27
- 3) 石見佳子: 植物エストロゲン. すこやかファミリー. 2008;
 - 4) 石見佳子: 大豆ではじまる健やかライフ. ぐらしの百科. 2008; 2008(8):1-6, 産経新聞社
 - 5) 石田裕美, 阿部絹子, 三浦克之, 佐藤由喜子, 大井照, 由田克士: 座談会 従業員食堂のチカラ一人々を健康にし、メタボを減らす、格好の場を提供せよ!-. 公衆衛生情報 特集. 2008; 38(5):6-18, ライフ出版社
 - 6) 野末みほ, 荒井裕介, 由田克士: 日本人の健康と栄養-平成18年国民健康・栄養調査結果の概要をふまえて-. ほすびたるらいぶらりあん. 2008; 33(3):216-221
 - 7) 野末みほ: チリ共和国での取り組みと国際貢献における管理栄養士・栄養士の今後の展望. 臨床栄養. 2009; 114(1):47-53
 - 8) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ, 石田裕美: 特定健診・保健指導と連動した職域における栄養・食生活改善(2) ~具体的な取り組み事例と客観的な効果~. 労働安全衛生広報. 2008; 40(937):14-19
 - 9) 由田克士: 特定保健指導と栄養. 健康管理. 2008; 6-22, 保健文化社
 - 10) 由田克士: 平成18年国民健康・栄養調査の概要を読む ~特定健診・特定保健指導の視点から. 食生活. 2008; 102(8):89-95, カザン
 - 11) 宮地元彦: エクササイズガイド2006を用いた特定保健指導とは? 特集 特定健診と特定保健指導-展望と実際-. 肥満と糖尿病. 2008; 7(5):705-707, 丹水社
 - 12) 宮地元彦: メタボリックシンドロームに関するサイト, 栄養士のためのお役立ちサイト(4). 臨床栄養. 2008; 112(5):486-487
 - 13) 宮地元彦: 運動・身体活動のエビデンス⑩ 体力レベルが高い場合、低い場合と比較して総死亡リスクを約50%減少させる. 健康づくり. 2008;360:11, 健康・体力づくり事業財団(東京)
 - 14) 宮地元彦: 糖尿病診療の最新情報(III) 運動療法. ドクターサロン. 2008; 52(10):56-60, 杏文堂
 - 15) 宮地元彦: 腹部の筋持久力が脂肪率の予測因子となる、運動・身体活動のエビデンス⑪. 健康づくり、健康体力づくり事業財団. 2008; 11, 東京
 - 16) 高田和子: ウォーキングをサポートする食生活. 食生活. 2009; 103:77-80, カザン
 - 17) 高田和子: 管理栄養士が抑えておきたい運動指導. 食生活. 2008; 102:36-41, (社)全国地区衛生組織連合会
 - 18) 高田和子: 都道府県体育協会と連携した医科学サポート. 臨床スポーツ医学. 2008; 25(8):911-918, 文光堂
 - 19) 田中茂穂: 運動・身体活動のエビデンス⑮ 身体活動の不足およびテレビ、ビデオの視聴時間は過体重の増加に寄与する. 健康づくり、健康体力づくり事業財団. 2008; 11, 東京
 - 20) 田中茂穂: 運動・身体活動のエビデンス⑰ 14歳から31歳で不活動になった者が男女いずれにおいても肥満になりやすい. 健康づくり. 2008; 11, 健康・体力づくり事業財団
 - 21) 田中茂穂: 健康づくりQ&A 「日常生活の中で、運動の時間をとる工夫とは?」. 健康づくり. 2009; 370:25, 健康・体力づくり事業財団
 - 22) 田畑泉: メタボリックシンドローム解消のための運動施策-エクササイズガイド2006による健康づくり-. Strength & Conditioning Journal Japan. 2009; 16(3):2-6, 特定非営利活動法人日本ストレングス&コンディショニング協会
 - 23) 田畑泉: 運動の役割-エクササイズガイドのすすめ-. ウォーキング研究. 2008; 12:41-45
 - 24) 田畑泉: 身体活動と健康増進. 公園緑地. 2008;69(3):16-18, (社)日本公園緑地協会, 東京
 - 25) 原一雄: 糖尿病講座: 糖尿病の合併症(総論). 毎日ライフ. 2008;
 - 26) 原一雄: 糖尿病講座: 糖尿病の合併症(糖尿病腎症). 毎日ライフ. 2008;
 - 27) 饗場直美: 女性のやせ. 全薬ジャーナル. 2008;
 - 28) 饗場直美: 食物繊維1日20gでお腹スッキリ! 肥満予防. 介護の学校. 2009; , 日本医療企画
 - 29) 江崎治: トランス脂肪酸の有害作用. 日本医事新報. 2008; 95-97
 - 30) 永田純一, 山田和彦: トランス脂肪酸の国内外における規制状況. 生物と化学. 2008; 46(10):672-673
 - 31) 永田純一: トランス脂肪酸に関する最近の話題. ソフト・ドリンク技術資料. 2008; 154(1):101-117
 - 32) 永田純一: 機能性構造油脂と生活習慣病改善効果. 日本医師会雑誌. 2008; 137(12):2409-2409
 - 33) 永田純一: 特定健康診査および特定保健指導と特定保健用食品の役割. 食品加工と包装技術 ジャパンフードサイエンス. 2008; 47(7):21-26
 - 34) 梅垣敬三: 【サプリメントのエビデンスと適正使用】サプリメントの安全性と品質. 薬事. 2008; 50(7):1019-1024
 - 35) 梅垣敬三: これは気をつけよう サプリメント② 必要性の判断. 臨床栄養. 2009; 114(2):177-183
 - 36) 梅垣敬三: これは気をつけよう サプリメント③ 安全性重視の考え方. 臨床栄養. 2009; 114(3):289-194
 - 37) 梅垣敬三: これは気をつけようサプリメント① 製品の重要性. 臨床栄養. 2009; 114(1):57-62
 - 38) 梅垣敬三: サプリメントの安全性・有効性情報、話題の情報. New Dietary Therapy(日本臨床栄養協会誌). 2008; 24(3):25-37
 - 39) 梅垣敬三: サプリメントの適正使用. 日本更年期医学会雑誌. 2008; 16(1):64-71
 - 40) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントとは、機能表示を認められたトクホ. ぐらしの豆知識 09 特

- 集. 食の安全性を読み解く. 2008; 26-28, 国民生活センター
- 41) 梅垣敬三: 健康食品による被害の実際. 調剤と薬局. 2009; 15(1):16-20
 - 42) 梅垣敬三: 健康食品に関する情報伝達と薬剤師の役割. 日本薬剤師会雑誌. 2008; 60(5):593-597
 - 43) 梅垣敬三: 保健機能食品・サプリメントの正しい使い方. 公衆衛生. 2009; 73(1):20-24
 - 44) 廣田晃一: 栄養士のためのお役立ちサイト(3) ウェブサイトの判別法. 臨床栄養. 2008; 112(4):366-367
 - 45) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から 病院給食のルームサービスとは?. 食生活. 2008; 102(11):90-94, カザン
 - 46) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から ICU 担当の栄養士は何をしているの?. 食生活. 2009; 103(2):48-51, カザン
 - 47) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から 病院の栄養部のしくみ. 食生活. 2008; 102(12):88-91, カザン
 - 48) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から 臨床栄養士の病院での1日. 食生活. 2009; 103(1):54-57, カザン
 - 49) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から第2回 インターンシップとは?. 食生活. 2008; 102(10):48-53, カザン
 - 50) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition ～アメリカの現場から第一回 アメリカの栄養士事情. 食生活. 2008; 102:93-98, カザン
 - 51) 笠岡(坪山)宜代: Clinical Nutrition～アメリカの現場から～ NST ラウンズ. 食生活, 2カザン. 2009; 103:50-53
 - 52) 笠岡(坪山)宜代: アメリカにて行政的研究/臨床を経験して. 日本栄養士会雑誌. 2008; 51(4):31-31
 - 53) 笠岡(坪山)宜代: はたらく妊婦の食 Q&A 体重コントロール. ニンプス. 2008;
 - 54) 笠岡(坪山)宜代: はたらく妊婦の食 Q&A ファストフード. ニンプス. 2008;
 - 55) 笠岡(坪山)宜代: はたらく妊婦の食 Q&A 上手にカルシウムを摂る方法. ニンプス. 2009;
 - 56) 笠岡(坪山)宜代: はたらく妊婦の食 Q&A 辛いもの. ニンプス. 2008;
 - 57) 笠岡(坪山)宜代: はたらく妊婦の食 Q&A 大豆イソフラボン. ニンプス. 2009;
 - 58) 笠岡(坪山)宜代: 研究者の意識改革を: 日本型のファンディング エージェンシーを目指して 2009 年新春展望. 日経 BP ジャーナル. 2009; , 日経 BP 社
 - 59) 笠岡(坪山)宜代: 働く妊婦の食 Q&A 上手に外食するコツ. ニンプス. 2008;
- 「70 歳時と 79 歳時における体力測定実施状況の比較」. 平成 19 年度厚生労働科学研究補助金、医療安全・医療技術評価総合研究事業研究報告書(総括). 2008;
- 2) 荒井裕介, 三好美紀, 由田克士, 野末みほ: 都道府県、学校における食育活動について～食育活動事例収集のためのパイロット的検討～. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究(主任研究者: 荒井裕介). 2008; 135-139
 - 3) 荒井裕介, 三好美紀, 由田克士: 都道府県における食育推進に関する質問紙調査. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究(主任研究者: 荒井裕介). 2008; 97-133
 - 4) 荒井裕介, 由田克士, 三浦克之, 山本茂, 今枝奈保美, 坪田(宇津木)恵, 笠岡(坪山)宜代: アメリカにおける食事摂取基準の活用の現状等について(Institute of Medicine). 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討(主任研究者: 由田克士). 2008; 6-14
 - 5) 荒井裕介, 由田克士, 坪田(宇津木)恵: フィンランドにおける食事摂取基準及びその活用等について. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討(主任研究者: 由田克士). 2008; 56-67
 - 6) 石見佳子, 上原万里子: 大豆イソフラボン代謝産物に着目した骨粗鬆症の予防に関する研究. 平成 19 年度科学研究費補助金実績報告書・基盤研究(B). 2008;
 - 7) 石見佳子, 卓興鋼, 梅垣敬三, 山内淳: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的レビューとその検証に関する研究(第 1 報) 大豆抽出イソフラボン単独摂取による血中脂質への影響-13 報無作為化比較試験のメタ分析-. 大豆たん白質研究. 2008; 29(11):6-14
 - 8) 由田克士, 荒井裕介, 吉池信男, 佐々木 敏, 三浦克之, 柴田克己, 野末みほ: 日本人の食事摂取基準(2005 年版)の活用状況ならびに次期食事摂取基準策定に際して望まれる活用方法理解のための取り組みニーズに関する調査. 平成 19 年度 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討(主任研究者: 由田克士). 2008; 68-79
 - 9) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 日本人の食事摂取基準(2005 年版)を活用した集団に対する栄養調査成績の評価に関する試み. 平成 19 年度 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討(主任研究者: 由田克士). 2008;

【研究報告書】

- 1) 宮崎秀夫, 島田美恵子, 吉武 裕, 木村靖夫, 中川直樹, 西牟田守, 大橋正春: 地域住民の口腔保健と全身的な健康状態についての総合研究

- 10) 由田克士, 中川秀昭, 三浦克之, 櫻井 勝, 杉森裕子, 中川芽衣子, 紙 貴子, Jun Kyungyul: 現業系職域における特定給食施設を中心とした取り組みに関する研究. 平成 19 年度 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 勤労者の健康づくりのための給食を活用した集団及びハイリスク者への対策に関する研究 (主任研究者: 石田裕美). 2008; 75-91
- 11) 由田克士: 行政による健康・栄養調査の精度向上を目指した保健所栄養士等を対象とする技術支援の在り方に関する研究 (栄養摂取状況調査に関する分野での取り組みを中心として). 平成 19 年度 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 都道府県等の生活習慣リスク因子の格差及び経年モニタリング手法に関する検討 (主任研究者: 吉池信男). 2008; 70-103
- 12) 由田克士: 生活習慣病予防のための効果的な栄養教育手法に関する研究. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 生活習慣病予防のための効果的な栄養教育手法に関する研究 (主任研究者: 山本茂). 2008; 44-68
- 13) 由田克士: 日本人の食事摂取基準の活用に関する検討. 平成 19 年度 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討 (主任研究者: 由田克士). 2008; 1-5
- 14) 鈴木亜夕帆, 渡邊智子, 渡邊令子, 西牟田守, 宮崎秀夫: 地域住民の口腔保健と全身的な健康状態についての総合研究「高齢者を対象とした『簡易食物摂取状況調査法』結果を五訂増補成分表を用いた栄養価計算に発展させる試み」. 平成 19 年度厚生労働科学研究補助金、医療安全・医療技術評価総合研究事業研究報告書 (総括). 2008;
- 15) 眞木吉信, 小林清吾, 西牟田守, 中垣晴男, 花田信弘, 高橋信博, 岡本浩一, 二宮一枝, 古賀寛: 日本人のフッ化物摂取基準. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金、医療安全・医療技術評価総合研究事業、フッ化物応用による歯科疾患予防のプログラムの構築と社会経済学的評価に関する総合的研究報告書 (総括). 2008;
- 16) 眞木吉信, 西牟田守, 中垣晴男, 小林清吾, 古賀 寛: 日本人のフッ化物摂取基準、-日本口腔衛生学会承認支援-. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金、医療安全・医療技術評価総合研究事業、フッ化物応用による歯科疾患予防のプログラムの構築と社会経済学的評価に関する総合的研究報告書. 2008;
- 17) 葭原明弘, 飛奈卓郎, 山賀孝之, 綾部誠也, 吉武裕, 木村靖夫, 島田美恵子, 西牟田守, 中川直樹, 大橋正春, 花田信弘, 田中宏暁, 清永明, 宮崎秀夫: 運動とアンジオテンシン変換酵素遺伝子多型との関連について. 平成 19 年度厚生労働科学研究補助金、医療安全・医療技術評価総合研究事業研究報告書 (総括). 2008;
- 18) 熊江隆, 金子佳代子, 大森佐與子: 女子大学生を対象とした牛乳摂取による体脂肪制御効果に関する介入研究調査. 社団法人 日本酪農乳業協会 平成 19 年度 牛乳栄養学術研究会委託研究報告書. 2008; 121-153
- 19) 門脇孝: アディポネクチンを標的にした糖尿病・メタボリック症候群の新規診断法・治療法の臨床応用. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金、医療技術実用化総合研究事業: 基礎研究成果の臨床応用推進研究. 2008;
- 20) 門脇孝: アディポネクチン受容体の生理・病態生理的意義解明と生活習慣病治療の分子標的の同定. H18~H19 年度文部科学研究費補助金 基盤研究(A). 2008;
- 21) 門脇孝: 保健指導への活用を前提としたメタボリックシンドロームの診断・管理のエビデンス創出のための横断・縦断研究. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金、循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008;
- 22) 江崎治, 山崎聖美: ニュートリゲノミクスを用いた高機能性新規食品の多機能性解明とその評価・管理に関する研究. 食品・農産物の表示の信頼性確保と機能性解析のための基盤技術の開発-機能性-. 2009; 16-17, 農林水産省農林水産技術会議事務局 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所 平成 20 年度運営委員会報告
- 23) 江崎治: メタボリックシンドローム予防・治療薬の開発のための基盤研究. 平成 19 年度 政策創薬総合研究 研究報告書. 2008; 227-232, 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団
- 24) 江崎治: モデル系を用いた環境要因の分子メカニズムについての解析. 厚生労働科学研究費補助金 創薬基盤推進研究事業、慢性疾患としての糖尿病の病期に注目した病態の解析と、新たな診断、治療法の探索、平成 19 年度総括・分担研究報告書 (主任研究者: 安田和基). 2008; 53-60
- 25) 山崎聖美: フルクトース摂取による肥満発症機序の解明と予防法の開発. 平成 19 年度科学研究費補助金実績報告書 基盤研究(C). 2008;
- 26) 山崎聖美: 核内受容体作動性化学物質の免疫担当細胞やマクロファージ、脂肪細胞への影響に関する研究. 厚生労働科学研究費補助金化学物質リスク研究事業、平成 19 年度 総括・分担研究報告書. 2008;
- 27) 山崎聖美: 形態形成期・思春期などの高感受性期にある集団での核内受容体作動性化学物質の有害性発現メカニズムの解明及びその評価手法にかかる総合研究 (主任研究者: 井上 達). 厚生労働科学研究費 化学物質リスク研究事業. 2008;
- 28) 山田和彦: 欧州連合 (EU) における食品の健康表示制度の動向. 平成 19 年度 厚生労働省科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業「特定保健用食品等の有効性・安全性を確保

- するための科学的根拠の評価方法に関する研究」(主任研究者：芝池伸彰) (分担) 研究報告書. 2008; 5-26
- 29) 山田和彦：特定保健用食品の新たな審査基準に関する研究. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金・食品の安心・安全確保推進事業・特定保健用食品の新たな審査基準に関する研究 (主任研究者：山田和彦). 2008;
- 30) 田中平三, 山田和彦, 今井ももこ：生活習慣病の栄養疫学と特別用途食品. 平成 19 年度厚生労働科学研究費補助金・食品の安心・安全確保推進事業・健康食品における安全性確保を目的とした基準等作成のための行政的研究(主任研究者：田中平三). 2008;
- 31) 矢野友啓：多様な生理活性持つ機能性成分の安定化による新たな難治性慢性疾患の予防および治療法の構築. 平成 19 年度厚生労働科学研究費政策創薬総合研究報告書. 2008; 222-226
- 32) 卓興鋼：機能性食品因子データベースの作成・公開に関する研究. 平成 19 年度創造的研究費による研究報告書. 2008;
- 33) 梅垣敬三：特定保健用食品の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価 -安全性・有効性に関するエビデンスの整理と検討-. 平成 19 年度 厚生労働省科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業「特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究」(主任研究者：芝池伸彰) (分担) 研究報告書. 2008; 27-30
- 34) 三好美紀：系統的レビュー：海外のポピュレーションストラテジーの事例について. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究. 2008; 39-53
- 35) 三好美紀：諸外国のポピュレーションストラテジーの事例調査. 厚生労働科学研究費補助金 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究. 2008; 55-60
- 36) 芝池伸彰：特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究. 平成 19 年度 厚生労働省科学研究費補助金 食品の安心・安全確保推進研究事業「特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究」(主任研究者：芝池伸彰) 総括研究報告書. 2008; 2-4
- 2) Tabata I: EPAR2006 and Exercise Guide 2006 for Health Promotion for Japanese. 2nd Shanghai International Forum on Exercise and Health. 2008.11.29, Shanghai University of Sports, Shanghai, China
- 3) Kadowaki T: Role of adiponectin and its receptors in obesity-linked insulin resistance and metabolic syndrome.. The 39th International Symposium entitled "Metabolic Syndrome: Carcinogenesis and Prevention ". 2008.11.12, Tokyo
- 4) Kadowaki T: 2008 Seoul Symposium on Obesity and Diabetes, Clinical Organ Network in the Pathogenesis of Type 2 Diabetes. . Research Institute, Seoul National University Hospital, Session 3. 2008.04.12, Seoul
- 5) Kadowaki T: Adiponectin and its receptors in insulin resistance, diabetes and metabolic syndrome and obesity . 10th European Congress of Endocrinology. 2008.05.06, Berlin
- 6) Kadowaki T: Adiponectin and its receptors in metabolic syndrome and diabetes . The 3rd Workshop on Cell Regulations in Division and Arrest Session 3. 2008.04.08, Japan(Okinawa)
- 7) Kadowaki T: Adiponectin, and AMPK kinase in the regulation of metabolism . FASEB SUMMER RESEARCH CONFERENCES, AMPK in Sickness and Health from Molecule to Man . 2008.08.14, Copenhagen
- 8) Kadowaki T: Causes and pathophysiology of type 2 diabetes-research into insulin resistance and fat cells. UK-Japan Workshop: Frontiers of Diabetes Research. 2009.02.17, Tokyo
- 9) Kadowaki T: Molecular Mechanism of Type 2 Diabetes . The 8th Japan-China Friendship Symposium on Diabetes Mellitus. 2008.04.26, Japan(Wakayama)
- 10) Melby MK: Varieties of Menopausal Experience and Relationship to Soy: Lessons from Japan. The 8th International Symposium on the Role of Soy in Health and Disease Prevention and Treatment. 2008.11.09, Tokyo, Japan
- 11) Melby MK: Varieties of Menopausal Experience: Anthropological Lessons from Japan. The 23rd Meeting of the Japanese Menopause Society. 2008.11.15, Tokyo, Japan
- 12) Omori T: Health Care Policy for the Elderly in Japan. Sipsio Ibero-Aericano Japonese sobre Geriatria y Gerontologia. 2008.11.25, Buenos Aires (Argentina)

【国際学会等】

a. 特別講演

- 1) Ishimi Y: Effects of soybean isoflavone on bone health and its safety on postmenopausal Japanese women. Foundation Conference of Specialty Committee of Geriatric Medicine, The World Federation of Chinese Medicine Societies. 2008.10.12, Beijing

b. シンポジウム等

- 1) Ishimi Y: Current Topics in Research on Soybean Isoflavones and Human Health . ICD2008. 2008.09.08, 横浜
- 2) Morita A: An Intervention Program for Weight Reduction Saku Control Obesity Program (SCOP). 日米医学協力計画 栄養代謝部会 日米合同会議 ベトナムラウンド. 2008.10.30, Hanoi, Vietnam
- 3) Morita A: An Intervention Program for Weight Reduction: Saku Control Obesity Program (SCOP). Japanese Ibero-American Symposium on Geriatrics and Gerontology. 2008.11.24, Buenos Aires, Argentina
- 4) Morita A: An Intervention Program for Weight Reduction:Saku Control Obesity Program (SCOP) . 日米医学協力計画 栄養代謝部会 日米合同会議 ベトナムラウンド. 2008.10.28, Ho Chi Minh, Vietnam
- 5) Morita A: Prevention of osteoporosis in Japan . Japanese Ibero-American Symposium on Geriatrics and Gerontology. 2008.11.25, Buenos Aires, Argentina
- 6) T.Utsugi M: Dietary reference intakes for Japanese.. Simposio Iberoamericano Japonese sobre Geriatria y Gerontologia.. 2008.11.24, Buenos Aires
- 7) Yoshita K: Standardization and Quality Control of Dietary Intake Survey of National Health and Nutrition Survey in Japan . ICD2008 . 2008.09.09, Yokohama, Japan
- 8) Yoshita K: The Issues in Using Dietary Reference Intakes for Japanese(2005). ICD2008. 2008.09.09, Yokohama, Japan
- 9) Ishimi M: Possible role of equol status on the effects of isoflavones on bone and fat mass in postmenopausal Japanese women. 第8回大豆国際シンポジウム. 2008.11.11, 東京
- 10) 石見佳子: 賢いメタボリックシンドローム対策:大豆の機能と健康. 第15回国際栄養士会議市民公開講座. 2008.09.10
- 11) Sanada K: Contribution of cardiorespiratory fitness and PPAR gamma gene to the metabolic syndrome. ASMeW International Symposium. 2008.08.27, Tokyo
- 12) Tabata I: Exercise Guide 2006 and EPAR2006-Health Promotion Symposium. 50th ICHIPER・SD Anniversary World Congress 2008. 2008.05.08, 鹿児島県 鹿屋市 鹿屋体育大学等
- 13) Yamamoto K, Kawano H, Gando Y, Iemitsu M, Murakami H, Sanada K, Tanimoto M, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: Flexibility is fitness related to arterial stiffness. 13th Annual Congress of the European College of Sport Science. 2008.07.12, Estoril, Portugal
- 14) Kubota T: Approach to Education of Obesity with Type 2 Diabetes. Japan-USA workshop, Tokyo. 2008.08.10
- 15) Aiba N: 日本における食育活動. 日米ワークショップ 国立健康・栄養研究所主催. 2008.08.29, 東京都
- 16) Teshima T: Role of food service to elderly persons. ICD2008. 2008.09.08
- 17) Nagata J: Effects of Structured lipids Containing Linoleic Acid, EPA or DHA and Medium-Chain Fatty Acids on Lipid Profiles in Rats. 99th AOCs Annual Meeting Symposium. 2008.05.19, Seattle (USA)
- 18) Yamada K: Foods for special dietary uses in Japan. Seminar and workshop on nutrition labeling, claims and communication strategies for the consumers organized by ILSI. 2008.08.15, Bangkok(Thailand)
- 19) 永田純一: トランス脂肪酸の問題と対応 -トランス脂肪酸問題にどう取り組むべきか-. ICD2008. 2008.09.08, 横浜
- 20) Taku K, Umegaki K, Ishimi Y, Watanabe S: Effects of Extracted Soy Isoflavones Alone on Blood Total and LDL Cholesterol: Meta-analysis of Randomized Controlled Trials.. 8th International Symposium on the Role of Soy in Health Promotion and Chronic Disease Prevention and Treatment. 2008.11.09, Tokyo, Japan
- 21) Umegaki K: Information networks on health foods and regulatory issues. 3RD ASIA PACIFIC CONFERENCE NUTRIGENOMICS '08. 2008.05.09, Melbourne, Australia
- 22) 梅垣敬三: Health problem and the role of dietitian. 「健康食品」の問題と対応. ICD2008. 2008.09.08, 横浜
- 23) Miyoshi M, Yoshiike N: International Cooperation Activities on Nutrition at the National Institute of Health and Nutrition. ICD2008. 2008.09.09, Yokohama
- 24) Mizuno S, Tsuboyama-Kasaoka N, Omori T: Some characteristics in obesity in Japanese.. US-Japan workshop “Challenges to Obesity Prevention” . 2008.08.29, Tokyo
- 25) 渡邊昌: Shimposio sobre Geriatria y Gerontologia Latinoamericana-Japonesa. 2008.11.24, アルゼンチン

c. 一般講演等

- 1) Arai Y, Miyoshi M, Hitomi O, Reiko H, Moe T, Nozue M, Naoko K, Hirota K, Yoshita K: Strategies for Health Promotion and Lifestyle-related Diseases Prevention by Shokuiku: Part II - Current Status of the Prefectural Basic Plan for Promotion of Shokuiku. 15th International Conference of

- Dietetics. 2008.09.09, Yokohama., Japan
- 2) Iki M, Tamaki J, Kadowaki E, Kouda K, Yura A, Ikeda Y, Sato Y, Morita A, Kagamimori S, Kagawa Y, Yoneshima H: Ten-year Change in Bone Mineral Density in a Representative Sample of Japanese Women - JPOS Cohort Study - . 30th Annual Meeting of the American Society for Bone and Mineral Research. 2008.09.13, Montreal, Canada
 - 3) Koitaya N, Ezaki J, Nishimuta M, Yamauchi J, Hashizume E, Morishita K, Sasaki S, Ishimi Y: Effects of low dose vitamin K2 (MK-4) supplementaion on bio-indices in postmenopausal Japanese women. 第 30 回米国骨ミネラル学会. 2008.09.14, Canada
 - 4) Kusama K, Ishikawa M, Nozue M: Activities for 40 Years of Dietitians in Japan Overseas Cooperation Volunteers. 15th International Conference of Dietetics. 2008.09.09, Yokohana, Japan
 - 5) Maruo T, Toda T, Ito C, Sakamoto M, Ishimi Y, Yamada K, Benno Y: Detection of the equol producung bacterium Adlercreutzia equolifaciens in human feces by nested PCR method. 第 8 回大豆国際シンポジウム. 2008.11.11, 東京
 - 6) Morita A, Suzuki N, Ohmori Y, Watanabe S, Aiba N, Miyachi M, Sasaki S, Morioka M : An Intervention Program Based on Behavior Change Theories for Weight Reduction -Saku Control Obesity Program (SCOP)- . XVIII World Congress of Epidemiology . 2008.09.24, Porto Alegre, Brazil
 - 7) Nozue M, Arai Y, Ishida H, Sarukura N, Yoshita K: Relationship between Dietary Intake and Nutritional Status among School Children in Japan. 15th International Conference of Dietetics. 2008.09.09, Yokohama, Japan
 - 8) Nozue M, Kyungyul J, Ishihara Y, Taketa Y, Naruse A, Nagai N, Yoshita K, Ishida H: Relationship between Dietary Intake of School Lunch, Weight Status and Health Behaviors among School Children in Japan. The 40th Conference of Asia-Pacific Academic Consortium for Public Health. 2008.11.08, Kuala Lumpur, Malaysia
 - 9) Ohmori Y, Morita A, Suzuki N, Watanabe S, Aiba N, Miyachi M, Sasaki S, Morioka M: A New Intervention Program Based on Behavior Change Theories for Obese People- Saku Control Obesity Program . ICD2008. 2008.09.10, Yokohama, Japan
 - 10) Otaki Y, Ezaki J, Abe F, Ishimi Y: Effects of dietary high carbohydrate on equol production and bone mass in ovariectomized mice treated with daidzein. 第 8 回大豆国際シンポジウム. 2008.11.11, 東京
 - 11) Otaki Y, Yamazaki C, Ishimi Y, Ishiwata H: Effects of daidzein and equol on bone formation in fetal, suckling and growing rats. ICD2008. 2008.09.10, 横浜
 - 12) Tamaki J, Iki M, Morita A, Sato Y, Kajita E, Kagamimori S, Kagawa Y, Yoneshima H: Effect of parity on bone mineral density in premenopausal women: JPOS Cohort Study . 30th Annual Meeting of the American Society for Bone and Mineral Research. 2008.09.13, Montreal, Canada
 - 13) Yamane M, Nakamura N, Imakuma T, Ishimi Y: Effects of lycopene on bone mineral density on SAMP6 as a senile osoteporosis model. 8th World Congress and 11th ISHS Symposium. 2008.06.09, Canada
 - 14) Yoshita K, Oshino E, Miura K, Tabata M, Nozue M, Arai Y, Nakagawa H: A study on the Effectiveness of Nutritional Education after Medical Checkups . ICD2008. 2008.09.10, Yokohama, Japan
 - 15) Cao ZB, Miyatake N, Higuchi M, Ishikawa-Takata K, Miyachi M, Tabata I: Research on Developing Non-exercise Prediction Equation of Vo_{2max} for Adult Women. 2nd Shanghai International Forum on Exercise and Health. 2008.11.29, Shanghai University of Sports, Shanghai, China
 - 16) Gando Y, Kawano H, Yamamoto K, Murakami H, Tanimoto M, Iemitsu M, Ohmori Y, Sanada K, Tabata I, Higuchi M, Miyachi M: Physical activity estimated by triaxial accelerometer is an independent predictor of arterial stiffening. 2008 APS INTERSOCIETY MEETING. 2008.09.24, HILTON HEAD, SOUTH CAROLINA
 - 17) Hazizi Abu Saad, Leong Yu Man, Tabata I, Zahratul Nur Kalmi: Relationship between pedometer-determined physical activity and body composition variables among students of the University Putra Malaysia. 24th Scientific Conference and Annual General Meeting of the Nutrition Society of Malaysia. 2009.03.26, Kuala Lumpur, Malaysia
 - 18) Kawahara J, Tanaka C, Tanaka S, Aoki Y, Yonemoto J: Estimation of daily inhalation rate of preschool children by using tri-axial accelerometer. Int Soc Environmental Epidemiol & Int Soc Exposure Analysis 2008 Joint Annual Conference. 2008.10.12, Pasadena, California, USA
 - 19) Koizumi K, Omori K, Ito S, Watanabe K, Kaneko K, Ishikawa-Takata K: Physical

- activity assessed by triaxial accelerometer in Japanese adolescents. International Federation for Home Economics XXI World Congress. 2008.06.31, Lucerne, Switzerland
- 20) Miyachi M, Morita A, Aiba N, Sasaki S, Watanabe S, SCOP Group: Effects of transtheoretical model-based intervention on abdominal obesity: Saku community-based randomized control trial. American Heart Association, Nutrition, Physical Activity and Metabolism Conference 2009, Circulation. 2009.03.17, Innisbrook Resort and Golf Club, Palm Harbor, FL, USA
- 21) Murakami H, Iemitsu M, Yamamoto K, Kawano H, Gando Y, Omori Y, Sanada K, Miyachi M: The effect of physical activity on the association between homocysteine levels and MTHFR genotype. APS Intersociety Meeting: The integrative biology of exercise. 2008.09.25
- 22) Oshima Y, Kawaguchi K, Doi R, Ohkawara K, Hikiyama Y, Ishikawa-Takata K, Tanaka S, Ebine N, Tabata I: Significance of Lifestyle Activity in Daily Life Assessed by Triaxial Accelerometer. 2008 American College of Sports Medicine (ACSM). 2008.05.28, Indianapolis, IN
- 23) Sanada K, Miyachi M, Iemitsu M, Murakami H, Tabata I, Yamamoto K, Tanimoto M, Kawano H, Suzuki K, Higuchi M: The PPAR gamma gene, cardiorespiratory fitness and metabolic syndrome in young and old Japanese men and women. 13th Annual Congress of the European College of Sport Science. 2008.07.12, Estoril, Portugal
- 24) Sanada K, Miyachi M, Kuchiki T, Ebashi H, Higuchi M: Ventilatory threshold is associated with abdominal obesity and previous cardiovascular diseases in Japanese adults. 55th Annual Meeting of the American College of Sports Medicine. 2008.05.30, Indianapolis, USA
- 25) Taguchi M, Suzuki S, Kamei A, Yanagisawa K, Ishikawa-Takata K, Ebi K, Kimura M, Koshimizu T: New qualification system for sports dietitian in Japan. ICD2008. 2008.09.10, Kanagawa, Japan
- 26) Tanimoto M, Arakawa H, Sanada K, Tabata I, Miyachi M: Slow squat training has unfavorable effects on muscle activation and force generation patterns during cycling movements. Annual Congress of the European College of Sport Science. 2008.07.10, Estoril
- 27) Yamamoto K, Kawano H, Gando Y, Omori Y, Iemitsu M, Murakami H, Sanada K, Tanimoto M, Higuchi M, Tabata I, Miyachi M: Interaction Between Flexibility and Cardiorespiratory Fitness on Arterial Stiffness. The Integrative Biology of Exercise V. 2008.09.24, South Carolina, USA
- 28) Awazawa M, Ueki K, Kaneko K, Yamauchi T, Kadowaki T: Adiponectin Suppresses Hepatic Srebp1c Expression and Fatty Acid Synthesis Through An AdipoR1/LKB1/AMP Activated Protein Kinase Dependent Pathway. The 8th Japan-China Friendship Symposium on Diabetes Mellitus. 2008.04., Japan(Wakayama)
- 29) Awazawa M, Ueki M, Kaneko K, Kubota N, Yamauchi T, Kadowaki T: Adiponectin increases IRS2 via STAT3 activation in liver. Keystone Symposia. 2009.01.20, Banff, Alberta, Canada
- 30) Kubota N, Kubota T, Itoh S, Terauchi Y, Ueki K, Kadowaki T: Dynamic functional relay between insulin receptor substrate-1 and -2 in hepatic insulin signaling during fasting and feeding. The 68th American Diabetes Association Scientific Sessions. 2008.06.06, San Francisco (USA)
- 31) Kubota N, Kubota T, Yamauchi T, Ueki K, Kadowaki T: Dynamic functional relay between insulin receptor substrate-1 and -2 in hepatic insulin signaling during fasting and feeding. The 1st Insulin Resistance in Metabolic Disease Forum. 2008.09., Japan(Osaka)
- 32) Kubota N, Kubota T, Yamauchi T, Ueki K, Kadowaki T: Dynamic functional relay between insulin receptor substrate-1 and -2 in hepatic insulin signaling during fasting and feeding. The 4th Scientific Meeting of Asia-Pacific Diabetes and Obesity Study Group. 2008.09., Japan(Osaka)
- 33) Kubota T, Kubota N, Kozono H, Takahashi T, Itoh S, Ueki K, Kadowaki T: Insulin signaling in endothelial cells participates in the regulation of skeletal muscle insulin sensitivity. Scientific Sessions 68th American Diabetes Association. 2008.06., San Francisco
- 34) Kubota T, Kubota N, Yamaguchi S, Inoue M, Ueki K, Kadowaki T: Insulin signaling in endothelial cells participates in the regulation of skeletal muscle insulin sensitivity. The 10th Symposium on Molecular Diabetology in Asia. 2008.10.29, Guangzhou
- 35) Aiba N, Rohana Jaili, Hiroyuki Tanaka, Shaw Watanabe: The national movement of food education "SHOKUIKU" in Japan. ICD2008.

- 2008.09.09, Yokohama
- 36) Gotoh M, Ohmori Y, Suzuki N, Suda N, Aiba N, Morita A, Watanabe S: Association of weight loss with changing of eating behaviors in obese subjects: the Saku Control Obesity Program (SCOP) . ICD2008. 2008.09.09, Yokohama, Japan
- 37) Ide T, Nihei A, Aiba N, Oka J, Watanabe S: The evaluation of dietary attitude of parents and breakfast skipping of their children for SHOKUIKU promotion. ICD2008. 2008.09.09
- 38) Melby MK, Watanabe S: Is it possible to assign equal producer phenotype based on singlicate blood samples?. The 8th International Symposium on the Role of Soy in Health and Disease Prevention and Treatment. 2008.11., Tokyo, Japan
- 39) Nakade M, Aiba N, Goto M, Suda N, Morita A, Watanabe S: Determinants of Successful Body weight Reduction. 7th International Society of Behavioral Nutrition and Physical Activity. 2008.05.22, Banff, Canada
- 40) Kashiwagi K, Yano Y, Kumadaki I, Hagiwara K, Yano T: Negative growth control of lung cancer cells under hypoxia buy a redox-silent analogue of tocotreinol. 2008AACR annual meeting. 2008.04.14, San Diego, CA, USA
- 41) Takano Y, Sato H, Nagashima Y, Ueno K, Yano T: The Study for the tumor suppression effect of conenxin 32 gene between a chemotherapeutic agent. 第 67 回日本癌学会学術総会. 2008.10.28, 名古屋
- 42) Taki Y, Yamazaki U, Shimura F, Umegaki K, Yamada S: Identification and characterization of substance in ginkgo biloba extract (GBE) that induces hepatic CYPs. 2nd Asian Pacific Regional ISSX Meeting. 2008.05., 上海
- 43) Miyoshi M, Tsubokura M, Arai Y, Okubo H, Hashimoto R, Nozue M, Koike N, Hirota K, Yoshita K, Yoshiike N: Strategies for Health Promotion and Lifestyle-related Diseases Prevention by Shokuiku: Part 1 - Systematic Review and Application of Overseas Evidences. ICD2008. 2008.09.09, Yokohama
- 44) Mizuno S, Tsuboyama-Kasaoka N, Toyonori Omori: Some characteristics in obesity trend in Japanese.. Challenges to Obesity Prevention, US-Japan Workshop. 2008.08.29, Tokyo
- 45) 大賀英史, 大森豊緑, 江指隆年: Successful self regulation for relaxed-mind in a borderline diabetic patient -with learning the function of human brain system related to digestion and satisfaction-. The10th International Congress of Behavioral Medicine. 2008.08.16, TOKYO
- 46) 渡邊昌: Functional Foods Research and Regulation in Japan . Anti-Aging Medicine World Congress. 2008.04.11, Paris, France

【国内学会等】

a. 特別講演

- 1) 宮地元彦: メタボリックシンドロームの予防と解消～行動変容を起こさせる特定健診・保健指導とは. 第 40 回日本動脈硬化学会. 2008.07.10, つくば国際会議場, 茨城県つくば市
- 2) 宮地元彦: メタボリックシンドロームを予防・改善する運動・身体活動、特定保健指導における「運動」「食事」指導. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京国際フォーラム
- 3) 宮地元彦: メタボリックシンドローム改善のためのコンディショニングの実際. NSCA Japan Strength & Conditioning Conference 2008 (日本ストレングス&コンディショニング協会). 2008.11.22, 早稲田大学 (所沢)
- 4) 田畑泉: 特定保健指導における体力科学の役割. 第 143 回日本体力医学会 関東地方会. 2008.06.05, 東京都千代田区 明治安田生命 MY PLAZA
- 5) 門脇孝: 2 型糖尿病の成因を追い求める旅～真理への希求. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京
- 6) 門脇孝: J-DOIT3. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.24, 東京
- 7) 門脇孝: Metabolic Syndrome と NASH. 「Metabolic Syndrome と肝疾患」研究会. 2008.11.29, 東京
- 8) 門脇孝: あなたもメタボにご用心～明日からできるメタボ対策～. キャノン(株)講演会. 2008.09.03, 東京
- 9) 門脇孝: タケダ糖尿病スペシャリストへの期待 最適な糖尿病治療の普及のために. 武田薬品第 7 期スペシャリストコース開講式. 2008.11.15, 東京
- 10) 門脇孝: トータルな血管合併症抑制を目指す糖尿病治療戦略. 第 45 回日本糖尿病学会/第 44 回日本糖尿病協会近畿地方会. 2008.11.22, 神戸
- 11) 門脇孝: メタボリックシンドロームとアディポネクチン. 第 47 回東京脂質代謝研究会. 2008.07.25, 東京
- 12) 門脇孝: メタボリックシンドロームの治療的介入—統合失調症の治療をめぐる問題を含めて. 大塚製薬(株)社内講演会. 2008.10.10, 東京
- 13) 門脇孝: メタボリックシンドロームの病態と治療戦略. 糖尿病 UP-TO DATE. 2008.11.16, 東京
- 14) 門脇孝: メタボリックシンドロームの病態と治療—男性更年期との関連. 第 8 回日本 Men's

- Health 医学会. 2008. 11. 29, 東京
- 15) 門脇孝: メタボリック健診と糖尿病. 第4回 SRL Update Forum. 2008. 07. 05, 札幌
- 16) 門脇孝: メタボリック症候群とアディポカイン. 第51回日本腎臓学会学術総会. 2008. 06. 01, 福岡
- 17) 門脇孝: 遺伝子操作マウスを用いた糖尿病研究. 第1回疾患モデルシンポジウム. 2008. 12. 03, 東京
- 18) 門脇孝: 遺伝子操作動物を用いた糖尿病研究の戦略. 第23回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会. 2009. 02. 13, 岡山
- 19) 門脇孝: 基礎研究の現状(創薬に向けて). JST-CADS 「戦略俯瞰ワークショップ」第2部「基礎研究及び医薬品研究開発」. 2009. 01. 09, 東京
- 20) 門脇孝: 合併症予防のための糖尿病の治療戦略—網膜症を中心に—. 第4回静岡県中部糖尿病眼合併症フォーラム. 2008. 10. 30, 静岡
- 21) 門脇孝: 合併症抑制を目指した糖尿病治療戦略—エビデンスを踏まえたチーム医療のアプローチ—. 新宿糖尿病フォーラム 2008. 2008. 10. 23, 東京
- 22) 門脇孝: 合併症抑制を目指した糖尿病治療戦略—エビデンスを踏まえたチーム医療のアプローチ—. 第5回臨床医のための糖尿病合併症セミナー. 2008. 07. 31, 東京
- 23) 門脇孝: 心血管イベントの抑制を見据えた2型糖尿病の治療戦略. 鳥取県中部医師会学術講演会. 2008. 11. 20, 鳥取
- 24) 門脇孝: 心血管イベント抑制に向けた糖尿病の治療戦略. 鎌倉糖尿病セミナー. 2008. 08. 27, 鎌倉
- 25) 門脇孝: 心血管イベント抑制に向けた糖尿病の治療戦略. 第20回岡山生活習慣病談話会. 2008. 04. 15, 岡山
- 26) 門脇孝: 心血管症抑制を見据えた2型糖尿病の治療戦略と実際のアプローチ. 佐賀県医師会学術講演会. 2008. 06. 27, 佐賀
- 27) 門脇孝: 心血管症抑制を目指した2型糖尿病の治療戦略. 健康寿命延長を考える会. 2008. 04. 24, 郡山
- 28) 門脇孝: 生活習慣病とインスリン抵抗性、アディポネクチン. 第29回日本炎症・再生医学会. 2008. 07. 10, 東京
- 29) 門脇孝: 生活習慣病における医療薬学—大学発創薬から医療現場での実践まで—. 医療薬学フォーラム 2008—第16回クリニカルファーマシーシンポジウム. 2008. 07. 12, 東京
- 30) 門脇孝: 生活習慣病のゲノム創薬. 創薬薬理フォーラム第16回シンポジウム. 2008. 09. 19, 東京
- 31) 門脇孝: 生活習慣病の病態解明と治療薬開発における制御化合物の意義. 文部科学省ターゲットタンパク研究プログラム第2回研究会. 2009. 02. 10, 東京
- 32) 門脇孝: 生活習慣病の分子機構・遺伝素因解明とテラーメイド医療の展望. CBI 学会 2008 年大会. 2008. 10. 23, 東京
- 33) 門脇孝: 対糖尿病戦略をメタボリックシンドロームからアプローチ. 第25回糖尿病 Up Date 賢島セミナー. 2008. 08. 23, 三重
- 34) 門脇孝: 糖尿病、メタボリックシンドロームの病態と治療戦略—J-DOIT3 の重要性—. 生活習慣病フォーラム 2008 in Kokura. 2008. 06. 24, 福岡
- 35) 門脇孝: 糖尿病と合併症の予防の進め方. 第10回城南生活習慣病セミナー. 2008. 09. 18, 東京
- 36) 門脇孝: 糖尿病と精神疾患—非定型抗精神病薬投与時の代謝モニタリング—. Dopamine System Stabilizer Symposium in Tokyo 2008. 2008. 10. 31, 東京
- 37) 門脇孝: 糖尿病における脳・心・腎合併症予防のための治療戦略. 脳・心・腎 Round Table meeting. 2009. 01. 30, 広島
- 38) 門脇孝: 糖尿病のゲノム・トランスクリプトーム・バイオマーカーとテラーメイド治療・予防. オミックス医療が拓く未来 2008. 2008. 07. 03, 東京
- 39) 門脇孝: 糖尿病の下肢障害の診断と治療. Spinal Symposium in Tokyo. 2008. 09. 04, 東京
- 40) 門脇孝: 糖尿病の原因遺伝子解明とテラーメイド医療の展開. Incretin&Islet Initiative 世話人会. 2008. 11. 08, 東京
- 41) 門脇孝: 糖尿病の合併症の管理—日常診療を向上させる7つのポイント—. 栃木県糖尿病臨床研究会. 2008. 04. 17, 宇都宮
- 42) 門脇孝: 糖尿病の合併症の管理—日常診療を向上させる7つのポイント—. 魚沼地区糖尿病合併症研究会. 2008. 11. 05, 新潟
- 43) 門脇孝: 糖尿病の合併症の予防と管理—日常診療を向上させる7つのポイント—. 第10回糖尿病性トリパチー研究会. 2008. 07. 17, 岐阜
- 44) 門脇孝: 糖尿病の成因と治療に関する最近の話題. 第3回日本内科学会生涯教育講演会. 2008. 09. 07, 松山
- 45) 門脇孝: 糖尿病の病態と治療の新しい考え方—より良いチーム医療の実現を目指して—. 第9回徳島糖尿病フォーラム. 2008. 07. 11, 徳島
- 46) 門脇孝: 糖尿病の病態と治療戦略—最近の大規模臨床試験を踏まえて—. TZD Symposium 2009 WINTER in SENDAI. 2009. 02. 05, 仙台
- 47) 門脇孝: 糖尿病の病態と治療戦略—最近の大規模臨床試験を踏まえて—. 糖尿病 Expert Meeting. 2009. 01. 20, 熊本
- 48) 門脇孝: 糖尿病患者における積極的・多角的治療介入—その意義と実践: J-DOIT3 から. 第43回糖尿病学の進歩. 2009. 02. 20, 松本
- 49) 門脇孝: 糖尿病患者を血管合併症から守るための治療戦略—早期介入の重要性—. 第3回 Metabolic-Cardiology 研究会. 2009. 01. 17, 東京
- 50) 門脇孝: 糖尿病合併症の管理—日常診療を向上させる7つのポイント—. 吹田糖尿病連携ネッ

- トワーク講演会. 2008. 11. 22, 大阪
- 51) 門脇孝: 糖尿病治療におけるパラダイムシフトとアクトスの有用. 第 11 回三浦半島糖尿病座談会. 2009. 03. 04, 神奈川
 - 52) 門脇孝: 糖尿病治療の希望と挑戦. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008. 05. 23, 東京
 - 53) 門脇孝: 糖尿病成因解明への長い旅—真理への希求, A long journey seeking for the cause of diabetes-aspiration for the truth. 第 50 回日本消化器病学会. 2008. 10. 02, 東京
 - 54) 門脇孝: 保健指導への活用を前提としたメタボリックシンドロームの診断・管理のエビデンス創出のための横断・縦断研究. 厚生労働省科学研究費 研究成果発表会. 2009. 02. 10, 東京
 - 55) 手嶋登志子: 食介護口から食べるしあわせづくり. 第 14 回東海嚥下食研究会. 2008. 11, 名古屋
 - 56) 手嶋登志子: 豊かに食べる一食文化、栄養学の視点から. 第 14 回日本摂食・嚥下リハビリ学会学術大会. 2008. 09., 千葉
 - 57) 矢野友啓: コネキシン遺伝子の癌抑制機能と癌治療への応用の可能性. 第 19 回細胞間ジャンクション研究会. 2009. 01. 17, 東京
 - 58) 渡邊昌: Phytochemical の健康影響. 第 25 回日本微量栄養素学会学術集会. 2008. 05. 30, 京都
 - 59) 渡邊昌: 食育のめざすもの. 第 2 回日本食育学会総会・学術大会. 2008. 05. 31, 東京
 - 60) 渡邊昌: 天ぷらだって工夫次第で低カロリーメニュー. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008. 05. 23, 東京
 - 61) 渡邊昌: 理事会・エビデンス評価委員会. 中間法人日本予防医療評価機構. 2008. 05. 24, 東京
- b. シンポジウム等**
- 1) 古賀 寛, 眞木吉信, 西牟田守: う蝕予防のための日本人のフッ化物摂取基準案とその意義. 第 19 回日本微量元素学会. 2008. 07. 03, 東京
 - 2) 佐藤七枝, 児玉直子, 土橋 昇, 佐藤裕美, 山内好江, 西牟田守: 尿中デオキシピリジノリン排泄に及ぼす食事の影響; 低たんぱく質、低脂質、高炭水化物食; 低たんぱく質、低脂質、高炭水化物食. 第 62 回日本栄養・食糧学会大会. 2008. 05. 03, 坂戸市
 - 3) 山内淳: ビタミン D の機能と遺伝子. 第 83 回日本栄養・食糧学会関東支部会シンポジウム. 2009. 03. 14, 女子栄養大学 (東京・駒込)
 - 4) 石見佳子: Effects of soybean isoflavones on prevention of postmenopausal syndromes in Japanese women. 第 8 回日本抗加齢医学会総会 International Session. 2008. 06. 06
 - 5) 由田克士: 健康食品と栄養サプリメント等の利用実態 ～栄養成分表示・栄養教育検討委員会調査並びに国民健康・栄養調査の成績より～. 第 62 回 日本栄養・食糧学会大会 . 2008. 05. 04, 坂戸市
 - 6) 宮地元彦: Large elastic artery stiffness: a therapeutic target for habitual exercise. 第 40 回日本動脈硬化学会. 2008. 07. 10, つくば国際会議場、茨城県つくば市
 - 7) 宮地元彦: 高血圧症に有効な運動、シンポジウム⑤ メタボリックシンドローム対策における最近の動向. 第 19 回日本臨床スポーツ医学会学術集会. 2008. 11. 01, 幕張メッセ国際会議場、幕張、千葉
 - 8) 熊江隆: 運動・身体活動の指標としての免疫 血清オプソニン化活性の変動. 第 63 回日本体力医学会大会予稿集. 2008. 09. 17, 大分県別府市
 - 9) 熊江隆: 好中球化学発光の開発、進展、そして未来. 第 18 回 体力・栄養・免疫学会 プログラム・抄録集. 2008. 08. 30, 大分県湯布院町
 - 10) 高田和子: 世界のスポーツ栄養士養成制度. 第 2 回日本スポーツ栄養研究会学術集会. 2008. 07. 05, 群馬県高崎市
 - 11) 田畑泉: 「健康づくりのための運動指針 2006 (エクササイズガイド 2006) —生活習慣病の発症予防のために—、測定評価分科会シンポジウム、. 日本体育学会第 59 回大会. 2008. 09. 11, 早稲田大学, 東京
 - 12) 田畑泉: 運動の役割-エクササイズガイドのすすめ-. シンポジウム I : メタボへの挑戦-運動と栄養の役割分担-第 12 回日本ウオーキング学会大会. 2008. 06. 29, 東京学芸大学, 東京
 - 13) 田畑泉: 運動療法に役立つ実践運動生理学のポイント-エクササイズガイド 2006 に関連して-教育研修講演 II. 第 34 回日本整形外科スポーツ医学会学術集会. 2008. 07. 04, 都市センターホテル、東京
 - 14) 田畑泉: 健康づくりのためのエクササイズガイド 2006—シンポジウム③メタボリックシンドローム対策における最近の動向. 第 19 回日本臨床スポーツ医学会学術集会. 2008. 11. 01
 - 15) 田畑泉: 平成 18 年 7 月に呈示された健康づくりのための運動指針 2006 に関して、組織委員会企画シンポジウム A. . 日本体育学会第 59 回大会. 2008. 09. 10, 早稲田大学大隈講堂, 東京
 - 16) Kubota N, Kubota T, Kumagai H, Yamauchi T, Ueki K, Kadowaki T: Insulin signaling defect in endothelial cells causes skeletal muscle insulin resistance. 第 40 回日本動脈硬化学会総会・学術集会シンポジウム. 2008. 07. 11, 茨城
 - 17) 窪田直人, 窪田哲也, 伊藤晋介, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肝臓の糖代謝における IRS-1、IRS-2 の役割の検討. 第 13 回アディポサイエンス研究会シンポジウム. 2008. 08. 22, 大阪
 - 18) 窪田直人, 窪田哲也, 山口真一, 山内敏正, 植木浩二郎, 鎌田勝雄, 門脇孝: 血管内皮細胞のインスリンシグナル障害は骨格筋インスリン抵抗性を引き起こす. 第 129 年会日本薬学会シンポジウム. 2009. 03. 26, 京都
 - 19) 窪田直人, 窪田哲也, 山口真一, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インスリン感受性調節における血管内皮細胞インスリンシグナルの役割. 第 23 回 日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集

- 会シンポジウム. 2009.02.13, 岡山
- 20) 窪田直人, 窪田哲也, 山内敏正, 植木浩二郎, 箕越靖彦, 門脇孝: アディポネクチンの摂食・エネルギー調節における役割. 第51回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京
- 21) 窪田直人, 窪田哲也, 門脇孝: 肝臓の糖・脂質代謝における IRS-1、IRS-2 の機能的な役割分担. 第43回 糖尿病学の進歩レクチャー. 2009.02.20, 長野
- 22) 窪田直人, 大杉満, 植木浩二郎, 野田光彦, 門脇孝: 膵β細胞量調節機構と2型糖尿病. 第8回 Islet Biology 研究会. 2008.08., 東京
- 23) 窪田直人, 門脇孝: アディポカイン異常とメタボリックシンドローム. 第16回 日本ステロイドホルモン学会学術集会. 2008.11.22, 福井
- 24) 窪田直人, 門脇孝: インスリン抵抗性とメタボリックシンドローム. 第6回徳島大学疾患酵素研究センターシンポジウム. 2008.12., 徳島
- 25) 窪田哲也, 窪田直人, 熊谷洋紀, 小園秀樹, 高橋雄大, 杉薫, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: インスリン抵抗性発症における血管と骨格筋のネットワーク機構の解明. 第51回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京
- 26) 門脇孝: 糖尿病の病態と治療戦略～最近の大規模臨床試験を踏まえて～. DM management conference. 2009.02.10, 東京
- 27) 手嶋登志子: 高齢者の栄養管理—高齢者施設における食介護に関するアンケート調査 全国調査一. 第55回日本栄養改善学会. 2008.09, 鎌倉市
- 28) 亀井康富, 三浦進司, 菅波孝祥, 赤池史子, 金井紗綾香, 杉田聡, 勝又阿貴, 江崎治, 小川佳宏: 骨格筋における SREBP1c 遺伝子の発現調節: 核内受容体 LXR/RXR およびフォークヘッド因子 FOXO1 の役割. 第13回 アディポサイエンス研究会シンポジウム. 2008.08.22, 千里阪急ホテル (大阪府)
- 29) 江崎治, 三浦進司: 運動トレーニングによる抗肥満/糖尿病の分子機序. 第51回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.23, 東京国際フォーラム(東京)
- 30) 赤池史子, 亀井康富, 菅波孝祥, 金井紗綾香, 岡淳一郎, 三浦進司, 江崎治, 小川佳宏: 骨格筋で核内受容体 RXR γ を過剰発現させた遺伝子改変マウスは、食餌性肥満に抵抗性を示す. 第13回 アディポサイエンス研究会シンポジウム. 2008.08.22, 千里阪急ホテル (大阪府)
- 31) 佐藤洋美, 矢野友啓, 岩田紘輝, 高野泰幸, 奥沢紘子, 上野光一: コネキシン 32 遺伝子の癌抑制機能に関する研究. 第2回次世代を担う若手医療薬科学シンポジウム. 2008.12.22, 広島
- 32) 山田和彦: コーデックス会議における食物繊維の問題. 第48回澱粉懇談会(SRT). 2008.06.08, 伊東市
- 33) 山田和彦: 特定保健用食品の表示と審査基準について. 日本薬学会レギュラトリーサイエンス部会主催第6回食品安全フォーラム. 2008.11.28
- 34) 山田和彦: 保健機能食品の成り立ちと現状. 日本生薬学会第55回年会. 2008.09.19, 長崎市
- 35) 中島啓介, 伊南和佳奈, 竹林純, 矢野善久, 安藤章, 萩原清和, 矢野友啓: トコトリエノールの redoxi-silent 化による抗ガン活性強化の可能性. 第5回トコトリエノール研究会. 2008.11.18, 東京
- 36) 矢野友啓: 抗がん成分としてのビタミン Eredox-silent 誘導体. レドックス生命科学第170委員会. 2008.08.01, 静岡
- 37) 梅垣敬三: 「機能性食品の検証と展望」: 機能性食品の科学的根拠と利用対象者. 第55回日本食品科学工学会. 2008.09.06, 京都
- 38) 梅垣敬三: 「健康食品」の科学的根拠とデータベース. 第30回日本臨床栄養学会総会・第29回日本臨床栄養協会総会第6回連合大会. 2008.10.11, 東京
- 39) 梅垣敬三: 「健康食品」の機能性表示と規制. 日本糖質学会. 2008.08.20, つくば
- 40) 梅垣敬三: 『健康食品』の安全性確保に対する取り組み. 「健康食品」の現状と問題点. 第62回日本栄養・食糧学会. 2008.05.04, 坂戸
- 41) 梅垣敬三: サプリメントのエビデンス. 第6回抗加齢歯科医学研究会. 2008.04.13, 東京
- 42) 梅垣敬三: 科学的な健康食品情報のデータベース化. 日本健康科学学会健康フォーラム. 2009.02.26, 東京
- 43) 梅垣敬三: 市民のための健康情報とは—健康食品・サプリメントと健康情報. 第6回日本セルフメディケーション学会. 2008.10.25, 名古屋
- 44) 笠岡(坪山)宜代: 21世紀における管理栄養士の活躍への期待～研究栄養士の魅力とは～. 日本栄養士会シンポジウム、平成20年度 全国研究教育栄養士協議会 研修会. 2009.02.28
- 45) 笠岡(坪山)宜代: 研究者のキャリアパス ～アメリカの事例から～. 栄養学若手研究者の集い 夏期研究会. 2008.08.31, 東京、日本青年館
- 46) 大賀英史: 地域におけるソーシャル・キャピタルとK6の信頼性、妥当性との関連. 第79回日本衛生学会総会. 2009.03.30, 東京
- 47) 渡邊昌: メタボリックシンドローム: 発がんへの関与とその予防. 高松宮妃がん研究基金第39回国際シンポジウム. 2008.11.13, 東京

c. 一般講演等

- 1) ジョンギョンイル, 野末みほ, 石原洋子, 武田安子, 永井成美, 由田克士, 石田裕美: 学校給食の摂取量における身体状況および生活習慣との関連性 (第2報). 第55回日本栄養改善学会学術総会. 2008.09.06, 鎌倉市
- 2) ジョンギョンイル, 野末みほ, 武田安子, 由田克士, 石田裕美: 児童において食事の中で学校給食のしめる割合とその摂取状況について. 第67回日本公衆衛生学会. 2008.11.06, 福岡市

- 3) 奥田奈賀子, 三浦克之, Tanvir Chowdhury Turin, 高嶋直啓, 藤吉 朗, 上島弘嗣, 松村康弘, 由田克士, 中村保幸, 岡村智教, 早川岳人, 岡山 明, NIPPON DATA 研究班: NIPPON DATA80・90 への国民栄養調査結果の結合. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 4) 河嶋伸久, 森田明美, 大森由実, 鈴木望, 佐々木敏, 饗場直美, 渡邊昌: 肥満者の性格が介入効果に及ぼす影響 佐久肥満克服プログラム (SCOP Study) . 第 29 回日本肥満学会. 2008. 10. 17, 大分
- 5) 梶田悦子, 小松美砂, 武内さやか, 前田秀一, 三田村純枝, 阿部喜代子, 森田明美, 伊木雅之: 中高年女性の 15 年間の腰椎骨密度変化と身体活動. 第 67 回日本公衆衛生学会総会. 2008. 11. 07, 福岡市
- 6) 玉置淳子, 伊木雅之, 平野豊, 森田明美, 池田行宏, 梶田悦子, 鏡森定信, 香川芳子, 米島秀夫: ビタミン D 受容体の遺伝子多型と頸動脈エコーによる動脈硬化性病変の関連の検討 -JPOS Study による満 10 年追跡調査. 第 19 回日本疫学会学術総会 . 2009. 01. 24, 金沢市
- 7) 栗本鮎美, 大久保孝義, 栗田圭一, 鈴木和広, 坪田(宇津木)恵, 浅山敬, 瀬川香子, 末永カツ子, 今井潤, 佐藤洋: 日本語版 Lubben Social Network Scale 短縮版の作成と信頼性および妥当性の検討. . 日本公衆衛生学会総会. 2008. 11. 05, 福岡
- 8) 江崎潤子, 呉堅, 田畑泉, 西牟田守, 山田和彦, 石見佳子: 男性の骨粗鬆症・骨折の予防を目的とした運動と食品成分の併用効果に関する研究. 第 55 回栄養改善学会. 2008. 09. 07, 鎌倉
- 9) 荒井裕介, 三好美紀, 野末みほ, 由田克士: 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究 (第 1 報) -都道府県の食育推進に関する調査-. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 10) 荒井裕介, 三好美紀, 野末みほ, 由田克士: 食育を通じた生活習慣病予防戦略研究: 食育計画策定への行政栄養士の関わり等について. 第 67 回日本公衆衛生学会. 2008. 11. 06, 福岡市
- 11) 佐藤健太郎, 野末みほ, 猿倉薫子, 荒井裕介, 由田克士: 福島県喜多方市における健康意識と食品群・栄養素等摂取量に関する調査研究. 第 67 回日本公衆衛生学会. 2008. 11. 07, 福岡市
- 12) 三宅裕子, 岡山 明, 由田克士, 佐藤 斉, 坂田清美, 斎藤重幸, 中川秀昭, 三浦克之, 奥田奈賀子, 上島弘嗣, J Stamler: 日本人中年男性における一日の食事リズムと肥満との関連 ~ INTERMAP Study JAPAN における検討~. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 13) 山根理学, 中村眞子, 稲熊隆博, 石見佳子: 老化促進マウスのライフステージにおけるリコピンの骨代謝調節作用. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 03, 坂戸市
- 14) 山内淳, 山下 葵, 井上絵里奈: 脂肪細胞における RBP 遺伝子発現調節機構の解析. 日本栄養・食糧学会大会. 2008. 05.
- 15) 秋山聡子, 上原万里子, 勝間田真一, 石見佳子, 鈴木和春: 2 型糖尿病モデルラットに対する柑橘系フラボノイド投与の影響. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 03, 坂戸市
- 16) 出野健明, 柳沢絵里子, 柳沢素子, 盛岡正博, 饗場直美, 森田明美, 渡邊昌: 佐久肥満克服プロジェクト 体重と血圧の変動を見る. 第 12 回日本病態栄養学会年次学術集会. 2009. 01. 11, 京都市
- 17) 小坂谷典子, 江崎潤子, 西牟田守, 井上絵里奈, 山内淳, 小松美穂, 青木麻美, 森下幸治, 佐々木敏, 石見佳子: ビタミン K2 (MK-4) の補給摂取が閉経後女性の生体指標に及ぼす影響 (第 2 報) . 第 10 回日本骨粗鬆症学会. 2008. 10. 31, 大阪
- 18) 上原万里子, 秋山聡子, 勝間田真一, 太田篤胤, 石見佳子, 鈴木和春: 柑橘系フラボノイドの血中動態. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 04, 坂戸市
- 19) 新村哲夫, 堀井裕子, 中崎美峰子, 長瀬博文, 桑守豊美, 森田明美, 王 紅兵, 胡 莉珍, 孫 迎春, 海 栄, 蘇 秀蘭, 常 虹, 畢 力夫, 鏡森定信: 中国内モンゴル自治区女性におけるフッ素曝露と骨吸収マーカー. 第 19 回日本微量元素学会. 2008. 07. 04, 東京
- 20) 須田尚美, 中出麻紀子, 大森由実, 森田明美, 饗場直美, 渡邊昌, 江指隆年: 肥満者への栄養教育による食行動変化の検討 佐久肥満克服プログラム (SCOP Study) . 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 21) 杉森裕子, 中川芽衣子, 由田克士, 三浦克之, 石田裕美, 櫻井勝, 中川秀昭: 職域において実施した負荷の小さな減量プログラムの効果について (第 2 報) -教材の活用と指導内容-. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 22) 西牟田守, 吉武 裕, 児玉直子, 森國英子, 松崎伸江, 福岡秀興: 微量元素の血清および尿中排泄レベルの概日リズムと激運動によるその修飾. 第 19 回日本微量元素学会. 2008. 07. 03, 東京
- 23) 西牟田守, 児玉直子, 松崎伸江, 森國英子, 佐藤裕美, 山内好江, 島田美恵子, 吉武 裕, 土橋昇, 渡邊智子: 低タンパク、低脂質、低リン食供与時のミネラル (Ca, Mg, P) 出納 (ヒト) . 第 28 回日本マグネシウム学会. 2008. 11. 29, 広島
- 24) 西牟田守: 生涯教育の必要性について. 第 4 回日本心体美学会. 2008. 07. 10, 東京
- 25) 西牟田守: 養成大学のカリキュラムについて. 第 4 回日本心体美学会. 2008. 07. 10, 東京
- 26) 石見佳子, 岡純, 田畑泉, 江崎潤子, 戸田登志也, 内山成人, 上野友美, 呉堅: 大豆イソフラボンと運動の併用が閉経後女性の体組成に及ぼす影響: 介入終了 1 年後の追跡調査. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 03

- 27) 千葉大成, 上原万里子, 石見佳子, 鈴木和春, 金賢珠, 松本明世: 閉経後骨粗鬆症モデルマウスにおけるヘスペリジンの骨代謝調節機構の解析. 第 62 回栄養・食糧学会. 2008. 05. 03, 坂戸市
- 28) 草間かおる, 石川みどり, 野末みほ: 青年海外協力隊栄養士隊員における 40 年間の活動状況について. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 06, 鎌倉市
- 29) 大森由実, 森田明美, 渡邊昌, 饗場直美, 宮地元彦, 佐々木敏, 盛岡正博: 行動変容理論を用いた保健指導が糖代謝に与える影響 佐久肥満克服プログラム -SCOP Study-. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 30) 大瀧裕子, 大友拓弥, 武田健, 石見佳子: 日本型食生活が大豆イソフラボンの生体利用性に及ぼす影響-カテキン、高糖質食、食物繊維の影響-. 第 13 回日本食物繊維学会. 2008. 11. 21, 東京
- 31) 大野尚子, 佐藤健太郎, 猿倉薫子, 野末みほ, 石井美子, 荒井裕介, 由田克士: 東北地方 K 市における栄養素等摂取量及び食品群別摂取量の季節変動について. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 06, 鎌倉市
- 32) 中出麻紀子, 饗場直美, 須田尚美, 森田明美, 渡邊昌: 減量成功と関連する要因. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 33) 中西彩, 千葉大成, 村木悦子, 石見佳子, 金賢珠, 松本明世: 骨代謝に及ぼす香辛料フェヌグリシードの効果. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 03, 坂戸市
- 34) 中川芽衣子, 杉森裕子, 由田克士, 三浦克之, 石田裕美, 櫻井勝, 中川秀昭: 職域において実施した負荷の小さな減量プログラムの効果について (第 1 報) -取り組みの概要-. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 35) 長沼理恵, 櫻井勝, 三浦克之, 由田克士, 森河裕子, 上島弘嗣, 中川秀昭: 9 年間の体重変化と LDL 粒子サイズの変化との関連: INTERMAP 富山追跡研究. 第 67 回日本公衆衛生学会. 2008. 11. 07, 福岡市
- 36) 島田美恵子, 永山寛, 木村靖夫, 中川直樹, 西牟田守, 大橋正春, 宮崎秀夫, 吉武裕: 70 歳時と 79 歳時における握力と老研式活動能力指標の加齢変化. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 19, 別府
- 37) 南良祐, 千葉大成, 清水純, 上原万里子, 石見佳子, 鈴木和春, 金賢珠, 松本明世: 食物繊維または難消化性多糖類とヘスペリジンの併用摂取が骨密度に及ぼす影響. 第 62 回日本栄養・食糧学会. 2008. 05. 03, 坂戸市
- 38) 平田亜子, 由田克士, 石田裕美, 高槻京子, 足立留美子: 従業員食堂を利用した社員の健康づくり対策に関する研究 その 4 -栄養改善のためのカフェテリア給食における食事計画の試み-. 第 81 回日本産業衛生学会. 2008. 06. 27, 札幌市
- 39) 米山智子, 中村幸志, 三浦克之, 由田克士, 佐々木敏, 森河裕子, 櫻井勝, 中島素子, 石崎昌夫, 成瀬優知, 城戸照彦, 中川秀昭: 日本人ホワイトカラー職従事者集団における飯類の摂取と睡眠の質. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009. 01. 24, 金沢市
- 40) 野末みほ, Jun Kyungyul, 石原洋子, 武田安子, 永井成美, 由田克士, 石田裕美: 学校給食における配食量及び摂食量の実態 (第 1 報). 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 41) 柳沢絵里子, 出野健明, 柳沢素子, 盛岡正博, 森田明美, 饗場直美, 渡邊昌: 佐久肥満克服プロジェクト 体重と HbA1c の変動をみる. 第 12 回日本病態栄養学会年次学術集会. 2009. 01. 11, 京都市
- 42) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 日本人の食事摂取基準 (2005 年版) の活用状況と次期改定に際し望まれる活用方法理解のための取り組み. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 43) 由田克士, 三浦克之, 石田裕美, 富松理恵子, 中川秀昭: 従業員食堂を活用した社員の健康づくり対策に関する研究 その 3 食環境整備に関する検討. 第 81 回日本産業衛生学会. 2008. 06. 27, 札幌市
- 44) 由田克士, 三浦克之, 櫻井勝, 中川秀昭, 石田裕美: 職域において実施したやさしく負荷の小さな減量プログラムの効果について. 第 67 回日本公衆衛生学会. 2008. 11. 07, 福岡市
- 45) 鈴木和広, 大久保孝義, 栗本鮎美, 浅山敬, 坪田(宇津木)恵, 瀬川香子, 末永カツ子, 今井潤, 佐藤洋: 壮年期・中年期における主観的健康感の関連要因に関する研究. 公衆衛生学会総会. 2008. 11. 05, 福岡
- 46) 引原有輝, 谷本道哉, 高田和子, 田中茂穂, 宮地元彦, 田畑泉: 若年男性における短期間の筋力トレーニングが総エネルギー消費量および身体活動量に及ぼす影響. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 20, 別府市
- 47) 宮地元彦, 村上晴香, 山元健太, 谷本道哉, 丸藤裕子, 真田樹義, 田畑泉: メタボリックシンドロームと体力. 日本体育学会第 59 回大会. 2008. 09. 12, 早稲田大学 (東京新宿区)
- 48) 金高有里, 大坂寿雅, 鈴木洋子, 橋口剛夫, 仲田瑛子, 新島旭, 井上修二: 視床下部腹内側核 (VMH) 破壊ラットの細胞増殖に対する核酸の影響. 第 45 回日本臨床生理学会. 2008. 11. 21, 千代田区
- 49) 熊江隆, 高田和子, 金子佳代子: 大学女子長距離選手の血清オプソニン化活性の 6 ヶ月間の変動. 第 63 回日本体力医学会大会予稿集. 2008. 09. 18
- 50) 熊江隆: 睡眠時心拍スペクトル解析を用いた睡眠の質に及ぼす生理周期の影響に関する研究. 第 67 回日本公衆衛生学会総会抄録集. 2008. 11. 07, 福岡県福岡市

- 51) 三宅理江子, 田中茂穂, 大河原一憲, 引原有輝, 高田和子, 田畑泉: 自衛隊員における基礎代謝量推定式の妥当性. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 18, 別府
- 52) 山元健太, 河野寛, 丸藤祐子, 家光素行, 村上晴香, 真田樹義, 谷本道哉, 樋口満, 田畑泉, 宮地元彦: 全身持久力、柔軟性および筋パワーと動脈硬化度との関係. 第 63 回日本体力医学会. 2008. 09. 19, 大分
- 53) 真田樹義, 山元健太, 樋口満, 宮地元彦, 村上晴香, 田畑泉: 日本人成人男女を対象としたサルコペニア評価基準および簡易評価法の開発. 第 59 回日本体育学会. 2008. 09. 11, 東京
- 54) 川口加織, 大島秀武, 田中茂穂, 引原有輝, 大河原一憲, 高田和子, 海老根直之, 田畑泉: 活動量計で評価した 23 エクササイズと歩数の関係. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 20, 別府
- 55) 村上晴香, 家光素行, 山元健太, 河野寛, 丸藤祐子, 真田樹義, 宮地元彦: 血中ホモシステイン濃度と MTHFR 遺伝子多型の関連に対する身体活動および葉酸摂取の影響. 第 63 回日本体力医学会. 2008. 09. 19, 大分
- 56) 大河原一憲, 田中茂穂, 宮地元彦, 高田和子, 勝川史憲, 田畑泉: 24 時間の呼吸商からみた高強度筋力トレーニング実践者の脂質酸化能. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 19, 別府
- 57) 大河原一憲, 田中茂穂, 谷本道哉, 宮地元彦, 高田和子, 田畑泉: 3 ヶ月間の高強度筋力トレーニングが 24 時間の呼吸商からみた脂質酸化能に及ぼす影響. 第 29 回日本肥満学会. 2008. 10. 18, 大分
- 58) 谷本道哉, 真田樹義, 山元健太, 丸藤裕子, 田畑泉, 塙勝博, 宮地元彦: 中年女性を対象とした“サーキット式コンバインドトレーニング”の身体諸機能に与える影響. 日本体力医学会. 2008. 09. 19, 大分
- 59) 田中千晶, 田中茂穂: 3 次元加速度計を基準として検討した幼児における身体活動量の指標としての歩数. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 18, 別府
- 60) 田中千晶, 田中茂穂: 幼稚園および保育所に通う日本人幼児における日常の身体活動量の比較. 日本発育発達学会第 7 回大会. 2009. 03. 08, 国際武道大学 (勝浦)
- 61) 藤本 恵理, 寺田 新, 東田 一彦, 樋口 満, 田畑泉: 低強度長時間水泳運動後のラット骨格筋 PGC-1 α の変化. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 18, 大分県別府市ビーコンプラザ
- 62) 別所京子, 大迫早苗, 高田和子: 調理操作時におけるエネルギー消費量と疲労度等の関連について. 第 62 回日本栄養食糧学会大会. 2008. 05. 04, 坂戸市
- 63) 別所京子, 大迫早苗, 辻ひろみ, 桂きみよ, 高田和子: 大量調理時における動作強度と作業工程に関する検討. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008. 09. 07, 鎌倉市
- 64) 柳川尚子, 増田和茂, 田畑泉: 健康運動指導士、健康運動実践指導者実態調査. 日本体力医学会 第 63 回大会. 2008. 09. 20, 別府市
- 65) 緑川泰史, 引原有輝, 太田めぐみ, 田中茂穂, 坂本静男: 発育期の子どもにおける既存の安静時代謝量推定式の妥当性の検討. 第 63 回日本体力医学会大会. 2008. 09. 19, 別府
- 66) 鈴木洋子, 大坂寿雅, 仲田瑛子, 橋口剛夫, 井上修二: VMH 破壊マウスとカルバコール連続投与マウスにおける膵内分泌細胞の増殖と分化. 第 45 回日本臨床生理学会. 2008. 11. 22, 東京
- 67) 鈴木洋子, 大坂寿雅, 仲田瑛子, 金高有里, 井上修二: 視床下部腹内側核破壊マウスとカルバコール連続投与マウスにおける膵内分泌細胞の増殖と分化. 第 29 回日本肥満学会. 2008. 10. 17, 大分市
- 68) 伊藤晋介, 窪田直人, 窪田哲也, 高橋雄大, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 寺内康夫, 戸辺一之, 門脇孝: アディポネクチン欠損マウスのインスリン抵抗性のメカニズムの解明. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008. 05. 22, 東京
- 69) 橋本信嗣, 窪田直人, 高本偉碩, 窪田哲也, 藤本和歌子, 野田光彦, 清野進, 植木浩二郎, 門脇孝: 血管内皮細胞におけるインスリン受容体基質 (IRS)-2 のインスリン分泌における役割の解析. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008. 05. 22, 東京
- 70) 窪田直人, 窪田哲也, 伊藤晋介, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 肝臓の糖代謝における IRS-1、IRS-2 の役割の検討. 第 26 回日本内分泌学会内分泌代謝学サマーセミナー. 2008. 07. 12, 愛知
- 71) 窪田直人, 窪田哲也, 高橋雄大, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 血管内皮細胞におけるインスリン受容体基質 (IRS)2 の役割の解明. 第 1 回日本肥満症治療学会学術集会. 2008. 06. 14, 東京
- 72) 窪田直人, 窪田哲也, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 血管内皮細胞におけるインスリンシグナルと骨格筋インスリン抵抗性. 第 14 回成人病の病因・病態の解明に関する研究会. 2008. 07, 長野
- 73) 窪田哲也, 窪田直人, 山口真一, 井上真理子, 植木浩二郎, 門脇孝: 血管内皮細胞におけるインスリン受容体基質 (IRS)2 の役割の解明—血管内皮細胞特異的 IRS2 欠損マウスを用いて—. 第 23 回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会. 2009. 02. 13, 岡山
- 74) 高橋雄大, 窪田直人, 窪田哲也, 伊藤晋介, 高本偉碩, 橋本信嗣, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: チアゾリジン誘導体の抗動脈硬化作用におけるアディポネクチンの役割の解明. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008. 05. 22, 東京
- 75) 高本偉碩, 窪田直人, 橋本信嗣, 峯山智佳, 窪田哲也, 伊藤晋介, 山内敏正, 植木浩二郎, 宮

- 崎純一, 門脇孝: IRS-2 欠損 β 細胞株の樹立. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京
- 76) 山口真一, 窪田直人, 窪田哲也, 熊谷洋紀, 小園秀樹, 高橋雄大, 高本偉碩, 山内敏正, 植木浩二郎, 門脇孝: 血管内皮機能低下は骨格筋のインスリン抵抗性を惹起する. 第 12 回日本病態栄養学会年次学術集会. 2009.01.22, 京都
- 77) 渡辺拓, 窪田直人, 窪田哲也, 大杉満, 戸辺一之, 門脇孝: 抗肥満薬 Rimonabant における Adiponectin の役割. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.22, 東京
- 78) 山田晃一, 竹澤 純, 森田明美, 饗場直美, 渡邊昌: 肥満者に於ける生活習慣病関連遺伝子の多型解析—佐久肥満克服プログラム (SCOP Study). 第 30 回日本分子生物学会年会・第 80 回日本生化学会大会. 2008.12.09, 神戸
- 79) 手嶋登志子: 最近の高齢者食をめぐる話題、高齢者施設における食介護に関するアンケート結果を中心に. 第 3 回食介護研究会学術大会. 2008.12., 東京
- 80) 竹澤 純, 梶原景正, 石見幸男, 山田晃一: Rev3(DNA polymerase ζ) はマウス細胞に於いて、紫外線照射後に誘起される mutagenic な損傷バイパス複製に関与する. 第 30 回日本分子生物学会年会・第 80 回日本生化学会大会. 2008.12.12, 神戸
- 81) 中出麻紀子, 福田洋, 春山康夫, 橋本充代, 生山匡, 武藤孝司: 職域における IT を使った生活習慣病予防プログラムの評価 (2): 設定目標及びそれと関連する生活習慣の改善の有無. 第 81 回日本産業衛生学会. 2008.06.27, 札幌
- 82) 亀井康富, 山崎芳浩, 杉田聡, 金井紗綾香, 菅波孝祥, 三浦進司, 江崎治, 小川佳宏: 転写因子 FOXO1 による骨格筋萎縮の分子機序解明 Elucidation of molecular mechanism of skeletal muscle atrophy, focusing on transcription factor FOXO1.. 日本農芸化学会. 2009.03.28, 福岡
- 83) 三浦進司: 運動による骨格筋 PGC-1 α 新規アイソフォームの発現. 第 1 回分子骨格筋代謝研究会. 2009.03.28, 京都大学 (京都)
- 84) 山崎聖美, 江崎治: 非アルコール性脂肪肝発症の成因により異なる予防法が必要である. 第 51 回日本糖尿病学会年次学術集会. 2008.05.24, 東京国際フォーラム (東京)
- 85) Kashiwagi K, Yano Y, Yano T: Cytotoxic effect of a new redoxi-silent analogue on mesothelioma cells. 第 67 回日本癌学会学術総会. 2008.10.28, 名古屋
- 86) Sato H, Takano Y, Iwata H, Okuzawa H, Yamada R, Ueno K, Yano T: Improvement of chemosensitivity by restoration of connexin 32 gene. 第 82 回日本薬理学会年会. 2009.03.17, 横浜
- 87) Sato H, Yano T, Takanao Y, Iwata H, Ueno K: Connexin 43 potentiates cisplatin-induced cytotoxicity in malignant mesothelioma cells. 第 67 回日本癌学会学術総会. 2008.10.28, 名古屋
- 88) 奥澤紘子, 岩田紘樹, 佐藤洋美, 高野泰幸, 矢野友啓, 上野光一: ヒストン脱アセチル化酵素阻害薬の Caki-1 細胞増殖に対するスニチニブとの併用効果. 第 129 回日本薬学会総会. 2009.03.28, 京都
- 89) 高野泰幸, 岩田紘樹, 佐藤洋美, 奥澤紘子, 上野光一, 矢野友啓: コネキシン 32 遺伝子の発現回復による化学療法薬感受性の改善. 第 129 回日本薬学会年会. 2009.03.26, 京都
- 90) 高野泰幸, 萩原ヒロミ, 佐藤洋美, 中村智徳, 上野光一, 矢野友啓: コネキシン 32 遺伝子と化学療法薬の癌増殖抑制効果に関する検討. 第 118 回日本薬理学会関東部会. 2008.06.07, 東京
- 91) 佐藤洋美, 岩田紘樹, 高野泰幸, 奥澤紘子, 上野光一, 矢野友啓: コネキシン遺伝子の薬物感受性改善に関する研究. 第 19 回細胞間ジャンクション研究会. 2009.01.17, 東京
- 92) 池田彩子, 内田友乃, 市川富夫, 渡邊 貴, 上梶友記子, 中田大介, 矢野友啓: シクロデキストリン包接によるトコトリエノールの吸収促進. 2009 年度日本農芸化学会大会. 2009.03.28, 福岡
- 93) 矢野友啓, 柏木維人, 竹林純, 山田和彦, 萩原清和, 矢野善久, 吉村寛幸: 中皮腫細胞に対するトコトリエノールエーテル誘導体の殺細胞効果. 第 60 回ビタミン学会. 2008.06.14, 仙台
- 94) 吉川俊博, 山田浩, 松田捷彦, 小菅和仁, 新納仁, 提坂裕子, 角田隆己, 内田信也, 尾上誠良, 山田静雄, 梅垣敬三: 茶カテキンの摂取が細胞質分裂阻害小核試験へ及ぼす影響: 健康成人を対象としたランダム化二重盲験比較試験.. 第 29 回日本臨床薬理学会年会. 2008.12.05, 東京
- 95) 佐藤陽子, 橋本洋子, 中西朋子, 渡邊真紀子, 卓興鋼, 瀧優子, 梅垣敬三: 幼児のサプリメント利用の実態調査. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008.09.06, 鎌倉市
- 96) 中西朋子, 佐藤陽子, 渡邊真紀子, 卓興鋼, 瀧優子, 梅垣敬三: 国内外の文献より収集した健康食品素材に関連した安全性情報の特徴. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008.09.07, 鎌倉市
- 97) 梅垣敬三, 佐藤陽子, 中西朋子, 瀧優子, 芝池伸彰: 健康食品関連情報の効果的な提供に関する取り組み. 第 22 回公衆衛生情報研究協議会研究会. 2009.01.23, 神戸
- 98) 雑賀公美子, 加茂憲一, 水野正一, 片野田耕太, 祖父江友孝: 沖縄県の肺がん死亡率の変化. 第 19 回日本疫学会学術総会. 2009.01.23, 金沢
- 99) 三好美紀, 坪倉もえ, 荒井裕介, 吉池信男: 食育を通じた健康づくり及び生活習慣予防戦略に関する研究 (第 2 報) 海外のポピュレーション戦略について. 第 55 回日本栄養改善学会学術総会. 2008.09.07, 鎌倉市

- 100) 三好美紀, 荒井裕介, 由田克士, 吉池信男: 食育を通じた生活習慣予防戦略に関する研究: 欧州のポピュレーション戦略の事例調査. 第 67 回日本公衆衛生学会総会. 2008. 11. 06, 福岡市
- 101) 水野正一, 笠岡(坪山)宜代, 大森豊緑, メリッサ・メルビー, 渡邊昌: 小児肥満とその対策(重症化傾向の出現との関連において). 第 2 回保健医療科学研究会. 2008. 09. 19, 和光市
- 102) 水野正一, 大森豊緑, 笠岡(坪山)宜代, メリッサ・メルビー, 渡邊昌: BMI 値の年齢別分布の特徴: 一県民健康・栄養調査から. 第 19 回日本疫学会. 2009. 01. 23, 金沢
- 103) 富田眞佐子, 笠井みさこ, 石井徹, 吉野泉, 内山寛子, 高梨一紀, 横田和彦, 水野正一: 職域における推定 GFR の検討 (10 年間の推移). 第 44 回日本循環器病予防学会. 2008. 05. 23, 秋田市
- 104) 大賀英史, 高山光尚: 保健指導における対象者の性格傾向及び生活背景の事前把握が保健指導の担当者に与える効果. 第 15 回日本未病システム学会学術総会. 2008. 11. 02, 東京
- 105) 大賀英史, 大森豊緑, 近藤高明: ソーシャルキャピタルにおける近隣との人間関係と居住環境との関連. 第 67 回日本公衆衛生学会総会. 2008. 11. 07, 福岡
- 106) 渡邊昌: 栄養学の温故知新一将来に向けて. 第 12 回日本病態学会年次学術集会. 2009. 01. 10, 東京
- 107) 渡邊昌: 適正なたん白質摂取量をめぐって. 第 37 回日本食生活学会研究集会. 2009. 02. 28, 東京
- 108) 渡邊昌: 糖尿病の世紀を生き抜く. 第 7 回糖尿病市民セミナー・東京. 2009. 02. 01, 東京
- 109) 渡邊昌: 南極での食事について. 第 50 次南極地域観測隊第 3 回全員打合せ. 2008. 12. 01, 国立極地研究所
- 5) 田畑泉(主任研究者): 健康づくりのための運動基準・エクササイズガイド改定に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 6) 高橋佳子(主任研究者): 日本人の生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定のための大規模介入研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 7) 原一雄(主任研究者): 生活習慣と遺伝子型による 2 型糖尿病発症リスク予測法の開発. 厚生労働省厚生科学研究費. ヒトゲノム・再生医療等研究事業. 2008
- 8) 門脇孝(主任研究者): 保健指導への活用を前提としたメタボリックシンドロームの診断・管理のエビデンス創出のための横断・縦断研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 9) 江崎治(主任研究者): メタボリックシンドローム予防・治療薬の開発のための基盤研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 政策創薬総合研究事業. 2008
- 10) 山田和彦(主任研究者): 検査機関の信頼性確保に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 11) 松本輝樹(主任研究者): 「栄養表示基準における栄養成分の分析方法」の測定精度向上のための研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 12) 矢野友啓(主任研究者): 多様な生理活性を持つ機能性成分の安定化による新たな難治性慢性疾患の予防と治療法の構築. 厚生労働省厚生科学研究費. 政策創薬総合研究事業. 2008
- 13) 梅垣敬三(主任研究者): いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 14) 芝池伸彰(主任研究者): 特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 15) 渡邊昌(主任研究者): 健診受診者のコホート化と運動・栄養介入による生活習慣病予防. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 16) 大賀英史(主任研究者): 民間衛生施設を活用した健康増進のための効果的なシステムの開発及び評価に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008

2. 公的資金による研究

【厚生労働科学研究費補助金】

a. 主任研究者

- 1) 荒井裕介(主任研究者): 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 2) 由田克士(主任研究者): 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 3) 高田和子(主任研究者), 小長谷陽子, 田中喜代次, 吉田祐子: 大規模コホートの観察研究に基づく生活機能低下スクリーニング質問表の開発. 厚生労働省厚生科学研究費. 長寿科学総合研究事業. 2008
- 4) 田中茂穂(主任研究者): エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008

b. 分担研究者

- 1) 荒井裕介(分担研究者): 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 2) 森田明美(分担研究者): 「日本人の食事摂取基準」策定のための文献的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 3) 森田明美(分担研究者): 行動変容理論に基づく効率的かつ効果的な特定保険指導手法の疫学的エビデンスと IT を援用した開発. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 4) 森田明美(分担研究者): 日本人の食事摂取基準の活用方法に関する検討. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 5) 森田明美(分担研究者): 日本人の食事摂取基準を改定するためのエビデンスの構築に関する研究—微量栄養素と多量栄養素摂取量のバランスの解明—. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 6) 石見佳子(分担研究者): 検査機関の信頼性確保に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 7) 野末みほ(分担研究者): いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 8) 由田克士(分担研究者): 「日本人の食事摂取基準」策定のための文献学的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 9) 由田克士(分担研究者): 勤労者の健康づくりのための給食を活用した集団及びハイリスク者への対策に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 10) 由田克士(分担研究者): 健康日本 21 の中間評価、糖尿病等の「今後の生活習慣病対策の推進について(中間取りまとめ)」を踏まえた今後の生活習慣病対策のためエビデンス構築に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 11) 由田克士(分担研究者): 食生活・栄養素摂取状況が高齢者の健康寿命に与える影響に関する研究: NIPPON DATA80・90 の追跡調査. 厚生労働省厚生科学研究費. 長寿科学総合研究事業. 2008
- 12) 由田克士(分担研究者): 都道府県等の生活習慣病リスク因子の格差及び経年モニタリング手法に関する検討. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 13) 由田克士(分担研究者): 日本人の食事摂取基準を改定するためのエビデンスの構築に関する研究—微量栄養素と多量栄養素摂取量のバランスの解明—. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 14) 西牟田守(分担研究者): フッ化物応用による歯科疾患予防プログラムの構築と社会経済的評価に関する総合的研究. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 15) 杉山みち子(分担研究者), 加藤昌彦, 合田敏尚, 高田和子, 太田貞次, 臼井正樹: 介護保険制度における栄養ケア・マネジメント事業評価に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 長寿科学総合研究事業. 2008
- 16) 高田和子(分担研究者): エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 17) 田中茂穂(分担研究者): 「日本人の食事摂取基準」策定のための文献学的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 18) 宮地元彦(分担研究者): 健診受診者のコホート化と運動、栄養介入による生活習慣病予防. 厚生労働省厚生科学研究費. 糖尿病戦略等研究事業. 2008
- 19) 宮地元彦(分担研究者): エネルギー必要量推定法に関する基盤的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 20) 宮地元彦(分担研究者): 日本人の生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 21) 宮地元彦(分担研究者): 健康日本 21 の中間評価、糖尿病等の「今後の生活習慣病対策の推進について(中間取りまとめ)」を踏まえた今後の生活習慣病対策のためエビデンス構築に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 22) 田畑泉(分担研究者): 日本人の生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 23) 原一雄(分担研究者): 保健指導への活用を前提としたメタボリックシンドロームの診断・管理指針に関する横断・縦断研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 24) 門脇孝(分担研究者): 課題研究 32 型糖尿病の血管合併症抑制のための介入試験. 厚生労働省厚生科学研究費. 厚生労働省厚生科学研究費. 糖尿病戦略等研究事業 (糖尿病予防のための戦略研究). 2008

- 25) 門脇孝(分担研究者): 生活習慣と遺伝子型による 2 型糖尿病発症リスク予測法の開発. 厚生労働省厚生科学研究費. 厚生労働省厚生科学研究費. ヒトゲノム・再生医療等研究事業. 2008
- 26) 山崎聖美(分担研究者): 形態形成期・思春期などの高感受性期にある集団での核内受容体作動性化学物質等の有害性発送メカニズムの解明及びその評価手法にかかる総合研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 化学物質リスク研究事業. 2008
- 27) 江崎治(分担研究者): 「日本人の食事摂取基準」策定のための文献学的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 28) 永田純一(分担研究者): 検査機関の信頼性確保に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全性確保推進研究事業. 2008
- 29) 山田和彦(分担研究者): 健康食品における安全性確保を目的とした基準等作成のための行政的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 30) 山田和彦(分担研究者): 特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 31) 山田和彦(分担研究者): 国際食品規格の策定プロセスに関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 32) 竹林純(分担研究者): 「栄養表示基準における栄養成分の分析方法」の測定精度向上のための研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 33) 梅垣敬三(分担研究者): 健康食品における安全性確保を目的とした基準等作成のための行政的研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 34) 梅垣敬三(分担研究者): 検査機関の信頼性確保に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 35) 梅垣敬三(分担研究者): 特定保健用食品の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 36) 廣田晃一(分担研究者): いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 37) 廣田晃一(分担研究者): 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 38) 廣田晃一(分担研究者): 民間衛生施設を活用した健康増進のための効果的なシステムの開発及び評価に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 39) 笠岡(坪山)宜代(分担研究者): 特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 食品の安心・安全確保推進研究事業. 2008
- 40) 三好美紀(分担研究者): 食育を通じた健康づくり及び生活習慣病予防戦略に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 循環器疾患等生活習慣病対策総合研究事業. 2008
- 41) 水野正一(分担研究者): がん罹患・死亡動向の実態把握の研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 第 3 次対がん総合戦略研究事業. 2008
- 42) 渡邊昌(分担研究者): メタボリックシンドロームのアジアと米国における発症機序とその健康対策に関する研究. 厚生労働省厚生科学研究費. 社会保障国際協力推進研究事業. 2008
- 43) 渡邊昌(分担研究者): 糖尿病診療均てん化のための標準的診療マニュアル作成とその有効性の検証. 厚生労働省厚生科学研究費. 平成 20 年度厚生労働科学研究事業 (毎月班). 2008

【文部科学研究費補助金】

a. 主任研究者

- 1) 山内淳(主任研究者): 糖新生酵素遺伝子発現抑制に関わる新規転写因子の生体機能解析. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
- 2) 石見佳子(主任研究者): 大豆イソフラボン代謝産物に着目した骨粗鬆症の予防に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
- 3) 坪田(宇津木)恵(主任研究者): 地域在宅高齢者の栄養・食事摂取や食事パターンが高次生活機能低下に及ぼす影響. 文部科学省科学研究費. 若手研究(B). 2008
- 4) 吉田真咲(主任研究者): ダンスがもたらす身体の適応現象—下腿三頭筋の筋持久力に着目して—. 文部科学省科学研究費. 若手研究(B). 2008
- 5) 大坂寿雅(主任研究者): 視索前野 GABA 感受性かつ GABA 作動性ニューロンによる熱産生調節機構. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
- 6) 田中茂穂(主任研究者): エネルギー消費量の変動要因に関する基礎的研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(A). 2008
- 7) 宮地元彦(主任研究者): 習慣的身体活動はホモシステイン分解酵素遺伝子変異に伴う動脈硬化を予防するか?. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
- 8) 田畑泉(主任研究者): 運動で増加する転写補助因子等による骨格筋 GLUT4 発現増加の分子機構に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
- 9) 門脇孝(主任研究者): システム疾患生命科学による先端医療技術開発の拠点. 文部科学省科学研究費. 科学技術振興調整費. 2008
- 10) 門脇孝(主任研究者): メタボリックシンドローム・糖尿病の鍵分子アディポネクチン受容体

- AdipoR/AMPK/ACC タンパク群の構造解析とそれに基づく機能解明及び治療法開発. 文部科学省科学研究費. ターゲットタンパク研究. 2008
- 11) 門脇孝(主任研究者): 個人の遺伝情報に応じた医療の実現プロジェクト. 文部科学省科学研究費. 科学技術振興調整費. 2008
 - 12) 門脇孝(主任研究者): 疾患のケミカルバイオロジー教育研究拠点. 文部科学省科学研究費. グローバル COE プログラム. 2008
 - 13) 門脇孝(主任研究者): 代謝制御機構の統合的理解とその破綻. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(S). 2008
 - 14) 江崎治(主任研究者): 運動は MEF2 を介して GLUT4 を増加させるか. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
 - 15) 山崎聖美(主任研究者): フルクトース摂取による肥満発症機序の解明と予防法の開発. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
 - 16) 千葉剛(主任研究者): 脳出血における脳微小血管内皮細胞フォークヘッド型転写因子の役割の解明. 文部科学省科学研究費. 若手研究(B). 2008
 - 17) 永田純一(主任研究者): 機能性食品の組み合わせ摂取による有効性と安全性に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
 - 18) 矢野友啓(主任研究者): 新たな食素材を用いた中皮腫予防食品の開発. 文部科学省科学研究費. 萌芽研究. 2008
 - 19) 笠岡(坪山)宜代(主任研究者): 肥満発症に対するタウリンの新規機能の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
- b. 分担研究者
- 1) 由田克士(分担研究者): 各種栄養素摂取の長期変化と生活習慣病発症に関する大規模疫学研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
 - 2) 高田和子(分担研究者): 現代の小・中・高校生の生活スタイルと身体活動レベル(PAL)に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(A). 2008
 - 3) 宮地元彦(分担研究者): 身体運動によるメンタルヘルス改善効果の分子機構解明とリサーチ・リソースの構築. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(A). 2008
 - 4) 門脇孝(分担研究者): アディポネクチンシグナルネットワークの新たな展開と可能性. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
 - 5) 門脇孝(分担研究者): インスリン依存症 PI3 キナーゼが膵β細胞において増殖・再生・分泌に果たす役割の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
 - 6) 門脇孝(分担研究者): ヒト内臓脂肪の発現解析によるメタボリックシンドローム発症分子機構の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
 - 7) 門脇孝(分担研究者): 糖代謝調節・動脈硬化症における血管内皮インスリン受容体基質-2の役割の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
 - 8) 門脇孝(分担研究者): 糖尿病患者の療養関連 QOL の向上とその血縁者の予防行動促進に関する研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(B). 2008
 - 9) 門脇孝(分担研究者): 糖尿病疾患関連遺伝子の同定と医療への応用. 文部科学省科学研究費. 特定領域研究. 2008
 - 10) 門脇孝(分担研究者): 膵β細胞の増殖機構とその破綻の分子生物学的研究. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
 - 11) 饗庭直美(分担研究者): 肥満発症に対するタウリンの新規機能の解明. 文部科学省科学研究費. 基盤研究(C). 2008
- 【その他の公的研究費】
- a. 主任研究者
- 1) 門脇孝(主任研究者): アディポネクチンを標的とした生活習慣病の機能性(予防/改善)食品の開発. 科学技術振興機構 産学協同シーズイノベーション化事業(育成ステージ). 2008
 - 2) Melby MK(主任研究者): Developmental Origins of Metabolic Syndrome: Study Utilizing the Japanese Maternal and Child Health Handbook. Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research. 2008
- b. 分担研究者
- 1) 植田耕一郎(分担研究者), 相田潤, 石川健太郎, 池山量子, 大原里子, 菊谷武, 杉山みち子, 草間かおる, 迫和子, 高田和子: 口腔機能向上及び栄養改善サービスに従事する人材確保の効果的推進に関する調査研究. 老人保健事業推進費等補助金. 2008
 - 2) 杉山みち子(分担研究者), 加藤昌彦, 合田敏尚, 小阪健, 川内敦文, 吉池信男, 高田和子, 三橋扶佐子, 吉田英世, 若木陽子: 介護予防における「栄養改善」の推進に関する総合的研究. 老人保健健康増進等事業. 2008
 - 3) 田畑泉(分担研究者): 筋ジストロフィーの集学的治療と均てん化に関する研究. 精神・神経疾患研究委託費. 2008
 - 4) 山田晃一(分担研究者): 放射線被ばくによる発がんの分子機構に関する研究. 厚生労働省がん研究助成金. 2008
 - 5) 江崎治(分担研究者), 山崎聖美: ニュートリゲノミクスを用いた高機能性新規食品の多機能性解明とその評価・管理に関する研究. 農林水産省 安信プロジェクト(安全で信頼性、機能性が高い食品・農産物供給のための評価・管理技術の開発). 2008
 - 6) 梅垣敬三(分担研究者): 受容体結合測定法を応用した新食品等の健康影響評価法の開発と応用. 食品健康影響評価技術研究. 2008

3. 民間企業等の共同研究等

- 1) 森田明美: BI 機器の精度評価試験. (株)タニタ. 2008
- 2) 石見佳子: エコール含有食品の骨代謝及び脂質代謝に対する有効性の評価に関する研究. 大塚製薬(株) 共同研究. 2008
- 3) 石見佳子: 骨粗鬆症予防における大豆イソフラボン及び豆乳の効果. 日本豆乳協会 奨励寄附研究. 2008
- 4) 石見佳子: 新たな健康の維持増進に関わる食品成分等に対するニーズ調査. (財)日本食品分析センター 委託事業. 2008
- 5) 石見佳子: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的文献レビューとその効果の検証に関する研究. (財)不二たん白質研究振興財団 研究助成金. 2008
- 6) 石見佳子: 閉経後骨粗鬆症モデルマウスにおけるリコピンの骨代謝調節作用の解明. カゴメ総合研究所 共同研究. 2008
- 7) 石見佳子: 閉経後女性におけるビタミン K の機能性評価に関する研究. 協和発酵(株) 共同研究. 2008
- 8) 石見佳子: β -クリプトキサンチンの骨代謝に関する *in vitro* 及び *in vivo* 試験に関する研究. (株)ティーティーシー 研究指導. 2008
- 9) 坪田(宇津木)恵: 1年間の栄養指導介入による栄養素摂取、食事パターンの変化が、インスリン抵抗性改善にどのような影響を与えるか〜佐久肥満克服プログラム〜. (財)三井生命厚生事業団 研究助成金. 2008
- 10) 野末みほ, 猿倉薫子: 食品及び料理の目安量に関する研究—食事調査における申告値と摂取重量及び市場調査による検討—. (財)すかいらくフードサイエンス研究所 研究助成金. 2008
- 11) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 食品摂取頻度・摂取量調査. 厚生労働省受託事業. 2008
- 12) 由田克士, 荒井裕介: 栃木県の生活習慣病の要因分析及び健康づくり施策評価事業. 栃木県受託事業. 2008
- 13) 高田和子: 神経内科領域における二重標識水を用いた総消費量熱の測定に関する研究. (株)クリニコ 共同研究. 2008
- 14) 田中茂穂: エネルギー消費量および身体活動量の評価法・身体組成の簡易評価方法に関する研究. オムロンヘルスケア(株) 受託研究. 2008
- 15) 宮地元彦: 中年女性を対象とする「サーキット式コンバインドトレーニング」の身体諸機能に与える影響に関する研究. (株)カーブスジャパン 共同研究. 2008
- 16) 田畑泉: フィットネスクラブでの研究指導. (株)ティップネス 研究指導. 2008
- 17) 田畑泉: 食品素材の健康増進効果に関する研究指導. (株)ミツカングループ本社 研究指導. 2008
- 18) 大石由美子: 研究助成プログラム「アストラゼネカ・リサーチ・グラント 2006」採択研究テーマ、「Molecular mechanisms of pathogenesis

of metabolic syndrome」に関する研究助成. アストラゼネカ(株). 2008

- 19) 饗場直美: 南極越冬隊員の生活習慣と健康状態との関連に関する予備的研究. 国立極地研究所 共同研究. 2008
- 20) 山崎聖美: 大豆蛋白質 β -コングリシニンの非アルコール性脂肪肝発症に対する効果と作用機序の解明. (財)不二たん白質研究振興財団 研究助成金. 2008
- 21) 江崎治: メタボリックシンドローム予防・治療薬の開発のための基盤研究. (財)ヒューマンサイエンス振興財団 受託研究. 2008
- 22) 矢野友啓: 多様な生理活性を持つ機能性成分の安定化による新たな難治性慢性疾患の予防及び治療法の構築. (財)ヒューマンサイエンス振興財団 受託研究. 2008
- 23) 竹林純: 抗酸化活性を指標とした高機能性料理レシピの開発に関する研究. 九州沖縄農業研究センター 共同研究(研究協定). 2008
- 24) 山田和彦: 食品に含まれる機能性成分・栄養成分の生態利用に関する研究. (株)東洋新薬 共同研究. 2008
- 25) 卓興鋼: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的文献レビューとその効果の検証に関する研究. (財)不二たん白質研究振興財団研究助成金. 2008
- 26) 廣田晃一, 笠岡(坪山)宣代: 「食と健康に関する学術文献情報の活用方法」についての研究. 日本水産(株) 受託研究. 2008

4. 研究所外での講義、講演等

【大学等における特別講義等】

- 1) 石見佳子: 骨粗鬆症の予防と生活習慣. 早稲田大学スポーツ科学学術院 運動生化学. 2008. 12. 18
- 2) 石見佳子: 骨粗鬆症の予防と生活習慣. 東京理科大学薬学部大学院衛生化学特論. 2008. 06. 18, 野田市
- 3) 由田克士: 健康・栄養調査の内容、調査結果の評価. 国立保健医療科学院 平成 20 年度短期研修 健康・栄養調査の企画・運営・評価に関する研修. 2009. 02. 19, 和光市
- 4) 由田克士: 国民健康・栄養調査について. 女子栄養大学. 2008. 05. 20, 坂戸
- 5) 由田克士: 特定給食施設における支援指導のあり方〜特定健診・保健指導と連動する給食施設からの健康づくり〜. 平成 20 年度国立保健医療科学院・公衆栄養研修. 2008. 08. 18, 和光市
- 6) 原一雄: 基礎から学ぶ分子細胞生物学 疾患とその治療(生活習慣病). 神奈川科学技術アカデミー教育講座. 2008. 06. 05, 神奈川
- 7) 門脇孝: 医薬品の研究開発: 生活習慣病治療の最先端. 東京大学エグゼクティブ・マネジメント・プログラム講義. 2008. 10. 11, 東京大学
- 8) 門脇孝: 疾患とその治療(生活習慣病). KAST 教育講座「基礎から学ぶ分子細胞生物学コース」講義. 2008. 05. 17, 東京

- 9) 門脇孝: 生活習慣病のケミカルバイオロジ. 群馬大学生体調整研究所「生体調整のケミカルバイオロジ」シンポジウム. 2009. 01. 01, 群馬
- 10) 門脇孝: 代謝・栄養病体学教室での研究者養成. 第6回東京大学医学教育ワークショップ. 2008. 10. 25, 東京大学
- 11) 門脇孝: 東京大学公開講座「医療経営イニシアティブ」. 東京大学公開講座. 2009. 01. 27, 東京
- 12) 門脇孝: 糖尿病・メタボのしくみと予防法. 筑駒アカメディア講演会. 2008. 11. 15, 東京
- 13) 門脇孝: 糖尿病の病態、分類、診断. M2 内科系統講義. 2008. 05. 14, 東京大学
- 14) 門脇孝: 内分泌. 慶應義塾大学医学部生理学講義. 2008. 07. 04, 東京
- 15) 饗場直美: 船内給食における栄養管理. 船内給食における栄養管理実務講習会 独立行政法人航海訓練所. 2008. 10. 18, 東京都
- 16) 饗場直美: 特定健診と食育. 第48回農村医学夏期大学講座 農村医学夏期大学. 2008. 07. 25, 佐久市
- 17) 三浦進司: 研究者という職業. ようこそ先輩. 静岡県立大学薬学部. 2009. 02. 16, 静岡県立大学
- 18) 山田和彦: 食品の表示ならびに保健機能食品等について. 神奈川県立保健福祉大学. 2009. 02. 07, 横須賀市
- 19) 山田和彦: 食品の健康栄養表示とその背景. 国立保健医療科学院、平成20年度短期研修公衆栄養研修. 2008. 08. 19, 国立保健医療科学院
- 20) 梅垣敬三: 栄養情報の解釈と消費者への情報提供. 公開講座C、慶応大学薬学部. 2008. 11. 16
- 21) 梅垣敬三: 健康食品って本当に効果があるの?. 平成20年度江戸川区消費者団体連絡会研修会. 江戸川区消費者センター. 2009. 01. 30, 江戸川区
- 22) 廣田晃一: 科学的根拠の基づく健康食品の安全性有効性情報. 第5回明治薬科大学オープンリサーチセンター公開講座. 2008. 06. 28, 明治薬科大学(東京都清瀬市)
- 23) Miyoshi M: "Roles of dietitian in Japan" and "Nutritional Assessment in the field: Dietary Surveys". JICA (集団)「健康と栄養改善のための女性指導者研修」JICA 帯広国際センター. 2008. 12. 13, 帯広
- 24) Miyoshi M: Nutrition for Pregnant Women and Infants. 「第3回子どもの死亡削減と国際協力セミナー」国際保健医療交流センター. 2008. 06. 20, 熊本
- 25) Miyoshi M: The 21st Century "Sukoyaka" families: Nutrition in the MCH. 「母子保健福祉行政研修」JICA 東京国際センター. 2009. 02. 12, 東京
- 26) 三好美紀: 国際社会と医療活動「途上国における栄養問題と評価手法」. 聖母大学. 2008. 04. 17
- 27) 三好美紀: 国際保健・栄養協力論. 県立広島大学大学院. 2008. 08. 11, 広島
- 28) 渡邊昌: がんの疫学、検診. 腫瘍系講義(北里大学医学部). 2009. 01. 05, 東京
- 29) 渡邊昌: 栄養学の歴史&糖尿病の食事療法. 佐伯学園佐伯栄養専門学校. 2008. 06. 26, 東京
- 30) 渡邊昌: 環境医学の重要トピック. 衛生学公衆衛生学演習・実習I (信州大学医学部). 2008. 06. 16, 松本市

【大学・研究所における研究セミナー等】

- 1) 石見佳子: 知っておきたい健康・栄養トピックス. 慶應義塾大学薬学部 NR 養成講座. 2009. 01. 25, 東京
- 2) 高田和子: 健康づくりプランナーの社会戦略. 現代 GP シンポジウム 群馬大学. 2009. 02. 07, 群馬県前橋市
- 3) 窪田哲也: 中枢におけるアディポネクチンの役割 平成20年度 第3次対がん総合戦略研究事業「がん化学予防剤の開発に関する基礎及び臨床研究」. 平成20年度第1回若林班 班会議. 2008. 12. 20, 東京
- 4) 門脇孝: 糖尿病の成因と治療に関する最近の話題. 第28回 JASM 研修会. 2008. 07. 25, 東京
- 5) Melby MK: Politics of Food and Nutrition in the US. 東京農業大学. 2008. 07. 03, 東京
- 6) メリッサ・メルビー: 米国の Food politics について. 跡見学園女子大学マゼンタ学部、生活環境マゼンタ学科. 2009. 01. 29, 跡見学園女子大学
- 7) Yano T: A possibility of tocotrienol-cyclodextrin conjugate as an anti-mesothelioma agent. Sydney University Concord Hospital Seminar. 2009. 02. 05, Sydney, Australia

【地方自治体、栄養士会等主催の講演会等】

- 1) 荒井裕介: 生活習慣病予防のための食育の重要性について. いばらぎ食育推進大会パネルディスカッション (主催: 茨城県ほか). 2009. 01. 23, 県民文化センター
- 2) 森田明美: 特定健診・特定保険指導における食習慣の改善の最新情報. 第48回農村医学夏期大学講座. 2008. 07. 25, 佐久市
- 3) 石見佳子: 骨粗鬆症の予防と生活習慣. 第4回昭和薬科大学・公民館共催町田市市民講座 骨の健康と栄養. 2008. 11. 29, 町田市
- 4) 由田克士: 栄養・食事調査の円滑な実施に向けて～標準化と精度管理の必要性について～. 平成20年度神奈川県行政栄養士等研修会. 2008. 09. 24, 横浜市
- 5) 由田克士: 学会発表資料のまとめ方・論文の書き方. 茨城県病院栄養士協議会研修会. 2008. 12. 10, 水戸市
- 6) 由田克士: 健康をつくる食習慣・生活習慣・食環境 ～国民健康・栄養調査等の成績から～. 墨田区 すみだ食育推進リーダー育成講習会. 2008. 10. 29, 東京
- 7) 由田克士: 減塩の意義と効果的な取り組みについて. 減塩県民運動「にいがた減塩ルネサンス

- (仮称)」第 1 回県民会議. 2009.03.11, 新潟市
- 8) 由田克士: 効果的な健康・栄養施策の立案や展開に役立つやさしい課題分析と評価 ～特定健診・保健指導を視野に入れて～. 平成 20 年度新潟県国民健康保険団体連合会市町村栄養士等研修会. 2008.08.20, 新潟市
 - 9) 由田克士: 今、給食施設に求められていること～健康づくりのための食環境整備について～. 平成 20 年度 仙台市給食施設研修会. 2009.01.30, 仙台市
 - 10) 由田克士: 子どもたちの健康・体力・学力向上と食育～学校・行政の役割～. 平成 20 年度石川県能美市教育委員会子どもの健康を守る地域専門家総合連携事業 学習会. 2009.01.19, 能美市
 - 11) 由田克士: 子どもの健康を守る学習会「子どもたちの健康・体力・学力向上と食育～家庭・地域の役割～」. 平成 20 年度 石川県能美市教育委員会子どもの健康を守る地域専門家総合連携事業. 2009.02.13, 能美市
 - 12) 由田克士: 事業所給食をとおした働く人の健康づくり. 平成 20 年度神奈川県茅ヶ崎保健福祉事務所事業所給食管理講習会. 2008.12.15, 茅ヶ崎市
 - 13) 由田克士: 従業員食堂を活用した健康づくり. 平成 20 年度渋谷区栄養管理講習会. 2008.06.19, 東京
 - 14) 由田克士: 従業員食堂を活用した健康づくり. 平成 20 年度文京区特定給食施設栄養技術講習会. 2008.07.01, 東京
 - 15) 由田克士: 従業員食堂を健康づくりにどう役立てるか. 平成 20 年度品川区給食施設研修会. 2008.10.20, 品川区
 - 16) 由田克士: 食事調査理論. 平成 20 年度日本体育協会公認スポーツ栄養士養成特別講習会. 2008.06.21, 東京
 - 17) 由田克士: 新たな時代を迎えた従業員食堂～職員の健康づくりの場としての活用～. 平成 20 年度 四日市市保健所事業所給食施設研修会. 2009.01.29, 四日市市
 - 18) 由田克士: 生活習慣病予防対策を推進する地域・職域の連携. 平成 20 年度第 4 回海田地域・職域連携推進協議会. 2008.12.18, 広島県海田町
 - 19) 由田克士: 対象・目的に応じた食事調査の方法と標準化. 日本栄養改善学会 第 3 回実践栄養学研究集中セミナー(基礎編). 2008.10.25, 東京
 - 20) 由田克士: 地域企業と連携した効果的な健康づくりのアプローチと事業評価. 富山県健康づくり推進事業「社員食堂における健康づくり推進事業研修会」. 2009.03.10, 富山市
 - 21) 由田克士: 働きざかりの方への栄養支援. 平成 20 年度 東京都高齢者研究・福祉振興財団 健康づくり事業推進指導者養成研修. 2009.02.24, 東京
 - 22) 由田克士: 特定給食施設における食事摂取基準の活用. 2008 年度長野県栄養士会生涯学習研修会. 2008.07.26, 長野市
 - 23) 由田克士: 特定給食施設等における栄養計画及び食事計画の方針ー日本人の食事摂取基準(2005年版)の活用ー. 平成 20 年度 北九州市給食施設栄養士研修会. 2009.02.25, 北九州市
 - 24) 由田克士: 特定健診・保健指導と連動する給食施設からの健康づくり～事業所給食を活用した具体的な取り組みの事例を中心として～. 平成 20 年度西宮市給食施設研修会. 2008.08.19, 西宮市
 - 25) 由田克士: 特定保健指導にむけて給食施設の管理栄養士・栄養士の役割と展望. 埼玉県栄養士会集団健康管理研修会. 2009.03.08, 坂戸
 - 26) 由田克士: 平成 19 年度南房総市丸山地区食事調査からみえてくること. 平成 20 年度南房総市「学校を核とした食育推進事業」担当者会議. 2008.06.10, 南房総市
 - 27) 由田克士: 平成 19 年度南房総市丸山地区食事調査の結果について. 平成 20 年度南房総市「学校を核とした食育推進事業」食育推進委員会. 2008.05.16, 南房総市
 - 28) 由田克士: 保育所における日本人の食事摂取基準(2005年版)の活用. 石川県保育所給食担当栄養士業務検討会. 2009.01.26, 金沢市
 - 29) 高田和子: アスリートの栄養・食事. 日本体育協会公認コーチ養成講習会 (財)日本体育協会. 2008.07.29
 - 30) 高田和子: スポーツと栄養. 日本体育協会公認スポーツプログラマー養成講習会 (財)日本体育協会公認. 2008.11.07, 京都市
 - 31) 高田和子: スポーツと食事(トレーニングスケジュール、競技特性と食事). 日本体育協会公認アスレティックトレーナー養成講習会 (財)日本体育協会. 2008.06.16
 - 32) 高田和子: スポーツ選手のための日常的な栄養指導法. 東京都スポーツ指導者研修会 (財)東京都体育協会. 2008.06.01, 東京都新宿区
 - 33) 高田和子: 運動生理学 I (エネルギー代謝). スポーツ栄養ベーシック講習会 日本スポーツ栄養研究会. 2008.12.14, 東京都新宿区
 - 34) 高田和子: 現場で生かす運動基準・エクササイズガイド. 実務向上研修 中央労働災害防止協会. 2009.01.29, 東京都港区
 - 35) 高田和子: 食生活改善のための保健指導技術. 特定健診保健指導実践者育成研修会ー実践編ー 栃木県保険者協議会. 2008.12.10, 栃木県宇都宮市
 - 36) 高田和子: 食生活改善のための保健指導技術. 特定健診保健指導実践者育成研修会ー実践編ー 栃木県保険者協議会. 2009.01.09, 栃木県小山市
 - 37) 高田和子: 脱、メタボリック 見直そうあなたの食生活. からだとこころを元気にする講座 横浜市港北区役所生涯学習支援係. 2009.02.14, 神奈川県横浜市
 - 38) 高田和子: 保健指導の実際(食生活). 特定健診・保健指導実践者育成研修 栃木県保険者協議

- 会. 2008.09.04, 栃木県小山市
- 39) 高田和子: 保健指導の実際(食生活). 特定健診・保健指導実践者育成研修 栃木県保険者協議会. 2009.01.01, 栃木県宇都宮市
- 40) 田中茂穂: エネルギー代謝の計算. 第22回 ACSMヘルスフィットネスインストラクター教習ワークショップ、(社)日本フィットネス協会. 2008.10.16, 国立オリンピック記念青少年総合センター
- 41) 田中茂穂: 栄養アセスメント. 平成20年度日本体育協会公認スポーツ栄養士養成特別講習会、NPO法人日本スポーツ栄養研究会. 2008.11.30, 日本女子体育大学
- 42) 田中茂穂: 栄養と体重調節. 健康運動実践指導者養成講習会、(財)健康・体力づくり事業財団. 2008.08.18, クロス・ウェーブ府中
- 43) 田中茂穂: 栄養と体重調節. 第67回健康運動実践指導者養成講習会(東京①)、(社)日本フィットネス協会. 2008.06.19, オンワード総合研究所
- 44) 田中茂穂: 栄養摂取と運動「身体活動量の定量法とその実際(1)(2)」。平成20年度健康運動指導士養成講習会、(財)健康・体力づくり事業財団. 2008.05.07, 戸山サンライズ
- 45) 田中茂穂: 現場で生かす運動基準・エクササイズガイド. 平成20年度第14回実務向上研修Cコース、中央労働災害防止協会. 2008.12.06, 安全衛生総合会館(東京)
- 46) 田中茂穂: 現場で生かす運動基準・エクササイズガイド. 平成20年度第4回実務向上研修Cコース、中央労働災害防止協会. 2008.06.21, 新梅田研修センター
- 47) 田中茂穂: 身体活動量の定量法とその実際. 平成20年度第1回運動指導担当者コース(中央労働災害防止協会). 2009.03.23, 東京
- 48) 田畑泉: 特定健診からはじまる健康づくり. 福岡市特定健診応援団発足式. 2009.01.09, 福岡市福岡市役所
- 49) 門脇孝: 2型糖尿病・メタボリックシンドロームの病態と治療—食事栄養指導の重要性—. 関東信越国立病院管理栄養士協議会研修会. 2008.10.04, 東京
- 50) 門脇孝: サイエンスとヒューマニズムに立脚した糖尿病治療を目指して. 南房総糖尿病療養指導研究会. 2008.08.08, 千葉
- 51) 門脇孝: 糖尿病・メタボリックシンドロームの病態と対策—特定健診・保健指導の問題点と今後のすすめ方. 藤枝市立総合病院 学術カンファランス. 2008.07.07, 静岡
- 52) メリッサ・メルビー: 外国人から見た日本の食事. 群馬県栄養士会. 2008.10.19, 群馬県前橋市
- 53) 饗場直美: イキイキ長生き! 食生活〜かしこく選んで食べ方上手〜. 元気健康シンポジウム 岐阜市保健所主催. 2008.10.15, 岐阜市
- 54) 饗場直美: メタボリックシンドローム予防のための栄養管理〜給食の果たす役割〜. 平成20年度第5回特定給食施設等講習会 神奈川県秦野保健福祉事務所主催. 2009.02.20, 秦野市
- 55) 饗場直美: 健康づくりのための食育の推進と事業評価について. 神奈川県行政栄養士等研修会. 2008.07.30, 神奈川県
- 56) 饗場直美: 健康づくりのための食育の推進について. 平成20年度保健衛生研修 神奈川県茅ヶ崎保健事務所. 2008.12.10, 神奈川県
- 57) 饗場直美: 健康教育「食」を大切にする健康教育 健康教育に欠かせない『食育の必要性を考える』. 平成20年度パワーアップ研修会 八王子市教育委員会. 2008.07.31, 東京都
- 58) 饗場直美: 効果的な特定保健指導について〜行動療法の考え方〜. 群馬県行政栄養士協議会. 2009.02.07, 前橋市
- 59) 饗場直美: 効果的な保健・栄養指導のあり方とその現状. 東京都南多摩保健所主催研修会. 2009.01.20, 東京都南多摩市
- 60) 饗場直美: 行動変容に関する理論、保健指導を支えるカウンセリング技術. 保健指導実践者育成研修 東京都栄養士会. 2008.08.23, 東京都
- 61) 饗場直美: 行動変容に関する理論、保健指導を支えるカウンセリング技術. 保健指導実践者育成研修 東京都栄養士会. 2008.10.26, 東京都
- 62) 饗場直美: 子どもの食育—食習慣の基礎作りを支援するために—. 神奈川県保健活動推進研修会. 2008.09.18, 神奈川県
- 63) 饗場直美: 子どもの食習慣の基礎作りを支援するために. 食育講演会 三崎保健福祉事務所主催. 2008.11.28, 三浦市
- 64) 饗場直美: 食育に係る最新情報〜地域の食育を推進するために〜. 東京都栄養士連絡会講習会. 2008.07.07, 東京
- 65) 饗場直美: 食育をめぐる最新情報. 栄養管理講習会 東京都多摩小平保健所. 2008.06.24, 東京
- 66) 饗場直美: 対象に応じた食育について〜わかりやすい栄養表示とは〜. 給食施設における栄養管理研修会 青葉区福祉保健センター主催. 2009.02.09, 横浜市
- 67) 饗場直美: 地域で食育取り組みもう〜給食施設に期待すること〜. 特定給食施設研修会 八王子市保健所. 2009.03.13, 八王子市
- 68) 饗場直美: 地域で進める食育について. 高津区健康づくり推進会議・食育推進分科会. 2008.12.22, 川崎市
- 69) 饗場直美: 中学生における健康づくり. 教育方法研修会 東京都文京区教育センター主催. 2009.01.23, 東京
- 70) 饗場直美: 特定健診・特定保健指導の具体的な進め方について. 東京都栄養士事務連絡会研修会. 2008.07.14, 東京
- 71) 饗場直美: 目標の継続に向けて生活の中で工夫できるヒントをつかもう①. あきる野市特定保健指導事業 あきる野市保健福祉部. 2008.12.05, あきる野市

- 72) 饗場直美: 目標の継続に向けて生活の中で工夫できるヒントをつかもう②. あきる野市特定保健指導事業 あきる野市保健福祉部. 2009. 03. 28, あきる野市
- 73) 手嶋登志子: 食介護の視点からみたえん下困難食の新基準. 静岡県諏訪保健所給食従事者研修会. 2009. 03. 01, 静岡
- 74) 江崎治, 山崎聖美: 脂肪肝予防のストラテジー. 第 29 回ヒューマンサイエンス基礎研究講習会. 2008. 06. 13, 東京
- 75) 山田和彦: Practice of low sodium foods in Japan. 社団法人国際厚生事業団平成 20 年度非感染症対策研修(WHO-NCD コース 2008). 2008. 04. 14, 国立保健医療科学院
- 76) 山田和彦: 栄養摂取と運動、食生活と健康増進、消化と吸収の機構. 財団法人健康・体力づくり事業財団主催健康運動指導士養成講習会. 2008. 08. 06, 東京
- 77) 山田和彦: 特別用途食品と食生活. 日本臨床栄養協会・日本サプリメントアドバイザー認定機構フォローアップセミナー. 2008. 10. 26, 昭和女子大学
- 78) 山田和彦: 特別用途食品制度の見直しについて. 横浜市健康福祉局主催平成 20 年度健康増進法に基づく食品表示に関する研修. 2009. 03. 10
- 79) 梅垣敬三: 「健康食品をとりまく現状」—科学的と思われる食品情報の実態—. 平成 20 年度栄養管理講習会、千代田区保健所. 2008. 12. 05, 東京
- 80) 梅垣敬三: いわゆる健康食品の安全性に影響する要因分析とそのデータベース化・情報提供に関する研究. 食品安全委員会 5 周年記念事業-食品安全に関する研究事業成果発表会、食品安全委員会. 2008. 09. 17, 東京
- 81) 梅垣敬三: 健康づくりのための正しい食品表示や栄養情報のとらえ方. 平成 20 年度富山県食生活改善推進連絡協議会定例総会. 2008. 05. 27, 富山
- 82) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントとのつきあい方. 消費者教育講座、大田区消費者センター. 2008. 08. 27, 東京
- 83) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントによる健康被害. 市民公開講座、日本ビタミン学会. 2008. 11. 08, 奈良
- 84) 梅垣敬三: 健康食品・サプリメントをうまく使おう! 安全かつ効果的に利用するためのポイント. 市民公開講座第 51 回、千里ライフサイエンス. 2008. 06. 07, 大阪
- 85) 梅垣敬三: 健康食品って本当に効果があるの?. 平成 20 年度江戸川区消費者団体連絡会研修会. 江戸川区消費者センター. 2009. 01. 30, 江戸川区
- 86) 梅垣敬三: 健康食品の賢い使い方について. 食品に関するリスクコミュニケーション—健康食品に関する意見交換会—(厚生労働省). 2009. 02. 23, 札幌
- 87) 梅垣敬三: 食品の機能性に関する有効性と安全性. 平成 20 年度第 1 回東北農研産学官連携セミナー. 2008. 06. 30, 盛岡市
- 88) 梅垣敬三: 特定保健用食品の健康効果とは?. 第 23 回総会記念講演、兵庫県保険医協会講演会北阪神支部. 2008. 10. 18, 伊丹
- 89) 大賀英史: ポピュレーション・アプローチの考え方—ソーシャルキャピタルの視点から—. 長野県北信管内 保健師等研修会. 2008. 06. 07, 長野県北信保健所
- 90) 大賀英史: 心を動かし、人が本来持っている力を引き出す食事指導. (社) 鹿児島県栄養士会法人化 50 年記念講演会(平成 20 年度第 1 回研修会). 2008. 05. 17, 鹿児島市
- 91) 大森豊緑: これからの健康づくり運動指導者に求められるもの. 日本健康運動指導士会和歌山県支部設立記念総会特別講演. 2008. 10. 30, 和歌山市
- 92) 大森豊緑: 健康づくり施策概論. 健康運動実践指導者養成講習会、財団法人健康・体力づくり事業財団主催. 2008. 06. 16, 東京
- 93) 大森豊緑: 新型インフルエンザ—未知なる脅威への対策—. 社団法人和歌山県病院協会年次総会特別講演. 2009. 03. 21, 和歌山市
- 94) 渡邊昌: 栄養療法における適正なたんぱく摂取量. 4 機関臨床栄養研究会. 2008. 11. 14, 東京
- 95) 渡邊昌: 研究成果発表会(研究者向け). 財団法人循環器病研究振興財団. 2009. 02. 09, KKR ホテル東京(東京都千代田区)
- 96) 渡邊昌: 人類の健康のために、世界中の栄養士と連携と協力を. 第 15 回国際栄養士会議. 2008. 09. 08, 横浜
- 97) 渡邊昌: 第 102 会理事会. 財団法人健康・体力づくり事業財団. 2009. 01. 01, 財団法人健康・体力づくり事業財団会議室(東京都港区)
- 98) 渡邊昌: 第 102 会理事会. 財団法人健康・体力づくり事業財団. 2009. 03. 26, 財団法人健康・体力づくり事業財団会議室(東京都港区)

【研究所が主催・共催するセミナー等】

- 1) 荒井裕介: 国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 01, 豊中市
- 2) 荒井裕介: 国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 07, 名古屋市
- 3) 荒井裕介: 国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 08, 岡山市
- 4) 荒井裕介: 国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 26, 盛岡市

- 5) 荒井裕介: 国民健康・栄養調査を行うための準備と精度向上のための調査手技について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 30, 新宿区
 - 6) 森田明美: 行動変容理論にもとづいた大規模肥満克服プログラムの取り組み. 日米ワークショップ肥満対策への取り組み. 2008. 08. 29, 東京
 - 7) 野末みほ, 荒井裕介, 由田克士: 栄養摂取状況調査集計ソフト「食事しらべ」データ処理について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 10. 29, 東京
 - 8) 野末みほ, 荒井裕介, 由田克士: 栄養摂取状況調査集計ソフト「食事しらべ」データ処理について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 10. 30, 大阪
 - 9) 野末みほ, 荒井裕介, 由田克士: 栄養摂取状況調査集計ソフト「食事しらべ」利用方法について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 10. 29, 東京
 - 10) 野末みほ, 荒井裕介, 由田克士: 栄養摂取状況調査集計ソフト「食事しらべ」利用方法について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 10. 30, 大阪
 - 11) 野末みほ: 適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 01, 豊中市
 - 12) 野末みほ: 適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 07, 名古屋市
 - 13) 野末みほ: 適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 08, 岡山市
 - 14) 野末みほ: 適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 26, 盛岡市
 - 15) 野末みほ: 適切な食品番号の選択、調理による変化や栄養素が強化されている食品の考え方について. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 30, 東京
 - 16) 由田克士: 健康・栄養調査の企画と事業評価のポイント～継続的な結果比較、評価のための企画、結果評価～. 健康・栄養調査技術研修セミナー(調査企画・解析・評価編). 2008. 08. 28, 東京
 - 17) 由田克士: 健康・栄養調査の信頼性を高めるー標準化・精度管理の必要性ー. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 07, 名古屋市
 - 18) 由田克士: 健康・栄養調査の信頼性を高めるー標準化・精度管理の必要性ー. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 08, 岡山市
 - 19) 由田克士: 健康・栄養調査の信頼性を高めるー標準化・精度管理の必要性ー. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 26, 盛岡市
 - 20) 由田克士: 健康・栄養調査の信頼性を高めるー標準化・精度管理の必要性ー. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 30, 東京
 - 21) 由田克士: 健康・栄養調査の信頼性を高めるー標準化・精度管理の必要性ー. 健康・栄養調査技術研修セミナー. 2008. 08. 01, 豊中市
 - 22) 由田克士: 国民健康・栄養調査の現状. 第10回一般公開セミナー. 2009. 02. 28, 東京
 - 23) 由田克士: 最近の国民健康・栄養調査成績から. 平成20年度栄養情報担当者(NR)研修会. 2008. 11. 22, 名古屋
 - 24) Tanaka S: Determinants of total energy expenditure and significance of physical activity. Challenges to Obesity Prevention US-Japan Workshop. 2008. 08. 29, International Medical Center of Japan
 - 25) 宮地元彦: 身体活動量をいかに増やすか. 第10回一般公開セミナー. 2009. 02. 28, 東京
 - 26) 田畑泉: エクササイズガイド2006ー生活活動で健康づくり!ー. オープンハウス2008. 2008. 09. 27, 東京
 - 27) 饗場直美: 食事バランスをいかに改善するか. 第10回一般公開セミナー. 2009. 02. 28, 東京
 - 28) 饗場直美: 食生活と健康ー健康への1歩は食事の見直しからー. オープンハウス2008. 2008. 09. 27, 東京
 - 29) 山田和彦: エネルギー換算係数の考え方. 平成20年度栄養情報担当者(NR)研修会. 2008. 10. 04, 仙台市
 - 30) 梅垣敬三: 「健康食品」とつきあい方. オープンハウス2008. 2008. 09. 27, 東京
 - 31) 梅垣敬三: 「健康食品」情報の解釈において留意すべき事項. 栄養情報担当者(NR)研修会. 2008. 10. 13, 東京
 - 32) 大森豊緑: 国立健康・栄養研究所の取り組み. 第10回一般公開セミナー. 2009. 02. 28, 東京
- 【その他の講演会等】**
- 1) 森田明美: 疫学調査からみた栄養摂取. 平成20年度政策創薬総合研究推進事業、第29回ヒューマンサイエンス基礎研究講習会「国立健康・栄養研究所における研究活動」. 2008. 06. 13, 東京
 - 2) 石見佳子, 卓興鋼, 梅垣敬三, 山内淳: 大豆成分の生活習慣病予防効果の系統的レビューとその検証に関する研究(第1報)(特定研究). 不二大豆たん白質研究振興財団研究報告会. 2008. 06. 02, 大阪
 - 3) 石見佳子: 骨の健康と栄養. Otsuka Academy Nutrition Program NR養成講座. 2009. 02. 18, 東京
 - 4) 石見佳子: 骨粗鬆症予防における大豆イソフラボン及び豆乳の効果. 日本豆乳協会奨励寄附研究報告会. 2008. 07. 04, 東京
 - 5) 石見佳子: 食品成分による骨粗鬆症の予防. 日米シンポジウム「食品成分の機能性-日米からの発信- ILSI Japan, (財)日本健康・栄養食品協

- 会, NNFA ジャパン, (独) 国立健康・栄養研究所. 2008. 12. 03, 東京
- 6) 由田克士: いきなり 100 点を求めない! 知識・スキル・興味・生活環境に応じた栄養教育を考える. 第 7 回糖尿病クリニカルケースカンファレンス. 2009. 03. 28, 東京
 - 7) 由田克士: 特定保健指導の効果的な実践 ~効果的な食生活改善指導について~. 健康保険組合連合会 平成 20 年度特定保健指導実践者育成研修会 (2). 2008. 10. 03, 東京
 - 8) 由田克士: 特定保健指導の効果的な実践 ~効果的な食生活改善指導について~. 健康保険組合連合会 平成 20 年度特定保健指導実践者育成研修会 (3). 2008. 10. 17, 東京
 - 9) 由田克士: 特定保健指導の効果的な実践 ~効果的な食生活改善指導について~. 健康保険組合連合会 平成 20 年度特定保健指導実践者育成研修会 (4). 2008. 10. 24, 大阪
 - 10) 由田克士: 特定保健指導の効果的な実践 ~効果的な食生活改善指導について~. 健康保険組合連合会 平成 20 年度特定保健指導実践者育成研修会 (1). 2008. 09. 26, 東京
 - 11) 由田克士: 平成 19 年度 丸山地区食事調査結果から見えてくるもの. 千葉県南房総市 学校給食における学校・家庭・地域の連携推進委員会講演会. 2008. 10. 31, 南房総市
 - 12) 宮地元彦: メタボリックシンドロームを予防・改善する運動・身体活動. 健やか生活習慣フェスタ 厚生労働省 健康・体力づくり事業財団. 2008. 03. 15, 池袋サンシャインホール
 - 13) 田中茂穂: “健康づくりのための運動指針 2006” に基づく運動指導. 第 7 回糖尿病クリニカルケースカンファレンス. 2009. 03. 28, 東京
 - 14) 田中茂穂: エネルギー消費量の正確な評価と変動要因. 平成 20 年度政策創薬総合研究推進事業 第 29 回ヒューマンサイエンス基礎研究講習会. 2008. 06. 13, 国立健康・栄養研究所
 - 15) Aiba N: Nutritional Education Program 「日本の食育の推進」. 海外ジャーナリスト食育講演会・ヤクルト株式会社主催. 2008. 10. 07, 東京
 - 16) Melby MK: Effects of an equol supplement on menopausal supplements. . 3rd International Isoflavone & Equol Research Steering Committee Meeting, Otsuka Pharmaceutical. 2008. 11. 08, Tokyo, Japan
 - 17) 饗場直美: 食品表示の問題点. ヒューマンサイエンス基礎研究講習会. 2008. 06. 13, 東京都
 - 18) 饗場直美: 特定保健指導の実践. 平成 20 年度メタボリックシンドローム予防専門研修 財団法人滋賀県健康づくり財団主催. 2009. 01. 10, 滋賀県大津市
 - 19) 江崎治, 山崎聖美: トランス脂肪酸の考え方. 第 16 回 加工油脂栄養研究会 主催: 加工油脂栄養研究会. 2008. 10. 18, ホテル「まほろば」(北海道)
 - 20) 江崎治: 運動の脂肪燃焼亢進作用とミトコンドリア量増加機序. 第 1 回 Young Researchers Conference ノバルティス ファーマ株式会社. 2008. 12. 10, 山の上ホテル (東京)
 - 21) 永田純一: 特定保健用食品の分析試験について. 日本健康栄養食品協会. 2008. 07. 04, 東京
 - 22) 永田純一: 特定保健用食品許可状況と安全・安心の考え方. 日本栄養食糧学会九州・沖縄支部. 2008. 06. 14, 福岡
 - 23) 永田純一: 日本人におけるトランス型脂肪酸摂取のとりえ方 -トランス脂肪酸問題にどう取り組むべきか. 日本臨床栄養学会・日本臨床栄養協会. 2008. 10. 10, 東京
 - 24) 竹林純: 食品の抗酸化力を示す指標—Anti Oxidant Unit—. 平成 20 年度政策創薬総合研究推進事業 第 29 回ヒューマンサイエンス基礎研究講習会. 2008. 06. 13, 東京
 - 25) 梅垣敬三, 遠藤香: 葉酸の供給源としての緑茶の可能性. 茶学術シンポジウム. 2008. 07. 05, 東京
 - 26) 梅垣敬三: サプリメントの安全性・有効性情報、話題の情報. 日本サプリメントアドバイザー講習会、日本サプリメントアドバイザー認定機構. 2008. 10. 13, 大阪
 - 27) 梅垣敬三: サプリメントの安全性・有効性情報、話題の情報. 日本サプリメントアドバイザー講習会、日本サプリメントアドバイザー認定機構. 2008. 10. 26, 東京
 - 28) 梅垣敬三: サプリメントの適切な利用に対する考え方. NNFA ジャパン教育セミナー. 2008. 09. 09, 東京
 - 29) 梅垣敬三: 機能性素材・栄養成分の全体評価; 現状の到達点と今後の課題. 機能性食品の安全性シンポジウム. 2008. 04. 21, 東京
 - 30) 梅垣敬三: 健康食品の現状と問題点. 健康食品管理士養成校教員研修会. 2008. 06. 21, 東京
 - 31) 梅垣敬三: 特定保健用食品について. 長野県食品添加物協会講習会、長野県食品添加物協会. 2008. 11. 27, 松本
 - 32) 渡邊昌: 『生きる鍵』としての食生活. 特定健診・特定保健指導をどう活かす (長野県医学夏季大学講座). 2008. 07. 25, 長野県
 - 33) 渡邊昌: 09 年賀交歓会. エグゼクティブ会議. 2009. 01. 07, 東京
 - 34) 渡邊昌: 第 101 回理事会. (財) 健康・体力づくり事業財団. 2008. 05. 27, 東京
 - 35) 渡邊昌: AOU とフードアイコンによる表示への取り組み. Antioxidant Unit 研究会. 2008. 10. 02, 東京
 - 36) 渡邊昌: バキュロウウイルスの特性を利用した家畜用ワクチンの開発. 平成 20 年度中間評価に係るヒアリング. 2008. 10. 20, 東京
 - 37) 渡邊昌: メタボ対策と食品表示. 食とメタボ シンポジウム. 2008. 04. 25, 東京
 - 38) 渡邊昌: 栄養療法と運動療法を併用した予防医療の可能性. 統合医療展・医療実践セミナー. 2009. 03. 11, 東京
 - 39) 渡邊昌: 機能栄養食品学. 有限責任中間法人日

- 本統合医療学会 (IMJ) . 2008. 09. 20, 東京
- 40) 渡邊昌: 機能的食品の今後の展開. 日本抗加齢医学会専門医・指導士受験用講習会. 2009. 02. 22, 東京
- 41) 渡邊昌: 高齢者の料理のつくり方～おいしい・簡単・美しい～. 国際福祉機器展 H. C. R. 2008. 2008. 09. 24, 東京ビックサイト
- 42) 渡邊昌: 常務理事会・理事会・評議委員. 日本抗加齢医学会専門医・指導士受験用講習会. 2008. 06. 05, 東京
- 43) 渡邊昌: 食と健康のためのユビキタス情報基盤研究会講演. (財)大坂科学技術センター. 2008. 10. 07, 大阪
- 44) 渡邊昌: 食育のめざすもの. ソリューションセミナー. 2008. 09. 20, 東京
- 45) 渡邊昌: 新年賀詞交歓会. 財団法人ヒューマンサイエンス振興財団. 2009. 01. 14, 東京
- 46) 渡邊昌: 第15回健康食品フォーラム. (財)医療経済研究・社会保険福祉協会. 2008. 10. 02, 東京
- 47) 渡邊昌: 第2回選考・評価委員会. 生物系特定産業技術研究支援センター. 2009. 02. 17, 東京
- 48) 渡邊昌: 第3回食品産業技術検討委員会. 食料産業クラスター促進技術対策. 2009. 02. 24, 東京
- 49) 渡邊昌: 第4回食育推進評価委員会. 内閣府食育推進室. 2008. 09. 30, 東京
- 50) 渡邊昌: 第一回栄養と健康を考える有職者会の会合・懇親会. (社)日本栄養士会. 2009. 02. 11, 東京
- 51) 渡邊昌: 低たんぱく食の必要性セミナー. 低たんぱく食普及会. 2008. 05. 17, 東京
- 52) 渡邊昌: 電磁界情報センター運営委員会. 電磁界情報センター運営委員会. 2009. 03. 27, 全日電工連会館
- 53) 渡邊昌: 電磁界情報センター開所にあたっての諸問題の検討. 電磁界情報センター運営監視委員会. 2008. 10. 02, 東京
- 54) 渡邊昌: 特定健診・特定保健指導のねらいと対策. 第65回長野県農村医学会総会. 2008. 07. 05, 長野県
- 55) 渡邊昌: 特定健診・特定保健指導のめざすもの. ラジオNIKKI 『医学の焦点』 . 2008. 08. 21, 東京
- 56) 渡邊昌: 特別公開セミナー・新春交流会. NNF Aジャパン. 2009. 01. 28, 東京
- 57) 渡邊昌: 理事会. Antioxidant Unit 研究会. 2008. 10. 02, 東京
- 析検討会構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 5) 石見佳子: 「日本人の食事摂取基準」策定委員会 ミネラルワーキンググループ構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 6) 石見佳子: 科学技術・学術審議会専門委員 (資源調査分科会). 文部科学省 平成18年10月11日. 2008.
- 7) 石見佳子: 食品安全委員会遺伝子組換え食品等専門調査会専門委員. 内閣府食品安全委員会 平成19年10月1日. 2008.
- 8) 石見佳子: 食品安全委員会新開発食品専門調査会専門委員. 内閣府食品安全委員会 平成19年10月1日. 2008.
- 9) 坪田(宇津木)恵: 日本人の食事摂取基準 策定委員会高齢者ワーキンググループ. 厚生労働省健康局. 2008.
- 10) 由田克士: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会 ワーキンググループ構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 11) 由田克士: 平成19年国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 12) 由田克士: 平成20年国民健康・栄養調査企画解析検討会構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 13) 由田克士: 薬事・食品衛生審議会臨時委員. 厚生労働省医薬食品局. 2008.
- 14) 高田和子: 介護保険マニュアル 栄養改善マニュアル改訂協力委員. 2008年9月. 2008.
- 15) 田中茂穂: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会 ワーキンググループ構成員 (エネルギー). 厚生労働省健康局 総務課生活習慣病対策室長 関英一. 2008.
- 16) 田畑泉: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会 委員. 厚生労働省 健康局長 (6月16日). 2008.
- 17) 窪田直人: 食事療法用宅配食品栄養指針委員. . 2008.
- 18) 門脇孝: ターゲットタンパク研究プログラムプログラム連絡委員. 文部科学省. 2008.
- 19) 門脇孝: 科学技術・学術審議会専門委員. 文部科学省. 2008.
- 20) 門脇孝: 科学研究費委員会専門委員. 日本学術振興会. 2008.
- 21) 門脇孝: 食品の安心・安全確保推進研究事前評価委員会委員. 厚生労働省. 2008.
- 22) 門脇孝: 地域科学技術施策専門委員. 文部科学省. 2008.
- 23) 門脇孝: 平成21年度科学技術分野の文部科学大臣表彰審査委員会 若手科学者賞審査部会委員. 文部科学省. 2008.
- 24) 門脇孝: 保健医療専門審査員. 厚生労働省. 2008.
- 25) 饗場直美: 栄養成分等情報提供検討委員会. 2008.
- 26) 饗場直美: 厚生労働省医薬食品局 薬事・食品衛生審議会専門委員. 2008.
- 27) 饗場直美: 内閣府企業分野等食育活動検討会議委員. 2008.

5. 政府関係機関審議会、委員会等

【厚生労働省等政府関連】

- 1) 山内淳: 日本人の食事摂取基準ミネラルワーキンググループ. 2008年8月. 2008.
- 2) 森田明美: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会 委員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 3) 森田明美: 食品安全委員会添加物専門調査会専門参考人. 内閣府食品安全委員会. 2008.
- 4) 森田明美: 平成20年国民健康・栄養調査企画解

- 28) 手嶋登志子: 厚生労働省 特定用途食品制度のあり方に関する検討会(えん下困難者用食品 WG)委員. 2008.
- 29) 手嶋登志子: 農林水産省 特色ある JAS 規格検討委員. 2008.
- 30) 江崎治: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会ワーキンググループリーダー. 厚生労働省健康局 総務課生活習慣病対策室長 関英一. 2008.
- 31) 山田和彦: 「日本人の食事摂取基準」策定検討会ワーキンググループ構成員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 32) 山田和彦: 管理栄養士国家試験委員. 厚生労働省健康局. 2008.
- 33) 山田和彦: 薬事・食品衛生審議会新開発食品調査部会員. 厚生労働省医薬食品局. 2008.
- 34) 梅垣敬三: 管理栄養士国家試験委員. 19. 8. 23-21. 8. 22. 2008.
- 35) 梅垣敬三: 薬事・食品衛生審議会専門委員. 19. 1. 24-21. 1. 23. 2008.
- 36) 笠岡(坪山)宜代: 厚生労働省 「日本人の食事摂取基準」策定検討会 活用ワーキンググループ構成員. 2008. 7. 2008.
- 37) 渡邊昌: 「国際医療協力研究委託費運営委員会委員」及び「国際医療協力研究委託費運営委員会中間・事後評価部会委員」. 厚生労働省医政局、委任期間: 承認日から平成 21 年 3 月 31 日まで. 2008.
- 38) 渡邊昌: 「糖尿病等の生活習慣病対策の推進に関する検討会」構成員. 厚生労働省健康局総務課生活習慣病対策室、平成 19 年 6 月 14 日、期間: 平成 19 年 6 月 20 日から平成 20 年 6 月 19 日まで. 2008.
- 39) 渡邊昌: 化学物質リスク研究事業企画運営委員会委員. 厚生労働省医薬局審査管理課化学物質安全対策室、平成 19 年 8 月 7 日、期間: 平成 19 年 8 月から平成 24 年 8 月まで. 2008.
- 40) 渡邊昌: 厚生科学審議会委員. 舛添要一(平成 21 年 1 月 23 日). 2008.
- 41) 渡邊昌: 食育推進会議委員. 内閣府政策統括官(共生社会政策担当)、発令日平成 19 年 8 月 14 日、期間: 平成 19 年 8 月 25 日~平成 21 年 8 月 24 日. 2008.
- 42) 渡邊昌: 食品の安心・安全確保推進研究中間・事後評価委員会委員. 厚生労働省医薬局(平成 20 年 1 月 21 日)、期間: 平成 20 年 1 月 1 日から平成 20 年 12 月 31 日まで. 2008.
- 43) 渡邊昌: 平成 20 年度新規採択課題研究計画検討会. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構、平成 20 年 9 月 12 日. 2008.
- 44) 渡邊昌: 薬事・食品衛生審議会臨時委員. 厚生労働省医薬食品局、期間: 平成 19 年 1 月 23 日から平成 21 年 1 月 22 日. 2008.

【地方自治体等】

- 1) 由田克士, 荒井裕介: 県民健康・栄養調査作業検討会. 栃木県. 2008.

- 2) 由田克士: 「にいがた減塩ルネサンス(仮称)」プロジェクト キックオフ会議構成員. 新潟県福祉保健部. 2008.
- 3) 門脇孝: 魚沼基幹病院基本計画策定委員会 委員. 魚沼基幹病院基本計画策定委員会. 2008.
- 4) 梅垣敬三: 東京都食品安全情報評価委員会委員. 20. 5. 1-22. 4. 30. 2008.
- 5) 大賀英史: 国民健康保険特定保健指導業務委託事業者評価委員・委員長. 神奈川県横浜市健康福祉局長 4 月 1 日. 2008.
- 6) 大賀英史: 静岡県小山町 食育推進計画策定委員会・委員長. 静岡県小山町長 平成 20 年 5 月. 2008.

【その他】

- 1) 山内淳: 脂溶性ビタミン総合研究委員会委員. 2008 年 4 月. 2008.
- 2) 由田克士: 財団法人 健康・体力づくり事業財団健康増進総合支援システム情報提供事業 情報評価委員. 財団法人 健康・体力づくり事業財団. 2008.
- 3) 由田克士: 平成 20 年度 日本栄養士会 保健指導・食育活動拠点整備事業 企画運営委員会委員. 日本栄養士会. 2008.
- 4) 江崎治: 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構「新技術・新分野創出のための基礎研究推進事業」中間評価専門委員. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所 生物系特定産業技術研究支援センター(平成 19 年 10 月 1 日~平成 21 年 3 月 31 日). 2008.
- 5) 江崎治: 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所における人間を対象とする生物医学的研究倫理委員会 倫理委員会委員. 独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構食品総合研究所(平成 18 年 4 月 1 日~平成 21 年 3 月 31 日). 2008.
- 6) 梅垣敬三: (独) 国民生活センター商品テスト分析・評価委員会委員. 19. 4. 1-21. 3. 31. 2008.

6. 関連学術団体等への貢献

【理事等の役員】

- 1) 由田克士: 日本循環器病予防学会(日本循環器管理研究協議会) 理事. 2008.
- 2) 熊江隆: 体力・栄養・免疫学会 理事. 2008.
- 3) 高田和子: 日本スポーツ栄養研究会理事. 2008.
- 4) 門脇孝: American Diabetes Association. 2008.
- 5) 門脇孝: American Endocrine Society. 2008.
- 6) 門脇孝: 日本再生医学会(評議員). 2008.
- 7) 門脇孝: 日本生化学会. 2008.
- 8) 門脇孝: 日本体質医学会(常任理事). 2008.
- 9) 門脇孝: 日本適応医学会(評議員). 2008.
- 10) 門脇孝: 日本糖尿病・肥満動物学会(理事長). 2008.
- 11) 門脇孝: 日本糖尿病学会(理事長). 2008.
- 12) 門脇孝: 日本糖尿病協会(常任理事). 2008.
- 13) 門脇孝: 日本糖尿病合併症学会(幹事). 2008.

- 14) 門脇孝: 日本内科学会. 2008.
- 15) 門脇孝: 日本内分泌学会 (理事). 2008.
- 16) 門脇孝: 日本肥満学会 (評議員). 2008.
- 17) 門脇孝: 日本病態栄養学会 (常任理事). 2008.
- 18) 門脇孝: 日本分子生物学会. 2008.
- 19) 門脇孝: 日本臨床分子医学会 (評議員). 2008.
- 20) 山田和彦: 日本栄養・食糧学会理事. 2008.
- 21) 山田和彦: 日本栄養改善学会理事. 2008.
- 22) 山田和彦: 日本食物繊維学会常務理事. 2008.
- 23) 梅垣敬三: 日本栄養・食糧学会理事. 20.5.5. 2008.
- 24) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 研究運営部会 副部会長. 2008.6. 2008.
- 25) 芝池伸彰: 公衆衛生情報研究協議会理事. 2008.
- 26) 渡邊昌: 日本抗加齢医学会委員長. 2008.
- 27) 渡邊昌: 第15回国際栄養士会議組織委員会顧問. 2008.
- 28) 渡邊昌: antioxidant Unit 研究会常任理事. 2008.
- 29) 渡邊昌: 財団法人日本健康・栄養食品協会理事. 2008.
- 30) 渡邊昌: 日本予防医療評価機構理事. 2008.
- 31) 渡邊昌: 財団法人日本健康・栄養食品協会理事. 2008.
- 32) 渡邊昌: 財団法人健康・体力づくり事業財団理事. 2008.
- 33) 渡邊昌: 「ビタミンの日」委員会理事. 2008.

【学会誌等の雑誌編集委員】

- 1) T. Utsugi M: Public Health Nutrition 雑誌編集委員. 2007.1-. 2008.
- 2) 熊江隆: 体力・栄養・免疫学雑誌編集委員. 2008.
- 3) 高田和子: 栄養学雑誌編集委員. 2008.
- 4) 門脇孝: 『Diabetes Journal』編集委員. 2008.
- 5) 門脇孝: 『Diabetes News in the World』編集委員. 2008.
- 6) 門脇孝: 『Diabetes Nursing』編集委員. 2008.
- 7) 門脇孝: 『DITN』編集委員. 2008.
- 8) 門脇孝: 『DM Communications』. 2008.
- 9) 門脇孝: 『科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン』編集委員. 2008.
- 10) 門脇孝: 『糖尿病治療ガイド』編集委員. 2008.
- 11) 門脇孝: Arteriosclerosis Thrombosis and Vascular Biology, Editorial Board. 2008.
- 12) 門脇孝: Best Practice & Research Clinical Endocrinology & Metabolism, Editorial Board. 2008.
- 13) 門脇孝: Current Diabetes Reviews, Editorial Board. 2008.
- 14) 門脇孝: Diabetes Care, Editorial Board. 2008.
- 15) 門脇孝: Diabetes, Obesity and Metabolism, Editorial Board. 2008.
- 16) 門脇孝: Endocrinology, Editorial Board. 2008.
- 17) 門脇孝: J. Clin. Invest., Editorial Board. 2008.
- 18) 門脇孝: Metabolic Syndrome and Related Disorders, Editorial Board. 2008.
- 19) 門脇孝: The Journal of Clinical Endocrinology & Metabolism, Editorial Board. 2008.
- 20) 門脇孝: The Journal of Endocrine Genetics, Editorial Board. 2008.
- 21) Melby MK: Maturitas: The European Menopause Journal. 2006-9. 2008.
- 22) 江崎治: 「International Journal of Obesity」Editorial Board. H18.10.1~. 2008.
- 23) 江崎治: 日本肥満学会誌「肥満研究」編集委員 江崎治. H18.1.1~H21.12.31. 2008.
- 24) 山田和彦: 日本食物繊維学会編集委員. 2008.
- 25) 梅垣敬三: 日本食品衛生学会情報委員会委員. 19.11.7. 2008.
- 26) 渡邊昌: 医と食編集長. 2009.

【その他】

- 1) 山内淳: 日本ビタミン学会評議員. 2008.
- 2) 山内淳: 日本栄養・食糧学会評議員. 2008.
- 3) 石見佳子: 文部科学省女性研究者育成モデル「東京農工大学理系女性のエンパワーメントプログラム」評価委員. 2008.
- 4) 由田克士: 第15回国際栄養士会議 プログラム委員会委員. 2008.
- 5) 田中茂穂: 平成20年度(財)日本体育協会 スポーツ医・科学専門委員会「子どもの発達段階に応じた体力向上プログラム」事業・調査研究協力者会議委員. 2008.
- 6) 田中茂穂: 平成20年度(財)日本体育協会 スポーツ医・科学専門委員会「日本の子どもにおける身体活動・運動目標設定と効果の検証」研究班員. 2008.
- 7) 矢野友啓: 日本ビタミン学会編集委員会トピックス等担当委員. 2008.
- 8) 笠岡(坪山)宜代: 栄養学若手研究者の集い 世話人. 2005.4. 2008.
- 9) 笠岡(坪山)宜代: 日本栄養士会 研究教育協議会 幹事. 2008.6. 2008.
- 10) 芝池伸彰: (財)国際協力医学研究振興財団 糖尿病戦略研究運営委員会委員. 2008.

7. 併任、非常勤講師等

【厚生労働省等との併任】

- 1) 永田純一: 厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課新開発食品保健対策室併任. 2008.
- 2) 卓興鋼: 厚生労働省医薬食品局食品安全部基準審査課新開発食品保健対策室併任. 2008.

【大学の客員教授・非常勤講師等】

- 1) 荒井裕介: 女子栄養大学 非常勤講師. 2008.
- 2) 山内淳: 日本女子大学 家政学部. 2008.
- 3) 石見佳子: お茶の水女子大学 生活科学部非常勤講師. 2008.
- 4) 野末みほ: 女子栄養大学非常勤講師. 2008.

- 5) 由田克士: 金沢医科大学非常勤講師. 2008.
- 6) 由田克士: 山口県立大学大学院 非常勤講師. 2008.
- 7) 由田克士: 仁愛女子短期大学非常勤講師. 2008.
- 8) 熊江隆: 関東学院大学 非常勤講師. 2008.
- 9) 熊江隆: 東京農業大学 客員教授. 2008.
- 10) 熊江隆: 日本体育大学 非常勤講師. 2008.
- 11) 高田和子: 新潟医療福祉大学健康科学部. 2008.
- 12) 田中茂穂: 首都大学東京・人間健康科学副専攻コース 非常勤講師. 2008.
- 13) 田畑泉: 順天堂大学 スポーツ健康科学部客員教授. 2008.
- 14) 田畑泉: 早稲田大学スポーツ科学学術院 客員教授. 2008.
- 15) 宮地元彦: 早稲田大学科研機構 客員教授. 2008.
- 16) 宮地元彦: 早稲田大学スポーツ科学学術院 客員教授. 2008.
- 17) 宮地元彦: 鹿屋体育大学体育学部 客員教授. 2008.
- 18) 門脇孝: 群馬大学客員教授. 2008.
- 19) 門脇孝: 順天堂大学客員教授. 2008.
- 20) 門脇孝: 東京大学医学部附属病院 副病院長. 2008.
- 21) 門脇孝: 東京大学大学院医学系研究科代謝栄養病態学(糖尿病・代謝内科) 教授. 2008.
- 22) 饗場直美: 高崎健康福祉大学大学院 健康福祉学研究科 非常勤講師. 2008.
- 23) 矢野友啓: 静岡県立大学食品栄養科学部生化学 客員教授. 2008.
- 24) 矢野友啓: 千葉大学大学院医学薬学府非常勤講師. 2008.
- 25) 矢野友啓: 千葉大学薬学部非常勤講師. 2008.
- 26) 矢野友啓: 日本大学大学院非常勤講師. 2008.
- 27) 三好美紀: 県立広島大学大学院 非常勤講師. 2008.
- 28) 三好美紀: 聖母大学 非常勤講師. 2008.
- 29) 大森豊緑: 川崎医療福祉大学大学院非常勤講師. 2008.
- 30) 渡邊昌: 早稲田大学先端科学・健康医療融合研究機構生命医療工学研究所(早稲田大学プロジェクト研究所) 客員教員. 2008.
- 31) 渡邊昌: 東京農業大学総合研究所客員教授. 2008.
- 32) 渡邊昌: 信州大学医学部非常勤講師. 2008.

【その他】

- 1) 熊江隆: [財] 日本産業廃棄物処理振興センター 非常勤講師. 2008.
- 2) 田中茂穂: (独) 科学技術振興機構 「良いシーズをつなぐ知の連携システム」 外部専門家. 2008.
- 3) 門脇孝: 情報・システム研究機構国立遺伝学研究所 客員研究部門客員教員. 2008.

8. 国際貢献

【海外への派遣による科学・技術協力】

- 1) 笠岡(坪山)宜代: 米国 FDA, NIH など関係諸機関との共同研究・情報交換. FDA, NIH. 2008.

【海外からの研究者の受け入れ・指導】

- 1) 田畑泉: 身体活動量の増加による生活習慣病発症予防に関する研究. 若手外国人研究者招へい事業. 2008.
- 2) 三好美紀: マレーシア国保健省より栄養課補佐官来所受入. 11月25日～12月5日. 2008.

【国際会議への対応】

- 1) 門脇孝: WHO Expert Consultation on Waist Circumference and Waist-Hip Ratio. WHO. 2008.
- 2) 山田和彦: FAO/WHO 合同コーデックス会議第30回栄養・特殊用途食品部会出席. ケープタウン(南アフリカ共和国). 2008.
- 3) 笠岡(坪山)宜代: 日米シンポジウム「肥満対策への取り組み」開催. . 2008, 国立国際医療センター.
- 4) 芝池伸彰, 山田和彦, 梅垣敬三, 笠岡(坪山)宜代: 日米シンポジウム「食品の機能と表示の最新動向」開催. . 2008.

9. 知的財産権等

- 1) 江崎治, 仲谷照代, 三宅義明, 福本修一, 平光正典, 岡田実紀: 「抗肥満剤」(ポッカコーポレーション中央研究所) 出願番号 2005-148500: 審査請求. 2008.
- 2) 饗場直美: 「栄養教育用こまキット」 実用新案. 2008.
- 3) 饗場直美: 「栄養教育用こまキット」 意匠登録. 2008.
- 4) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 国民健康・栄養調査業務支援ソフト「食事しらべ」商標登録. 2008.
- 5) 由田克士, 荒井裕介, 野末みほ: 国民健康・栄養調査業務支援ソフト「食事しらべ」著作権登録. 2008.

10. 受賞等

- 1) 窪田哲也: 第23回日本糖尿病・肥満動物学会年次学術集会若手研究奨励賞. 2009.

IV 資 料

1. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標

独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第29条第1項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所が達成すべき業務運営に関する目標(以下「中期目標」という。)を次のとおり定める。

平成18年3月1日

厚生労働大臣 川崎二郎

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の栄養・食生活、運動と健康との関わりについて、基礎から応用に至るまでの調査及び研究を包括的かつ国際的な水準で行い得る試験研究機関であることから、国民の健康・栄養状態及びQOL(生活の質)の向上に直接あるいは間接的に寄与することのできる調査及び研究を効率的に行い、国民の健康と福祉のために貢献することが重要である。

そのため、特にヒトを対象とした研究に関して、わが国の大学・研究機関の中心的存在として、総合的・統合的な研究を推進するとともに、研究者を育成する役割を果たすことを求める。

また、厚生労働行政上の重要な健康・栄養施策を推進する上で不可欠な科学的根拠を質の高い研究によって示し、それらを専門的立場から要約して発信するとともに、健康科学・栄養学領域において、アジア地域への貢献を含め、国際的なリーダーシップを担うことを期待する。

第1 中期目標の期間

独立行政法人通則法(以下「通則法」という。)第29条第2項第1号の中期目標の期間は、平成18年4月1日から平成23年3月31日までの5年間とする。

第2 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項

通則法第29条第2項第3号の国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項は、次のとおりとする。

1. 研究に関する事項

(1) 重点調査研究に関する事項

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省における健康づくり施策に必要な不可欠な科学的知見を蓄積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行うこと。

- ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究
- イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究
- ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価

及び健康影響評価に関する調査研究

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項

- ア 科学技術基本計画(仮称)に沿って、研究機関として独自性の高い基礎的・応用的研究を行うこと。
- イ 研究の成果をより広く社会に還元するために、食育推進基本計画(仮称)に資する調査研究を推進し、専門家(管理栄養士等)への情報提供を行うこと。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項

- ア 健康・栄養に関する施策、ガイドライン等の科学的根拠につながる質の高い研究を行い、研究成果を論文等を通じて社会に発信・還元を行うこと。
- イ 調査・研究の成果を社会に還元するために、知的財産権の取得・開示を行うこと。
- ウ 健康・栄養関連の専門家を対象としたセミナー、一般向けの講演会等を開催すること。
- エ 研究所の一般公開を実施するとともに、中学校・高等学校等からの見学にも積極的に応じること。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項

- ア 独立行政法人という組織形態の利点を最大限活かした研究資金等の運用及び人的資源の配置により、研究・業務の効率化を図ること。
- イ 国内外の産業界を含む健康・栄養・食品関係の機関との共同研究の拡充等を目的として、研究所研究員の派遣及び他機関等の研究員の受入れをより積極的に行うこと。
- ウ 大学及び民間企業等との連携・協力により、研究者の交流を進め、人材の養成と資質の向上を図ること。
- エ 調査及び研究の円滑な実施が図られるよう、適切な措置を講ずるとともに、他機関との共同研究及び受託研究において、双方の研究施設及び研究設備の稼働状況に応じた共同利用を図ること。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項

- ア 国民健康・栄養調査の実施に関する事務のうち、集計事務については、「健康日本21」、都道府県健康増進計画等の政策ニーズに適時対応して、迅速かつ効率的に集計を行うこと。

また、外部委託のより積極的な活用、高度集計・解析システムの活用等により効率化を図る。

イ 厚生労働省が取去した特別用途表示及び栄養表示がなされた食品の試験業務を的確に実施する。また、特定保健用食品の関与成分等、新たな食品成分の分析技術及びそれらの分析に用いる食品成分の標準品等を規格化すること。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項

ア 関連機関等と定期的な情報交換の場を設け、社会的・行政ニーズを把握すること。

イ ホームページ等を通じて国民からのニーズを把握すること。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項

ア 国際栄養協力体制を充実強化し、特にアジア地域における国際貢献と学術的ネットワークの構築を行うことにより、国際社会における役割を果たすこと。

イ 産学連携推進機能の強化、寄附研究部門の充実等により、産学連携をより一層進め、研究成果の社会への還元と知的財産の獲得を目指すこと。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項

栄養情報担当者(以下「NR」という。)が社会的役割を果たすことができるよう、研修や情報提供等を通じてその質的向上を図るとともに、実際の業務内容のモニタリング等を行い、制度や研究所の関与のあり方について検討すること。

3. 情報発信の推進に関する事項

- (1) 研究所として総合的な情報発信を行うための体制を強化し、対外的な業務の推進を図ること。
- (2) 研究所の活動状況に関する情報をホームページを介して広く公開すること。
- (3) 研究所の諸活動及び研究業績については、研究所報告やニュースレターの刊行及び電子メディアでの配信により公開すること。
- (4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示は、ホームページ等を活用し積極的にを行うこと。

第 3 業務運営の改善及び効率化に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 2 号の業務運営の効率化に関する事項は次のとおりとする。

1. 運営体制の改善に関する事項

- (1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡を密にし、執行体制を強化すること。
- (2) 研究企画及び評価に関わる機能及び体制の強化を図り、研究業務の包括的、計画的な実施を進めること。
- (3) 業務の確実な実施のため、各研究・業務に関する内部進行管理及び評価を行うこと。
- (4) 法人運営に関して透明性を確保するとともに、国民に向けての説明責任を全うするため、広報体制を強化し、迅速な情報公開に努めること。
- (5) 外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費節減や現況資源の有効利用を進めること。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項

- (1) 業務効率化の観点から、研究部組織体制の見直しを行い、その最適化を図ること。
- (2) 他機関との連携・交流を強化し、組織の活性化を目指すこと。

3. 職員の人事の適正化に関する事項

- (1) 重点的に行う研究及び法律に基づく業務に対して適切に職員を配置し、効率的に研究業務を行うこと。
- (2) 研究職員の個人評価の結果を昇級・昇任等、給与面に反映させること。
- (3) 研究職員の流動化計画に沿って原則公募制・任期制により採用を行い、研究者層の向上を図ること。
- (4) 事務職員についても適切に評価を行い、資質の向上と業務の効率化を図ること。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項

- (1) 業務の効率化を図るため、事務書類の簡素化、電子化、事務作業の迅速化を進めるとともに、定型的な業務でアウトソーシング可能なものについては外部委託を行うこと。
- (2) 事務職員については、研修会やマネジメントセミナー等を通じ、研究所経営への参加意識を高めるとともに、業務意識の高揚を図ること。
- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図ること。

5. 評価の充実に関する事項

- (1) 毎年度内部評価委員会において、主要な研究業務に関して内部評価を実施すること。
- (2) 第三者による外部評価委員会により、年度計画の事前及び事後評価を行うこと。
- (3) 評価に関する結果は、ホームページで公開すること。
- (4) 研究職員について自己点検・評価を行うとともに、できるだけ客観的な指標に基づく評価を毎年実施すること。

6. 業務運営全体での効率化

一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費は除く。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成 17 年度を基準として 10%以上の削減を達成すること。

人件費については、「行政改革の重要方針」(平成 17 年 12 月 24 日閣議決定)を踏まえ、平成 18 年度以降の 5 年間に於いて、国家公務員に準じた人件費削減の取組を行うこと。

併せて、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、給与体系の見直しを進めること。

業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間の最終年度までに、平成 17 年度を基準として 5%以上の削減を達成すること。

第 4 財務内容の改善に関する事項

通則法第 29 条第 2 項第 4 号の財務内容の改善に関する事項は、次のとおりとする。

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金の積極的獲得を図ること。
- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用及び研究成果の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の増加を図ること。

2. 経費の抑制に関する事項

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費も含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図ること。

- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の節減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費の削減を図ること。

第5 その他の業務運営に関する重要事項

通則法第29条第2項第5号のその他の業務運営に関する重要事項は、次のとおりとする。

(1) セキュリティの確保

情報セキュリティの強化と利用者への情報提供等の利便性の向上を図ること。

2. 独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画

独立行政法人通則法(平成 11 年法律第 103 号)第 29 条第 1 項の規定に基づき、平成 18 年 3 月 1 日付けをもって厚生労働大臣から指示のあった独立行政法人国立健康・栄養研究所中期目標を達成するため、同法第 30 条の規定に基づき、次のとおり、独立行政法人国立健康・栄養研究所中期計画を作成する。

平成 18 年 4 月 1 日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 渡邊 昌

(前文)

独立行政法人国立健康・栄養研究所(以下「研究所」という。)は、人々の健康・栄養状態及び QOL(生活の質)の向上への貢献という目的を踏まえ、短期的・中期的・長期的な視点から重点的に行う研究課題を選択するとともに、研究所の社会的役割を踏まえつつ、独自性の高い研究や将来に向けて発展が期待される萌芽的・創造的な研究の推進に努める。

第 1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 重点調査研究に関する事項を達成するための措置

研究所の独自性を発揮するとともに、厚生労働省における健康づくり施策に必要な科学的知見を蓄積し、発信することを目的として、以下の分野に特化・重点化して研究を行う。

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

運動・身体活動による生活習慣病の一次予防、食事と遺伝的因子の相互作用の解明並びに運動と食事とによるテーラーメイド予防法に関して、ヒトを対象とした試験、動物や細胞等を用いた実験を行う。特に糖尿病及びメタボリックシンドロームの一次予防に資する調査及び研究に特化・重点化する。

a 運動・身体活動による生活習慣病予防、運動と食事指導の併用を行った場合の効果等について、実験的、疫学的な調査及び研究を行う。これにより食事摂取基準、運動基準等を作成するための科学的根拠の提示を行う。

b 遺伝子改変動物を用いて、運動や食事指導によってメタボリックシンドローム及び生活習慣病がいかにかに予防されるのかを、遺伝子解析等による分子レベルでの機序解明を試み、運動と食事指導による生活習慣病のテーラーメイド予防法の開発に資する科学的根拠を提示する。

c ヒトを対象として、基礎代謝量と遺伝素因の相互作用や遺伝子多型と各栄養素摂取量、身体活動量等との関係を明らかにし、生活習慣病発症の遺伝、環境リスクの相互関係を解明する。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究

日本人の食生活の多様性を科学的に評価するための指標及び調査手法を開発し、それが健康に及ぼす影響について疫学的な調査及び研究を行う。特に日本人の食事摂取基準等の科学的根拠となるデータの蓄積と「健康日本 21」の評価への応用という点を重点目標とする。

a 栄養に関する実践において最も基本的かつ重要な指針である「食事摂取基準」について、平成 20 年度に予定される改定作業に向け、系統的レビューを平成 19 年度まで重点的に行う。また、今後の改定に向けて、ヒトを対象とした疫学的研究及び基本的情報の収集等を継続的に行う。

b 「健康日本 21」推進のためには、効果的な運動・食事指導プログラムの開発と普及や、国及び地方自治体での適切な指導効果の評価の実施等が重要であることから、これらの手法の開発、国民健康・栄養調査の機能強化及びデータ活用に資する検討を行う。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

「健康食品」に含まれる食品成分の有効性及び健康影響に関して、実社会における使用実態等を把握するとともに、ヒトに対する影響を評価する手法を開発する。その結果を幅広く公開し、「健康食品」に関わるリスクコミュニケーションに資するデータベースの更新及び充実を継続して行う。

a 保健機能食品等の健康志向に基づく食品の使用実態等の情報を収集・把握し、栄養表示及び健康表示の側面から、健康影響について調査検討する。

また、栄養素以外の食品成分から広く健康影響を持つ食品素材をスクリーニングして、そのヒトにおける有効性評価について細胞モデル及び動物モデルを用いて検討する。

b 「健康食品」に関する正しい知識の普及と健康被害の未然防止並びに拡大防止を目的に、公正で科学的な健康食品の情報を継続的に収集・蓄積し、幅広く公開する。

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 研究所の研究能力を向上させ、将来、その応用・発展的な展開を可能とするために、関連研究領域における基礎的・独創的・萌芽的研究を行う。

イ コホートを設定し、介入研究による栄養教育の成果を研究する。食育及び栄養ケアマネジメントに関

して、行政、他機関と協力してエビデンス作りを図る。また、管理栄養士等保健従事者の教育及び情報の提供方法を研究する。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

調査及び研究の成果の普及を図るため、学術誌への学術論文の投稿、シンポジウム、学会等での口頭発表を行う。

これらについては、中期目標期間内に、学術論文の掲載を250報以上、口頭発表を750回以上行う。

なお、口頭発表は、海外においても積極的にを行う。

イ 知的財産権の活用

調査及び研究の成果については、それらが知的財産につながるかどうかのスクリーニングを行い、中期目標期間内に20件以上の特許出願を行う。

取得した特許権の実施を図るため、特許権情報のデータベースをホームページ上に公開する。

また、非公務員化の利点を活用し、研究所が所有する知的財産の活用、又は所有する情報等を用いた共同研究を民間企業及び大学等と積極的に行うこととし、毎年2件以上の増加を目標とする。

ウ 講演会等の開催

健康・栄養関連の専門家向けのセミナー、幅広い人々を対象とした講演会等をそれぞれ年1回以上開催し、調査及び研究の成果を社会に還元する。

また、関係団体が実施する教育・研修プログラムへの職員の派遣を積極的に推進する。

一般及び専門家からの電話、メール等による相談を受けるとともに、それらの相談に適切に対応する。

エ 開かれた研究所への対応

幅広い人々に研究所の業務について理解を深めてもらうことを目的に、年1回オープンハウスとして研究所を公開する。

また、健康と栄養に興味を抱かせ、将来、栄養学研究を担う人材の育成に資するよう、「総合的な学習の時間」による中学・高校生等の見学を積極的に受け入れる。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

ア 研究・業務の効率的な実施という観点から、研究員、研究補助員の配置を戦略的に行う。

研究所として重点的に実施すべき調査及び研究並びに法律に基づく業務については、研究業務費を適切に配分し、確実な業務の執行に努める。

イ 民間企業、大学、他の研究機関等との間で従前から実施している共同研究に加え、新たな共同研究等を積極的に推進するため、民間企業、大学等へ研究所研究員を派遣するとともに、資質の高い研究員を受け入れる。

ウ 連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員を年間20名程度受け入れ、研究所が所有する情報・技術等を提供するとともに、研究員を広く大学院や関係機関等に年間5名程度派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

また、国内外の若手研究員等の育成に貢献するため、博士課程修了者、大学院生、他機関に属する研究員等を継続的に受け入れるための体制の充実を図る。また、連携大学を増やし、兼任教授の派遣を行うとともに、若手研究員の指導・育成を行うため、求めに応じ、研究所研究員を他機関へ派遣する。

エ 施設・設備について、自らが有効に活用するとともに、「独立行政法人国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に基づき、大学、他研究機関による共同研究等での外部研究者等の利用に供する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

ア 国民健康・栄養調査の集計事務については、政策ニーズに対応した迅速かつ効率的な集計を行う。具体的には、当該年度の集計事務を調査票のすべてを受理してから7ヶ月を目途(ただし、調査項目に大幅な変更が生じない場合に限る。)に行う。

また、外部委託、高度集計・解析システムの活用等により、効率的な集計を行うことにより、経費の削減を図る。

さらに、都道府県等が行う健康・栄養調査に対する支援を含めて関連する技術的な事項について、研究所がより積極的に対応する。

特に、平成22年度に行われる都道府県等健康増進計画の最終評価に向けて、調査結果の活用、評価手法等について、平成20年度までに重点的に技術支援を行う。

イ 厚生労働省が収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の試験業務を的確かつ迅速に実施する。

特別用途食品の許可に係る試験業務について、分析技術が確立している食品成分の試験業務は、検体の受理から試験の回答までを2ヶ月以内に行うことを目指す。

また、分析技術の確立していない特定保健用食品の関与成分等の新たな食品成分への技術的対応については、他登録試験機関での応用も可能な分析技術の規格化及び当該食品成分の標準品の開発の実現を図る。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

ア 健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等から直接的に研究所に対する要望等を伺う機会を年6回程度設け、社会的ニーズを把握する。さらに、業務関連行政部局との間で、定期的な情報及び意見を交換する場を設け、行政ニーズを把握する。

また、国、地方自治体、国際機関等より、専門的な立場からの技術的な協力、指導等の求めには積極的に応じて研究員を派遣し、研究所における調査及び研究の成果が適切に施策等に反映できるよう努める。

イ 研究所に対する意見、要望等をホームページやセミナー等の参加者を通じて把握し、その内容を検討

し、可能な限り業務に反映させる。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア諸国との間で、栄養調査、栄養改善及び健康づくり等に関する共同研究において中心的な役割を果たすとともに、WHO 西太平洋地域における協力センターの設置(平成 19 年度を目途)に向けての準備を行う。

また、研究者養成及び共同研究の促進を図るため、「国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業」により、年間 2 名程度の若手研究者に研究所での研修機会を提供するとともに、アジア地域の研究者を交えたシンポジウムの開催等を行い、アジア地域における栄養学研究基盤の強化に寄与する。

イ 民間企業、大学等の複合的な連携を強化するとともに、寄附研究部門の充実を図る。

これにより、研究所の研究成果と社会ニーズの橋渡し、新たな展開・応用を図るとともに、知的財産の獲得を積極的に行う。

(4) 栄養情報担当者(NR)制度に関する事項を達成するための措置

栄養情報担当者(以下「NR」という。)が、保健機能食品等の利用に関して、消費者に適切に情報を提供し、消費者が気軽に相談できる者となれるよう、研修や情報提供等を通じてその質的向上を図る。

また、中期目標期間開始より 3 年以内に、NR の実際の業務内容、社会でのあり方についてモニタリングを行う。この結果に基づき、制度のあり方や研究所の係わりについて検討を行い、中期目標期間終了までに結論を得る。

NR 事務業務について、効率的かつ確かな業務が実施できるよう見直しを行う。また、外部委託が可能な業務については、アウトソーシングを行う。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所として総合的な情報発信を行うとともに、対外的な業務の推進を図るための組織整備を行う。

(2) ホームページに研究所の活動状況を積極的に配信し、ホームページの掲載内容をより充実させる。ホームページアクセス件数は、中期目標期間中、毎年 50 万件程度を維持させる。

(3) 研究所の諸活動及び研究業績については、毎年度 1 回研究報告としてとりまとめるとともに、最新の研究成果やトピックス等を紹介したニュースレターを年 4 回刊行する。

また、これらについては、ホームページ上で公開するとともに、電子メディアでの配信も行う。

(4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示は、ホームページ等を活用し積極的に行う。

第 2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所の意思決定と運営を機動的かつ効率的に行うことができるよう、役員組織と研究部門及び事務部門との間の連絡調整を密にし、執行体制を強化する。

また、研究所運営に対する研究所職員の意識を高めるため、研究所運営に関する必要な情報の共有化を図る。

(2) 研究部門間での連携を強め、異なる研究分野からの情報や研究手法を積極的に利用して戦略的な事業の立案・実施を図る。

(3) 調査及び研究業務の効率的かつ確実な推進を図るため、所内報告会等により各業務の進捗状況を把握し、適切な評価を行い、その結果を計画的・効率的な業務の遂行に反映させる。

また、所内イントラネットを活用し、業務の進捗状況管理等の効率化を図る。

(4) 独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律(平成 13 年法律第 140 号)に則り、積極的な情報公開を行う。

(5) 研究所の経営基盤の安定化のため、外部資金の獲得に積極的に取り組むとともに、経費の節減や研究所の所有する設備等の有効利用を進める。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 研究所が中期計画の中で重点的に行う調査及び研究並びに法律に基づく業務に関して、業務量や集成的に遂行すべき時期等を勘案しながら研究及び業務チームを組織する。

非公務員型の利点を生かして柔軟に組織の見直し・改編を行うこととし、従来の部体制から中期目標に掲げる業務を行うためのプログラム等を設け、各々が独立した形での業務運営を行う。

また、組織の見直し・改編後、毎年、その効果を検証する。

(2) 民間企業、大学等との連携・交流を積極的に行い、研究員の交流を進め、人材の養成と資質の向上に努めることにより、組織の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点的に行う研究及び法律に基づき実施すべき業務については、業務運営の効率性を勘案しながらも、必要な人員を十分に担保した上で組織体制を構築する。

(2) 非公務員型への移行のメリットを最大限に活かした柔軟な人事システムを構築し、研究職員の個人評価の結果を昇級・昇任等の処遇及び給与面に反映させる。

(3) 研究員の採用に当たっては、「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、原則として公募制、任期付の採用を行う。研究所が重点的に推進する調査及び研究業務が着

実に成果が挙げられるよう、資質の高い人材を広く求める。また、資質の高い人材については、任期中の実績評価に基づき、任期を付さない形で採用を行う。

さらに、外国人及び女性研究者が業務に従事しやすい環境づくりを推進し、外国人及び女性職員の採用も可能な限り行う。

- (4) 事務職員の質の向上を図るため、研究員と同様に評価を行うこととし、その評価システムとして自己評価による評価を行い、その結果を昇給・昇任等に反映する。

※人事に関する指標

期末の常勤職員数は、期初の100%を上限とする。

- (参考1) 期初の常勤職員数 47名
 期末の常勤職員数 47名(以内)

- (参考2) 中期目標期間中の人件費総額
 2,335百万円(見込)

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過勤務手当、休職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

- (1) 研究組織体制の見直しに併せて、業務の効率化を図るため、事務部門の組織を見直す。この際、事務部門に研究員の研究成果の積極的な活用や、対外的な業務を担う業務課(仮称)を設け、研究員が最大限の成果を得られるようにする。

また、権限の明確化及び決裁プロセスの短縮化により、意志決定の迅速化を図るとともに、事務作業の迅速化、事務書類の簡素化、電子化等を進める。さらに、定型的な業務でアウトソーシング可能なものについては外部委託を進める。

- (2) 事務職員については、研究所で働く者として必要な法令・知識を習得するための各種研修会やセミナー等への参加を充実させ、職員が働きやすく自己能力を最大限発揮できるような職場環境の整備を推進する。

これにより、研究所経営への参加意識を高め、業務の質の向上及び効率化の一層の推進を図る。

- (3) 業務の効率化を図るため、業務・システムの最適化を図る。

5. 評価の充実に関する事項を達成するための措置

- (1) 毎年度内部評価委員会を開催し、主要な研究業務に関して、内部評価を実施し、研究業務の確実な実施及び効率化に資する。

- (2) 柔軟かつ競争的で開かれた調査及び研究環境の実現や経営資源の重点的・効率的配分に資するため、外部の専門家等の評価者による外部評価を毎年度2回程度実施する。

- (3) 内部及び外部評価結果は、ホームページ上で公表するとともに、組織や施設・設備の改廃等を含めた予算・人材等の資源配分に反映させる等、調査及び研究活動の活性化・効率化に積極的に活用する。

- (4) 研究員については、自己点検・評価を行うとともに

に、可能な限り客観的な指標に基づき評価を行う。また、理事長は自ら全研究員との面談を行い、適切かつ公平な評価を行う。

さらに、評価の結果は各職員にフィードバックするとともに、所内イントラネットを活用して、各研究の研究業績を公開し、評価の透明性の確保に努める。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

一般管理費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費を除く。)については、中期目標期間中、毎年度、2%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成17年度を基準として10%以上の削減を達成する。

人件費については、「行政改革の重要方針」(平成17年12月24日閣議決定)を踏まえ、中期目標期間の最終年度までに平成17年度を基準として5%以上の削減を達成する。

併せて、国家公務員の給与構造改革を踏まえ、給与体系の見直しを行う。

業務経費(運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。)については、中期目標期間中、毎年度、1%以上削減し、中期目標期間の最終年度までに、平成17年度を基準として5%以上の削減を達成する。

第3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

- (1) 運営費交付金以外の競争的研究資金の積極的な獲得を図り、外部研究資金、その他の競争的資金の募集等に積極的に参加し、その増加に努める。

- (2) 各種研究から生じる知的財産(特許権等)の有効活用並びに研究成果の社会への還元を目的とした出版等を行うことにより、自己収入の確保につなげる。

また、「独立行政法人国立健康・栄養研究所施設・設備等利用規程」に基づき、地域住民等への施設開放を行い、研究所の設備等の効率的な利用に努め、併せて自己収入の増加に寄与する。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

- (1) 各部門において、常勤職員の人件費を含めたコスト管理を四半期毎に行い、効率的な資金の運用とコスト意識の向上を図る。

- (2) 研究業務の集約化、アウトソーシング等により人的資源の有効活用並びに経費の削減を図るとともに、業務運営に係る経常的経費についても、法令集の追録購入中止等により削減を図る。

第4 予算(人件費の見積りを含む。)、収支計画及び資金計画

1. 予算

別紙1のとおり。

2. 収支計画

別紙 2 のとおり。

3. 資金計画

別紙 3 のとおり。

第 5 短期借入金の限度額**1. 限度額**

100,000,000 円

2. 想定される理由

- ア 運営費交付金等の受入れの遅延等による資金の不足
- イ 予定外の退職者の発生に伴う退職手当の支給
- ウ その他不測の事態により生じた資金の不足

第 6 重要な資産を譲渡、又は担保に供するときは、その計画

該当なし。

第 7 剰余金の使途

- ア 研究環境の整備に係る経費
- イ 職員の資質向上に係る経費
- ウ 知的財産管理、技術移転に係る経費 等

第 8 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置**(1) セキュリティの確保**

情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

(2) 施設及び設備に関する計画

該当なし。

(3) 積立金処分に関する事項

該当なし。

(別紙1)

中期計画（平成18年度～平成22年度）の予算

(単位：百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業収入	189
寄附金収入	160
雑収入	21
計	5,359
支出	
人件費	2,908
うち 基本給等	2,606
退職手当	302
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	458
業務経費	825
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	65
食品収去試験等業務	59
栄養疫学プログラム	88
健康増進プログラム	85
臨床栄養プログラム	39
基礎栄養プログラム	61
食品保健プログラム	49
創造的研究	95
国際栄養協力事業	49
健康食品安全情報ネットワーク事業	126
健康栄養情報事業	109
受託経費	1,167
特別用途食品表示許可試験費	60
受託経費	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
計	5,359

〔人件費の見積り〕 期間中総額2,335百万円を支出する。

ただし、上記の額は、役員報酬並びに職員基本給、職員諸手当、超過

勤務手当、教職者給与及び国際派遣職員給与に相当する範囲の費用である。

〔運営費交付金の算定ルール〕：別紙1-1

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 1-1)

運営費交付金の算定ルール

1. 平成 18 年度

平成 18 年度は、平成 17 年度運営費交付金の額に各経費にかかる効率化係数に基づき算出し、非公務員化に伴う新たな経費を加え、合理化額を減額し算出した。

2. 平成 19 年度以降

次の算定式による。

$$\text{運営費交付金} = \text{人件費} + \text{一般管理費} + \text{業務経費} + \text{特殊要因} - \text{自己収入}$$

○ 人件費 = 当該年度基本給等 (A) + 退職手当 (S)

A : 基本給、諸手当、共済組合負担金等の人件費 (退職手当を除く) をいい、次の式により算出する。

$$A = \{[(P1 \times \alpha \times \beta) + (P2 \times \beta) + P3] \times \gamma 1\} + (P4 \times \gamma 2)$$

A : 当該年度基本給等

P1 : 前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けるもの
(労働保険料を除く)

P2 : 前年度の基本給中給与改定の影響を受けるもの

P3 : 前年度の基本給中昇給及び給与改定の影響を受けないもの

P4 : 労働保険料

α : 運営状況等を勘案した昇給原資率

β : 運営状況等を勘案した給与改定率

$\gamma 1$: 効率化係数 (人件費 (労働保険料を除く))

$\gamma 2$: 効率化係数 (労働保険料)

○ 一般管理費 = (一般管理費 (B) $\times \gamma 3 \times \delta$)

B : 前年度一般管理費

$\gamma 3$: 効率化係数 (一般管理費)

δ : 消費者物価指数

○ 業務経費 = (業務経費 (C) $\times \gamma 4 \times \delta$)

C : 前年度業務経費

$\gamma 4$: 効率化係数 (業務経費)

δ : 消費者物価指数

○ 特殊要因 = 法令等の改正等に伴い必要となる措置又は現時点で予測不可能な事由により発生する資金需要であって、毎年度の予算編成過程において決定する。

○ 自己収入 = 知的財産権収入、印税収入等の直接事業を実施しない収入について、過去の実績を勘案し決定する。

[注記]

1. α 、 β 、 δ については、各年度の予算編成過程において、当該年度における計数値を決める。

2. 中期計画全般にわたる予算の見積りに際しては、

① 人件費のうち、退職手当については、定年退職者見込みによる。

② α 、 β 、 δ については、伸び率を 0 と仮定した。

③ $\gamma 1$ (人件費の効率化係数) については、節減額 5% 分を▲1.02% と仮定した。但し、労働保険料については、節減額 5% 分を平成 19 年度から 4 年で節減することから▲1.35% と仮定した。

④ $\gamma 2$ (一般管理費の効率化係数) については、節減額 10% 分を▲2.1% と仮定した。

⑤ $\gamma 3$ (業務経費の効率化係数) については、節減額 5% を▲1.02% と仮定した。

⑥ 自己収入額については、平成 18 年度については平成 16 年度実績と同額とし、平成 19 年度以降は平成 17 年度の実績見込を基準とし、毎年一定額を増額させ算出した。

(別紙2)

平成18～22年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	5,444
經常費用	5,444
人件費	2,908
うち 基本給等	2,606
退職手当	302
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	458
業務経費	825
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	65
食品収去試験等業務	59
栄養疫学プログラム	88
健康増進プログラム	85
臨床栄養プログラム	39
基礎栄養プログラム	61
食品保健プログラム	49
創造的研究	95
国際栄養協力事業	49
健康食品安全情報ネットワーク事業	126
健康栄養情報事業	109
受託経費	1,167
特別用途食品表示許可試験費	60
受託経費	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
減価償却費	85
収益の部	5,444
運営費交付金収益	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
雑収入	21
資産見返物品受贈額戻入	2
資産見返運営費交付金戻入	83
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

〔注記〕当法人における退職手当については、役員退職手当支給基準及び国家公務員退職手当法（昭和28年法律第182号）に準じて支給することとなるが、その全額について運営費交付金を財源とするものと想定している。

（注）単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 3)

平成 18～22 年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	5,359
業務活動による支出	5,359
投資活動による支出	0
資金収入	5,359
業務活動による収入	5,359
運営費交付金による収入	4,170
手数料収入	60
受託収入	758
栄養情報担当者事業経費	189
寄附研究事業費	160
雑収入	21
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

3. 独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画

平成20年度の業務運営について、独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第31条第1項の規定に基づき、独立行政法人国立健康・栄養研究所年度計画を次のとおり定める。

平成20年3月31日

独立行政法人国立健康・栄養研究所
理事長 渡邊 昌

第1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する事項を達成するための措置

1. 研究に関する事項を達成するための措置

(1) 重点調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 生活習慣病予防のための運動と食事の併用効果に関する研究

a 運動・身体活動による生活習慣病予防、運動と食事指導の併用を行った場合の効果等についての研究を行う。

具体的には、①食事調査を行った中年男女を対象とした運動基準2006で示された身体活動量、運動量、体力基準の妥当性について検討するための大規模無作為割り付け介入研究、②レジスタンストレーニングが生活習慣病危険因子と体力に及ぼす影響に関する研究、③行動科学的アプローチ等によるメタボリックシンドロームリスク低減を目的とした効果的な食事と運動介入に関する研究、④1日当たりの身体活動量や食事として摂取すべきエネルギー(エネルギー必要量)を、加速度計や質問紙を用いて正確に評価する方法を確立するための研究を行う。

b 高脂肪食が、糖尿病・メタボリックシンドロームを発症するメカニズムを解明するために、平成19年度に樹立した遺伝子操作動物由来膵β細胞株を用いて膵β細胞増殖機構の分子メカニズムを検討する。また、脂質過剰摂取生活習慣病モデル動物のインスリン抵抗性において血管内皮細胞の機能やインスリンシグナルが果たす役割について、その分子メカニズムを検討する。

運動の肥満・糖尿病予防機序、栄養素による脂肪肝・肥満発症機序とそれらの予防法、エネルギー摂取制限によって生じる生体適応及び適応破綻の機序を明らかにする。

c 罹患同胞対法を用いた全ゲノム解析で2型糖尿病感受性領域としてマップした遺伝子で同定には至っていない領域についてハプロタイプブロック・ハプロタイプ標識SNPの情報を利用した解析を行って、2型糖尿病感受性遺伝子を同定する。

今までに明らかにした2型糖尿病感受性遺伝子で、その機能が未知のものについて、遺伝子欠損マウスを作製し解析を行う。

イ 日本人の食生活の多様化と健康への影響に関する栄養疫学的研究

a 厚生労働省が実施する日本人の食事摂取基準(2010年版)の策定に協力する。研究所内外の学識

者によるワーキンググループで、基礎資料の収集と系統的レビュー及びそのデータベース化を図るとともに、実際の策定作業にレビューの結果が反映されるよう、厚生労働省および策定検討会に必要な十分な資料提供・技術支援を行う。

日本人の食事摂取基準の策定に資する基礎資料を得るための、ヒトを対象とした栄養疫学研究及び食事摂取基準の活用に関する調査研究を実施する。

b 国や地方自治体の要請や必要性に応じて、国民健康・栄養調査の機能強化やデータ活用に関する技術支援を実施する。

ウ 「健康食品」を対象とした食品成分の有効性評価及び健康影響評価に関する調査研究

a 食品からの抗酸化物質の摂取量と生活習慣病の発症リスクなどの因果関係を明らかとする研究の第一段階として、多くの食品について抗酸化価の測定を行い、結果をまとめたデータベースを構築する。また、ORACアッセイとHPLCポストカラム法を組み合わせた食品中抗酸化物質の一斉分析法を用い、食品中の有用な抗酸化物質の探索を行う。

食品由来の生理活性物質の強化の可能性を評価すると同時に、細胞接着因子の遺伝子機能を指標にした複数の評価系で、慢性疾患の補完・代替医療成分として有望な食品由来の生理活性成分の絞込みを行う。

b 科学的根拠に基づく最新の健康食品情報並びに国内外の危害情報を継続的に蓄積し、ホームページ上で公開する。平成20年度は、特に既に掲載している情報の見直し、新たに特別用途食品の製品情報を公開するための準備作業を行う。また、健康食品全般として情報収集と提供をより効果的に実施するための関連機関との連携について重点的に対応する。

(2) 重点調査研究以外の調査研究に関する事項を達成するための措置

ア 独創的で、次期中期計画において発展的に展開し得る研究課題のシーズとなるような研究を、所内公募による競争的な環境の下で行う。

その際、外部の専門家を含めた事前・事後の評価を行い、研究の質を担保する。

イ 生涯を通じた健康づくりの一環として、栄養教育の面から、食育、メタボリックシンドローム、高齢者の食介護に関する研究を行う。

人間ドック受診者を対象に肥満や糖尿病リスク因子抽出のための大規模コホート研究を進める。

効果的な食育展開のための行動科学的アプローチ

の仕方、環境整備、評価法について研究する。

日本栄養士会など関連する職能団体や学会等との協調により卒業教育のあり方について検討する。

(3) 研究水準及び研究成果等に関する事項を達成するための措置

ア 論文、学会発表等の促進

研究成果については、できるだけ国際的な場での発表を目指し、査読付き学術論文 50 報以上、口頭発表 150 回以上を行う。

そのため、優れた研究成果の発表に対しては、競争的な事前審査により課題を選定し、海外渡航費の付与を行う。

イ 知的財産権の活用

知的財産権取得に適した研究について、その成果の学会及び論文発表の前に掘り起こしを行い、年間約 5 件程度の特許出願を行う。

特許に関わる情報を、ホームページ上に公開し民間企業等に積極的に技術の紹介を行う。また、民間企業との共同研究を年間 12 件程度行う。

ウ 講演会等の開催

一般向けの公開セミナー（第 10 回）を、平成 21 年 2 月 28 日に東京で開催する。研究で得られた成果を社会に還元するため、専門家向けのセミナーを他機関との連携による開催を含めて 2 回程度行う。

管理栄養士・栄養士等の研修の講師として職員を積極的に派遣するとともに、研修の企画等に対して支援を行う。

外部からの相談・問合せに効率的に対応するため、頻度の高い質問等については、FAQ としてとりまとめを進め、平成 20 年度は食事バランスガイドに関する FAQ を整備しホームページ上で公開する。

管理栄養士等を対象に国際学会（ISAK）認定の形態計測講習会を開催する。

エ 開かれた研究所への対応

平成 20 年 9 月 27 日に、オープンハウスとして、運動実験施設等における体験コーナーや食事・体力診断等を含めて、研究所の研究・業務内容をより多くの人に身近に知っていただけるよう努める。

中学・高校生等の見学にも積極的に応じ、健康や栄養にかかわる知識や関心の普及を図る。

(4) 研究実施体制等の整備に関する事項を達成するための措置

ア 法律に基づく業務及び重点調査研究を確実に実施するために、特別研究員及び研究補助員の重点配置を行う。

事務部の課・係横断的にチームを編成することで、多様な研究業務内容に適応した柔軟な運用と、事務手続きステップの効率化及び研究部門と事務部門の意識及び情報の共有を図る。

運営費交付金については、各研究・業務の進捗状況及び費用、並びに新たに生じた課題等を勘案しながら、配分の調整を行う。

イ 民間企業、大学、他の研究機関等との間で、研究員の相互交流、研究技術の交換、施設・設備の有効活用を行う。また、当研究所の研究員を大学等へ積

極的に派遣し、研究ネットワークの拡大を図る。

ウ 連携大学院、民間企業及び各種研究機関等から研究員を年間 10 名程度受け入れるとともに、研究員を大学院や関係機関等に年間 5 名程度派遣し、研究所の持つ情報・技術等を社会に還元する。

お茶の水女子大学、東京農業大学、女子栄養大学、早稲田大学との連携大学院について、兼任教授の派遣を行い、お互いの強みを活かした研究協力を行う。

また、流動研究員制度や連携大学院制度を活用し、博士課程修了者等の若手研究者や大学院生を積極的に受け入れることにより、将来の研究人材の育成に資するとともに、研究所の研究機能の強化を図る。

エ 施設・設備については、各プログラムで共有して使用する測定室、RI 室、動物飼育室、運動トレーニング室等が老朽化してきたため、効果的に研究が出来る環境を整備していく。

「独立行政法人 国立健康・栄養研究所設備等利用規程」に従い、他研究機関の研究者・運動指導者の運動介入研究による健康増進効果に関する共同研究を実施する。

2. 法律に基づく業務、社会的・行政ニーズ、国際協力等に関する事項を達成するための措置

(1) 健康増進法に基づく業務に関する事項を達成するための措置

ア 国民健康・栄養調査の集計業務については、正確かつ効率的な集計を通して、結果発表までの期間の迅速化を図るとともに、調査対象者への結果の返却を速やかに行うように努める。また、データ収集に携わる行政の担当者等に対して、技術講習、情報提供、標準的な調査ツールの提供などを通じて、積極的な技術支援を行う。

イ 厚生労働省が収去した特別用途食品及び栄養表示がなされた食品の試験業務及び特別用途表示の許可などを行うに当たり、申請者の申請に基づく試験の業務を的確、迅速に実施する。特定保健用食品関与成分の分析法、標準品の妥当性等を検討する。試験検査機器の有効利用及び整備を強化して食品試験業務の適性かつ効率的な実施を図る。

汎用分析機器を用いた食物繊維、ペプチド類、糖アルコール、フラボノイド類、脂質成分等に関する測定技術の向上及び分析値の精度管理を強化し、信頼性の向上を図る。

(2) 社会的・行政ニーズへの対応に関する事項を達成するための措置

ア 社会的ニーズを把握するため、健康・栄養に関連する団体、大学、民間企業等との意見交換会を年 6 回程度設ける。特に、研究所は国民生活に密着した分野を対象としており、国民に成果を還元することが重要であることから、現場に近い人々（管理栄養士等）から、具体的なニーズ等の把握に努める。

行政ニーズを適時把握するために、厚生労働省生活習慣病対策室、新開発食品保健対策室、内閣府食育推進担当等と情報及び意見交換を行う。

また、国、地方自治体、国際機関等からの技術的な協力依頼に応えるために、各種審議会、検討会等に専門委員として職員を派遣し、行政ニーズの把握

を図る。

イ ホームページ上で意見、要望等を収集するために試験的に公開したコミュニケーションチャンネル（『健康・栄養フォーラム』）について引続きセキュリティ等のチェックを進め、正式公開する。

(3) 国際協力、産学連携等対外的な業務に関する事項を達成するための措置

ア アジア諸国との間で、栄養学研究の発展につながる共同研究及び人材育成を積極的に行う。研究交流を推進する観点から、国際栄養協力若手外国人研究者招へい事業を活用し、年間1名（ベトナム1名を予定）の若手研究者を受け入れる。また、これまで受け入れた研修生との共同研究を推進する。

WHO、CODEX等との協力関係を強化し、関連する会議に研究員を派遣する。

わが国の栄養、運動施策上の重要なガイドラインについて、ホームページ上に英語での情報発信に努め、海外からのニーズに的確かつタイムリーに応える。

イ 食品開発や保健指導等に関連する民間企業との共同研究、委託研究等を通じて、研究の成果や研究所の持つノウハウを具体的な商品やサービスにより、社会に還元できるよう努める。

(4) 栄養情報担当者（NR）制度に関する事項を達成するための措置

NRは、平成19年度までに2,682名を輩出している。NRのスキルアップを図るとともに、社会的なニーズに対応したトピックスを含めた、最新の情報提供等を行うため、全国6カ所において研修会を実施する。

NR認定試験等は、外部有識者の協力の下、的確かつ公正に実施する。また、管理栄養士養成施設等において、NR養成講座指定への要望が多いことから、講座の質の向上に努める。

また、NR制度のあり方については、平成19年度に引き続き検討を行うとともに、平成20年度中にとりまとめる。

3. 情報発信の推進に関する事項を達成するための措置

(1) 情報センターにおいて、引き続き、所内各プログラムにおける研究成果及び研究所内外の関連情報を集約・加工し、国民が適切な運動・食生活を実践するために必要な情報の提供を行う。

(2) コンテンツマネジメントシステム、メールマガジン等の運用により、研究所の活動内容・成果等を積極的に配信するとともに、ホームページの内容全般について、最新情報の追加・更新を精力的に行う。

(3) 研究所の活動および研究業績を年1回研究報告として刊行する。

また、研究所のプロジェクト紹介や研究成果をわかりやすくまとめた、『健康・栄養ニュース』を年4回（季刊）刊行し、ホームページ上で公開するとともに、電子メディアでの配信も行う。

(4) 研究所の諸規程、職員の公募等、必要な情報開示は、ホームページ等を活用し積極的に行う。

第2 業務運営の改善及び効率化に関する事項を達成するための措置

1. 運営体制の改善に関する事項を達成するための措置

(1) 意思決定の迅速化を図るため、権限と責任を明確にした組織運営を行う。

人員や研究資源の配置を適正に行うことを含めて、研究所の重要な経営判断に関する審議は、役員及び各プログラムリーダー、事務部長等から構成される運営会議で行う。

研究成果が最大限挙げられるよう、各プログラムで行われている業務の特性を理解し、効率的、効果的な研究支援体制を作る。経営管理に関する理念と運営に関して、研究員の理解を促すとともに、管理部門と研究部門の間の情報の共有化を促進する。

研究及び技術的事項について、各プログラム相互の連携を強化するため、毎週プログラムリーダー会議を行う。

(2) 6プログラム及び2センター間において、専門領域が異なる研究者が、それぞれの研究内容及び成果を知るために、定期的な所内セミナーや研究交流会を通じて、活発な発表及び討議を行う。

また、プログラムリーダーは、各プログラムの活動内容、成果について、組織横断的で、より統合された研究に向けた企画立案を行う。

(3) 各プロジェクトにおける研究及び業務については、プログラムリーダー会議や運営会議において、報告を行う。また、定例セミナー等で各プロジェクトの進捗、成果を把握し、評価を行う。さらに、所内公開でプログラムリーダー（年2回）及び全プロジェクトリーダーからの報告会（年1回）を行う。

所内イントラネットを活用し、業務の進捗状況管理を行うとともに、各プログラム間、事務部門との情報の共有化を促進する。

(4) 独立行政法人等の保有する情報の公開に関する法律（平成13年法律第140号）に則り、文書を適正に管理し、積極的な情報公開を行う。

(5) 研究所の経営基盤の安定化を図るため、競争的研究資金や、受託研究など外部資金の獲得に積極的に取り組む。

また、経費の節減や研究所の所有する設備等の有効利用を進める。

2. 研究・業務組織の最適化に関する事項を達成するための措置

(1) 6プログラム及び2センターについては、各セクションにおいて、常勤職員の人件費を含めたコスト管理及び研究業務について、経営的な視点を併せ持ちながら運営を行う。

年度当初の組織は別紙1のとおりであるが、独立行政法人の整理合理化計画（平成19年12月24日閣議決定）に示された方向性を踏まえて、必要な見直し検討を行う。

特に、国際産学連携センター、情報センターについては、より効率的な事業実施のために、組織のあり方の検討や必要に応じての変更を行う。

(2) 国内外の民間企業、大学、他研究機関との研究協力を推進し、研究者の受け入れ及び研究所研究員の派遣を行う。それにより人材の養成と資質を向上させ、組織の活性化を図る。

3. 職員の人事の適正化に関する事項を達成するための措置

(1) 重点的に行う研究及び法律に基づき確実に実施すべき業務については、重点プロジェクトとして位置づけ、研究員、研究補助員等を適切に配置するとともに、外部の協力研究員の一層の活用を図る。

また、一部の職員への過重な負担とならないよう、研究・業務等の適正配分に努めるとともに、自主的な健康の維持・増進につながる職場環境づくりを目指す。

(2) 大学、民間企業等との多様な形態の連携が可能となるよう、起業も含めて、民間企業、団体等との兼業についても、研究所の目的、理念に合致したものについて積極的にいき、成果の社会還元を促進する。

また、各研究員の個人業績及び各プロジェクトの実績評価を、各個人の昇給・昇任等、給与面に反映させる。

(3) 「独立行政法人国立健康・栄養研究所における研究者の流動化計画」に沿って、原則公募制、任期付の採用を行う。

任期付研究員については、任期中の実績評価を厳密に行い、任期を付さない職員としての採用を検討する。任期付き研究員の採用にあたっては、流動化計画を図る一方、研究所における長期的な展望を考えるとデメリットもあることから、研究や業務の性質、行政及び社会的ニーズに応じて、柔軟な運用を行う。

女性研究員の採用を可能な限り行うとともに、研究業務に従事しやすい環境づくりとして、フレックスタイム制をフル活用するとともに、各種制度の活用を進める。

(4) 事務職員についても、自己評価を行うとともに、個人面接を行い、直近上司と総括上司の段階評価を実施する。評価の結果は、昇給・昇任等に反映させる。

4. 事務等の効率化・合理化に関する事項を達成するための措置

(1) 業務の効率化を図るため、意志決定の迅速化を図るとともに、権限と責任を明確にした組織運営を行う。

迅速な意志決定と柔軟な対応をとるため、各種事務手続きの簡素化、迅速化、電子化を図るとともに、業務を見直し、可能かつ適切な業務については、外部委託を進める。

(2) 事務職員の資質向上を図るため、業務上必要とされる知識（知的財産、安全管理、会計・契約等）の技術取得ができるよう、自己啓発や能力開発のための研修を行う。また、職員が働きやすく自己能力が最大限発揮できるよう、職場環境の整備を充実する。

(3) 業務の効率化を図るため、情報総括責任者（CIO）を中心に、業務・システムの最適化・効率化を図る。

5. 評価の充実に関する事項を達成するための措置

(1) プログラム及びセンターの報告会を年 2 回、全プロジェクトの報告会を年 1 回行い、それらを踏まえて中間及び年度の内部評価を実施する。中間評価については、年度途中の研究業務の見直しにより、効果的な実施につなげる。

(2) 外部有識者による評価委員会については、研究所の主要な研究業務の進捗状況、成果の社会へのアウトプ

ット、将来の発展性という観点から、また研究所の組織運営に関しては、特により良い研究環境の構築という視点から、評価を受ける。また、平成 21 年度計画については事前に評価を得る。

(3) 内部及び外部評価の結果は、ホームページ上で公開する。評価結果については、プログラム、プロジェクトリーダーの範囲にとどまらず、非常勤職員を含めた職員全員に結果を伝え、研究所に求められている方向性や課題等の共通理解を促し、研究及び業務の内容の改善などにつなげる。また、理事長等役員は、評価結果等を踏まえて、研究資源の配分等に反映させる。

(4) 各研究員においては、社会及び研究所で求められている自らの役割を十分認識した上で、当該年度における自らの研究及び業務の成果について、点検を行う。その際、可能な限り客観的な指標を整理・分析するために、所内イントラネットを活用した業績等の登録システムを活用する。

各研究員の評価は、主にプログラム内での十分な成果の達成という視点からプログラムリーダー及び理事長が行う。なお、任期付研究員については、任期中の実績評価を行い、その結果をその後の採用等に反映させる。

6. 業務運営全体での効率化を達成するための措置

一般管理費（運営費交付金を充当して行う事業に係るもの。人件費を除く。）については、光熱水料等の削減等に努め、平成 17 年度に比べて 6 % 以上の削減を図る。

人件費（退職手当及び法定福利費等を除く。）については、適正な人員配置に努め、平成 17 年度に比べて 3 % 以上の削減を図る。

業務経費（運営費交付金を充当して行う事業に係るもの）については、業務の効率化、コストの削減に努め、平成 17 年度に比べて 3 % 以上の削減を図る。

第 3 財務内容の改善に関する事項を達成するための措置

1. 外部研究資金その他の自己収入の増加に関する事項を達成するための措置

(1) 厚生労働省、文部科学省等の政府機関、科学技術振興機構等の機関が実施する公募型研究に研究課題の応募を積極的に行う。その際に、研究所の目的等を勘案し、競争力の高い研究課題を選択し、また、他の研究機関等との共同研究の中核となる課題を重視する。

健康・栄養に関する調査・研究及び、国、民間企業等の受託研究や業務については、研究所の目的やその後の発展性及び交付金事業として行う研究を勘案しながら、それらに合致するものについては積極的に受入、自己収入の増加に資する。

(2) 知的財産については、その出願や維持にかかる費用を勘案しながら、実施につながる可能性の高いものについて必要な維持を行い、自己収入につなげる。

また、研究成果等の社会還元を目的に出版（研究所監修による書籍、マニュアル、テキスト等）を行うことにより、自己収入の確保につなげる。

施設開放にあたっては、自己収入の確保という点だけでなく、ヒトを対象とした研究への参加、地域住民の健康づくりという視点を踏まえて検討を行う。

2. 経費の抑制に関する事項を達成するための措置

(1) 6つのプログラム、2つのセンターにおいて常勤職員の人件費を含めた業務費のコスト管理を四半期毎に行う。

その結果については、運営会議、役員会での分析を行い効率的な運用につなげる。

このようなマネジメントサイクルにより、研究員のコスト意識の向上を図る。

(2) 各プログラムにまたがる研究の実施や、施設整備、スペース等の共有利用により人的資源、コスト削減につなげる。

データ入力、検体の定期検査など人的コスト削減につながるものについてはアウトソーシングを進める。

また、契約にあたっては、原則一般競争入札を行う。

第4 予算（人件費の見積りを含む。）、収支計画及び資金計画**1. 予算**

別紙2のとおり

2. 収支計画

別紙3のとおり

3. 資金計画

別紙4のとおり

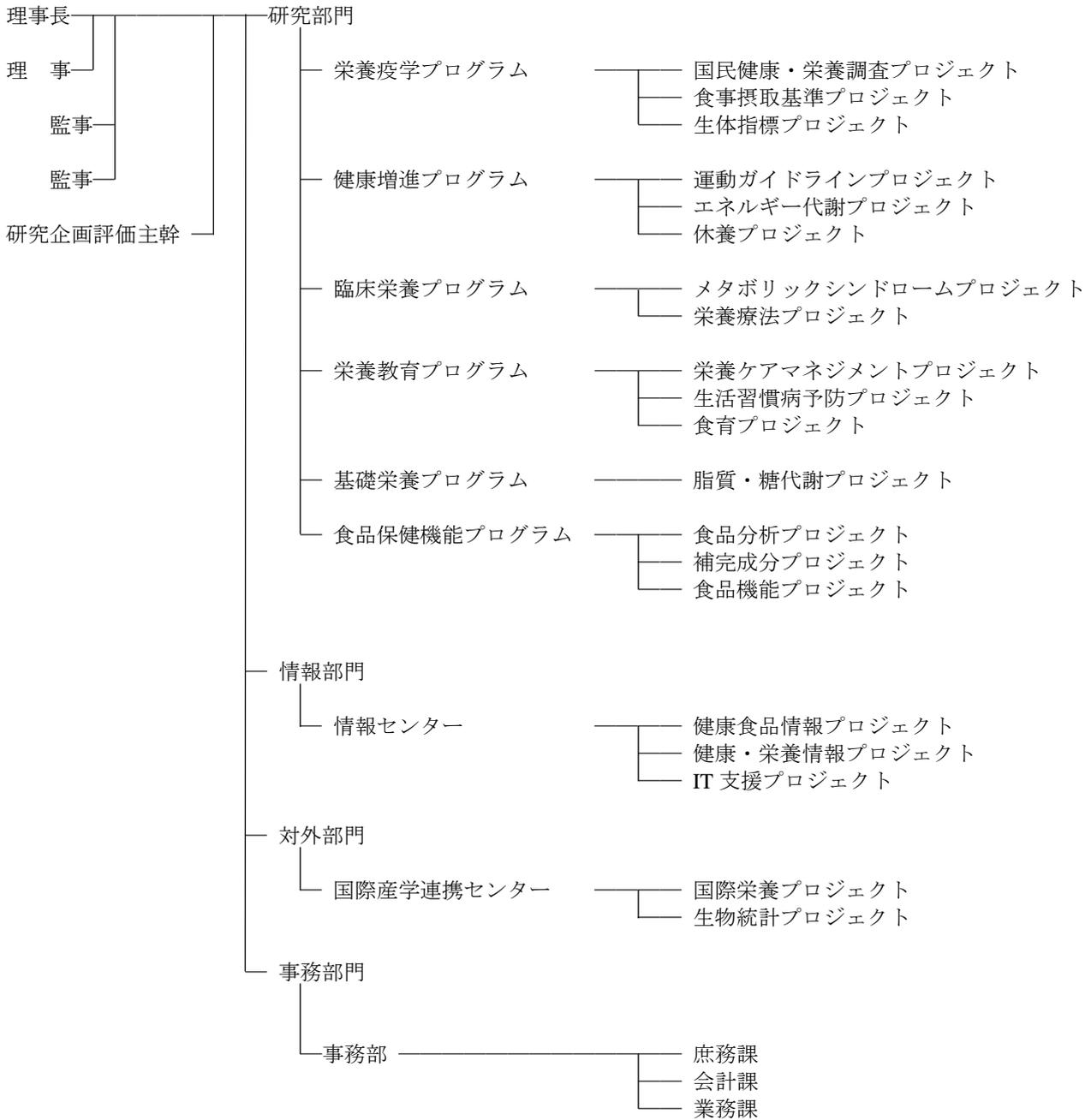
第5 その他の業務運営に関する重要事項を達成するための措置**(1) セキュリティの確保**

情報システムに係る情報のセキュリティの確保に努める。

第6 平成20年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

別紙5のとおり

(別紙 1)



(別紙2)

年度計画（平成20年度）の予算

(単位：百万円)

区 別	金 額
収入	
運営費交付金	791
手数料収入	10
受託収入	51
栄養情報担当者事業収入	42
雑収入	5
計	899
支出	
人件費	550
うち 基本給等	521
退職手当	29
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	89
業務経費	157
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	12
食品収去試験等業務	6
栄養疫学プログラム	17
健康増進プログラム	17
臨床栄養プログラム	8
基礎栄養プログラム	12
食品保健機能プログラム	10
創造的研究	19
国際栄養協力事業	10
健康食品安全情報ネットワーク事業	25
健康栄養情報事業	21
受託経費	103
特別用途食品表示許可試験費	10
受託経費	51
栄養情報担当者事業経費	42
計	899

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 3)

平成 20 年度収支計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
費用の部	
経常費用	899
人件費	550
うち 基本給等	521
退職手当	29
一般管理費（光熱水料、図書館関係経費等）	89
業務経費	157
国民健康・栄養調査に関連するサーベイランスプログラム	12
食品収去試験等業務	6
栄養疫学プログラム	17
健康増進プログラム	17
臨床栄養プログラム	8
基礎栄養プログラム	12
食品保健機能プログラム	10
創造的研究	19
国際協力事業事業	10
健康食品安全情報ネットワーク事業	25
健康栄養情報事業	21
受託経費	103
特別用途食品表示許可試験費	10
受託経費	51
栄養情報担当者事業経費	42
減価償却費	0
収益の部	899
運営費交付金収益	791
手数料収入	10
受託収入	51
栄養情報担当者事業経費	42
雑収入	5
資産見返物品受贈額戻入	0
資産見返運営費交付金戻入	0
純利益	—
目的積立金取崩額	—
総利益	—

[注記] 当法人における退職手当については、役員退職手当支給規程及び職員退職手当規程に基づき支給することとなるが、その全額について運営費交付金を財源とするものと想定している。

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙4)

平成20年度資金計画

(単位：百万円)

区 別	金 額
資金支出	899
業務活動による支出	899
投資活動による支出	0
資金収入	899
業務活動による収入	899
運営費交付金による収入	791
手数料収入	10
受託収入	51
栄養情報担当者事業経費	42
雑収入	5
前期中期目標の期間よりの繰越金	0

(注) 単位未満四捨五入処理のため、計において一致しないことがある。

(別紙 5)

平成 20 年度独立行政法人国立健康・栄養研究所行事等予定表

平成 20 年 4 月 15 日 (火) ~16 日 (水)	○ 研究所一般公開 (パネル展示)
5 月	
6 月 14 日 (土) ~15 日 (日) 15 日 (日) —	○ 第 7 回産学官連携推進会議 (国立京都国際会館) ○ 第 5 回独立行政法人国立健康・栄養研究所栄養情報担当者認定実施試験 ○ 平成 19 年度業務実績報告及び中期目標期間における業務実績報告を厚生労働省独立行政法人評価委員会に、平成 19 年度財務諸表等を厚生労働大臣にそれぞれ提出 ○ 「健康・栄養ニュース」(第 24 号) の発行
7 月 —	○ 第 5 回独立行政法人国立健康・栄養研究所栄養情報担当者認定試験合格者発表
8 月	
9 月 — 27 日 (土)	○ 「健康・栄養ニュース」(第 25 号) の発行 ○ 研究所一般公開 (オープンハウス)
10 月	
11 月 —	○ 第 6 回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験
12 月 — —	○ 「健康・栄養ニュース」(第 26 号) の発行 ○ 第 6 回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験受験資格確認試験合格発表
平成 21 年 1 月	
2 月 28 日 (土) — —	○ 第 10 回研究所主催一般公開セミナー・研究所公開業務報告会 (東京) ○ 独立行政法人国立健康・栄養研究所指定栄養情報担当者養成講座の指定 ○ 第 6 回独立行政法人国立健康・栄養研究所認定栄養情報担当者認定試験実施要綱の公表
3 月 18 (水) — —	○ 外部評価委員会 ○ 平成 21 年度計画を厚生労働大臣へ提出 ○ 「健康・栄養ニュース」(第 27 号) の発行

- ◎ 運営会議は 8 月を除く毎月第 2 木曜日に開催する。
◎ 健栄研セミナーは原則、毎月第 3 木曜日に開催する。
◎ 専門家向け公開セミナーを東京及び地方にて開催する。
※ 実施日については、諸般の都合により変動があり得る。

4. 平成20年度予算額

支出		(単位：千円)		
事 項	平成19年度 予 算 額	平成20年度 予 算 額	増△減額	
人件費	556,634	549,666	▲6,968	
基本給・諸手当	474,429	466,089	▲8,340	
共済組合負担金	44,598	47,957	▲3,359	
児童手当拠出金	377	511	▲134	
労働保険料	7,240	5,752	▲1,488	
退職手当	29,990	29,357	▲633	
一般管理費	88,901	83,711	▲5,190	
業務経費	166,723	157,161	▲9,562	
栄養疫学プログラム	23,562	26,909	▲3,347	
国民健康・栄養調査プロジェクト	12,562	11,409	▲1,153	
食事摂取基準プロジェクト	5,000	9,000	▲4,000	
生体指標プロジェクト	6,000	6,500	▲500	
健康増進プログラム	26,863	25,706	▲1,157	
運動ガイドラインプロジェクト	10,181	12,268	▲2,087	
エネルギー代謝プロジェクト	15,982	12,292	▲3,690	
休養プロジェクト	700	1,146	▲446	
臨床栄養プログラム	7,476	8,632	▲1,156	
メタボリックシンドロームプロジェクト	6,676	8,132	▲1,456	
栄養療法プロジェクト	800	500	▲300	
栄養教育プログラム	8,910	8,910	0	
栄養ケア・マネジメントプロジェクト	2,000	2,000	0	
生活習慣病予防プロジェクト	4,100	4,100	0	
食育プロジェクト	2,810	2,810	0	
基礎栄養プログラム	9,351	9,351	0	
脂質・糖代謝プロジェクト	9,351	9,351	0	
食品保健機能プログラム	24,158	19,100	▲5,058	
食品分析プロジェクト	15,197	14,000	▲1,197	
補完成分プロジェクト	3,100	3,000	▲100	
食品機能プロジェクト	5,861	2,100	▲3,761	
創造的研究費	20,074	14,500	▲5,574	
情報センター	31,724	33,583	▲1,859	
健康食品情報プロジェクト	15,905	15,609	▲296	
健康・栄養情報プロジェクト	3,300	3,300	0	
IT支援プロジェクト	12,519	14,674	▲2,155	
国際産学連携センター	14,605	10,470	▲4,135	
国際栄養プロジェクト	10,365	7,054	▲3,311	
生物統計プロジェクト	—	916	▲916	
NR・セミナー業務	4,240	2,500	▲1,740	
受託経費	203,031	108,166	▲94,865	
特別用途食品表示許可試験費	12,040	10,320	▲1,720	
受託経費	91,404	51,352	▲40,052	
栄養情報担当者事業経費	69,587	46,494	▲23,093	
寄附研究事業	30,000	—	▲30,000	
支出計	1,015,289	898,704	▲116,585	

収入		(単位：千円)		
事 項	平成19年度 予 算 額	平成20年度 予 算 額	増△減額	
運営費交付金	812,258	790,538	▲21,720	
手数料収入	12,040	10,320	▲1,720	
受託収入	91,404	51,352	▲40,052	
栄養情報担当者事業収入	69,587	46,494	▲23,093	
寄附金収入	30,000	—	▲30,000	
収入計	1,015,289	898,704	▲116,585	

5. 平成 20 年度所内研究セミナー

期日	演 題	所 属
2008/4/17	ALS 患者のエネルギー消費量評価の試み (研究報告)	高田 和子 健康増進プログラム
	食品の抗酸化力データベースの構築 (研究報告)	竹林 純 食品保健機能プログラム
	新しい加速度計による日常生活活動の評価 (研究報告)	田中 茂穂 健康増進プログラム
5/15	「健康食品」による被害事例の特徴	梅垣 敬三 情報センター長
	高齢者の食事	宇津木 恵 栄養疫学プログラム
	食物繊維の定義について	山田 和彦 食品保健機能プログラム
6/19	SCOP (佐久肥満克服プログラム) に於ける遺伝子多型解析について	山田 晃一 栄養教育プログラム
	RBP (Retinol Binding Protein) とインスリン抵抗性	山内 淳 栄養疫学プログラム
	高脂肪食による脂肪肝発症機序と予防法	山崎 聖美 基礎栄養プログラム
7/17	プロスタグランジンに依存した癌細胞の生存・増殖について	矢野 友啓 食品保健機能プログラム
	従業員食堂を活用した健康づくり対策に関する研究	由田 克士 栄養疫学プログラム
	食育推進大会のご報告	饗場 直美 栄養教育プログラム
9/18	都道府県における食育推進の状況	荒井 裕介 栄養疫学プログラム
	タンパク質摂取量による脳卒中への影響	千葉 剛 基礎栄養プログラム
	アルコールの危険性	江崎 治 基礎栄養プログラム
10/16	むく鳥通信ニュースを使った栄養アドバイスの試み	廣田 廣一 情報センター

期日	演 題	所 属
10/16	ビタミン K2 の補充摂取が閉経後女性の生体指標に及ぼす影響	石見 佳子 栄養疫学プログラム
	アメリカ NIH 報告～ファンディングシステムと DRIs 活用状況	笠岡 宣代 国際産学連携センター
11/13	血管内皮細胞におけるインスリン受容体基質 (IRS)-2 の役割の解明－血管内皮細胞特異的 IRS-2 欠損マウスを用いて－	窪田 哲也 臨床栄養プログラム
	運動トレーニングが脂肪燃焼を亢進する分子メカニズム－PGC-1 α の新規アイソフォームの発見とその役割について－	三浦 進司 基礎栄養プログラム
	ビタミン B 1 2 の安定性に関する研究	松本 輝樹 食品保健機能プログラム
12/18	生活習慣病一次予防のための大規模介入研究 そのデザインとベースライン結果	宮地 元彦 健康増進プログラム
	強化合宿が男子大学長距離選手の睡眠時心拍スペクトルと主観的疲労度に及ぼす影響	熊江 隆 健康増進プログラム
	ビヒュズス菌のヒトミルクオリゴ糖代謝機構の解明	北岡 本光 食品総合研究所 食品バイオテクノロジー研究領域
	味覚受容の分子機構を利用した味覚増強物質探索法の開発－塩分低減を可能にする食品開発を目指して－	日下部 裕子 食品総合研究所 食品機能研究領域
	欧州における食生活改善を目指したポピュレーション戦略の事例検討	三好 美紀 国際産学連携センター
2009/1/15	エネルギーの単位表示の試み	渡邊 昌 理事長
	我が国における肥満の流行	水野 正一 国際産学連携センター
	食育の文化的な分野の統一見解分析	Melissa Melby 栄養教育プログラム
	高齢者の栄養摂取	森田 明美 栄養疫学プログラム

期日	演 題	所 属
2/19	登録検査機関間における分析精度と分析値信頼性確保に関する研究	永田 純一 食品保健機能プログラム
	プロスタグランジン E2 によるエネルギー消費促進作用と GABA 作動性伝達の抑制	大坂 寿雄 健康増進プログラム
	国民健康・栄養調査に関連する技術支援について	野末 みほ 栄養疫学プログラム
3/19	人を対象とした代謝実験	西牟田 守 栄養疫学プログラム
	消化・吸収・発酵と保健の用途	山田 和彦 食品保健機能プログラム

6. 食品分析リスト（特別用途食品の分析）

平成19年度において、特別用途食品の許可表示取得のために提出されたものについて分析した結果は次のとおりである。分析方法等は健康増進法に記載されている。

特別用途食品	申請者	商品名
低ナトリウム食品	ちば醤油株式会社	特選 減塩しょうゆ
アレルギー除去食品，無乳糖食品	明治乳業株式会社	明治エレメンタルフォーミュラ
無乳糖食品	明治乳業株式会社	明治ラクトレス
妊産婦，授乳婦用粉乳	明治乳業株式会社	明治バイオママ
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ きのことチキンボールのクリーム煮セット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ 煮込みハンバーグセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ 欧風カレーセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ 肉じゃがセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ クリームシチューセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ 筑前煮セット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ ビーフシチューセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ ハッシュドビーフセット
糖尿病食調製用組合わせ食品	キューピー株式会社	キューピー ユニットカロリーグルメ 鶏つくねの野菜あんかけセット
低ナトリウム食品	サラヤ株式会社	リソルト
無たんぱく質高カロリー食品	株式会社エイチプラスビィ・ライフサイエンス	粉飴ムース ヨーグルト風味
無たんぱく質高カロリー食品	株式会社エイチプラスビィ・ライフサイエンス	粉飴ムース グレープ風味
低ナトリウム食品	生活協同組合コープこうべ	C o o p ' s 特選丸大豆減塩醤油
低ナトリウム食品	株式会社マルハチ村松	減塩習慣艦だし
		計 18品目
特定保健用食品	申請者	商品名
特定保健用食品	株式会社ヤマサン	デキストリン珈琲
特定保健用食品	ユーシーシー上島珈琲株式会社	ザ・ブレンド アイスコーヒー乳果オリゴ糖入り
特定保健用食品	小林製薬株式会社	チピュア
特定保健用食品	日清ファルマ株式会社	コロバランス アムラ風味
特定保健用食品	日清ファルマ株式会社	コロバランス レモン風味
特定保健用食品	富永貿易株式会社	ファイバーパーラー フルーツミックス
特定保健用食品	富永貿易株式会社	カルシウムパーラー

特定保健用食品	申請者	商品名
特定保健用食品	小倉屋昆布食品株式会社	毎日コツコツふりかけ
特定保健用食品	キャドバリー・ジャパン株式会社	リカルデント グレープ&グレープミント
特定保健用食品	キャドバリー・ジャパン株式会社	リカルデント さわやかミントプラス
特定保健用食品	キャドバリー・ジャパン株式会社	リカルデント オーシャンフレッシュ
特定保健用食品	宝酒造株式会社	カルケア
特定保健用食品	旭松食品株式会社	おなか納豆
特定保健用食品	森永乳業株式会社	森永カルシウムの達人
特定保健用食品	大正製薬株式会社	ナチュラルケア ブレンド茶
特定保健用食品	ユーシーシー上島珈琲株式会社	ザ・コーヒー 乳果オリゴ糖入り
特定保健用食品	日本たばこ産業株式会社	このごろ気になる自分の生活
特定保健用食品	株式会社ヤクルト本社	ヤクルト400LT
特定保健用食品	クラシエ製薬株式会社	カゼインDPペプティオドリンク
特定保健用食品	明治製菓株式会社	キシリッシュプラスエフ グリーンミント
特定保健用食品	大正製薬株式会社	デントウエル ポスカシュガーレスガム
特定保健用食品	トーラク株式会社	大豆農場の調製豆乳
特定保健用食品	株式会社 K ライズ	ハイオリゴ S
特定保健用食品	オリヒロブランデュ株式会社	コレチェ S
特定保健用食品	小林製薬株式会社	ドルチガード
特定保健用食品	アサヒフードアンドヘルスケア株式会社	カラダはずむ ほうじ茶
特定保健用食品	ネスレ日本株式会社	カラダ支援飲料 大豆プロテイン飲料
特定保健用食品	森永製菓株式会社	海からの贈り物 サーデンペプチド
特定保健用食品	株式会社 紀文フードケミファ	濃厚調製豆乳
特定保健用食品	明治製菓株式会社	キシリッシュプラスエフ グレープフルーツミント
特定保健用食品	株式会社 東洋新薬	ペプチド青汁
特定保健用食品	株式会社 東洋新薬	考圧青汁
特定保健用食品	株式会社 東洋新薬	緑と海の恵み青汁
特定保健用食品	株式会社 東洋新薬	ペプチド+ケールの青汁
		計 34 品目

分析担当者：山田和彦、萩原清和、永田純一、松本輝樹、佐藤（三戸）夏子、垣外菜生子、小林 香、二井千日、矢野友啓、佐藤洋美、梅垣敬三、石見佳子、山内 淳

7. 海外出張

出張者氏名	所 属	出張国	出張期間	渡 航 内 容
渡邊 昌	理事長	フランス・パリ	H20. 4. 9-4. 14	アンチエイジング医学世界学会 2008 参加
高田 和子	健康増進プログラム	オーストラリア、キャンベラ・ブリスベン	H20. 4. 9-4. 16	SDA Sports Nutrition Course への参加と研究打合せ
田畑 泉	健康増進プログラム	中国・北京	H20. 4. 25-4. 29	日中栄養と健康交流会での講演
梅垣 敬三	情報センター	オーストラリア・メルボルン	H20. 5. 5-5. 10	3rd ASIA-PACIFIC NUTRIGENOMICS CONFERENCE における発表
江崎 治	基礎栄養プログラム	スイス・ジュネーブ	H20. 5. 13-5. 18	16th European Congress on Obesity 参加
永田 純一	食品保健機能プログラム	米国・ワシントン州	H20. 5. 16-5. 22	99th AOCs 99th Annual Meeting 参加
中出麻紀子	栄養教育プログラム	カナダ・バンフ	H20. 5. 20-5. 26	International Society for Behavioral and Physical Activity への参加
由田 克士	栄養疫学プログラム	フィンランド、オーストリア、ドイツ	H20. 5. 24-6. 2	研究情報収集など
荒井 裕介	栄養疫学プログラム	フィンランド・ヘルシンキ	H20. 5. 24-5. 30	NORTH CAELIA PROJECT についての現地調査
三好 美紀	国際産学連携センター	フィンランド、オーストリア、ドイツ	H20. 5. 24-6. 2	研究班に係る打ち合わせおよび資料収集
田畑 泉	健康増進プログラム	米国・インディアナ州	H20. 5. 27-6. 1	アメリカスポーツ医学会・第55回年次集会参加
宮地 元彦	健康増進プログラム	米国・インディアナ州	H20. 5. 27-6. 2	アメリカスポーツ医学会への参加・情報収集
大石由美子	臨床栄養プログラム	オーストラリア・シドニー	H20. 5. 31-6. 6	第15回国際血管生物学会 (IVBM2008) 発表・参加

出張者氏名	所 属	出張国	出張期間	渡 航 内 容
窪田 哲也	臨床栄養プログラム	米国・カリフォルニア州	H20. 6. 5-6. 9	第 68 回アメリカ糖尿病学会参加
谷本 道哉	健康増進プログラム	ポルトガル・ブルガリア	H20. 7. 8-7. 18	第 13 回ヨーロッパスポーツ科学学会にて発表・情報収集ならびにブルガリア国立スポーツアカデミーでの打合せおよび現地視察
石見 佳子	栄養疫学プログラム	フィンランド・ヘルシンキ	H20. 8. 6-8. 13	ヘルシンキ大学においてフラボノイドの測定の実施及び共同研究の打合せ
山田 和彦	食品保健機能プログラム	タイ・バンコク	H20. 8. 12-8. 16	第 5 回アジア健康強調表示に関する科学基盤会議及びワークショップに出席
永田 純一	食品保健機能プログラム	米国・イリノイ州	H20. 8. 23-8. 30	UJNR2008 Annual Meeting 参加
山田 和彦	食品保健機能プログラム	ベルギー・ブリュッセル、イタリア・パルマ	H20. 8. 28-9. 3	食品の健康強調表示動向の現状調査と情報交換のために欧州委員会 (EC) 及び欧州食品安全庁 (EFSA) 訪問
石見 佳子	栄養疫学プログラム	カナダ・モントリオール	H20. 9. 11-9. 17	米国骨ミネラル学会での発表
森田 明美	栄養疫学プログラム	ブラジル・ポルトアレグレ	H20. 9. 18-9. 27	「Epidemiology in the construction of health for all: tools for a changing world」における学会発表
村上 晴香	健康増進プログラム	米国、サウスカロライナ州・イリノイ州	H20. 9. 23-9. 30	2008 年 APS intersociety meeting: Biology of integrative biology of exercise V にて発表・情報収集
石見 佳子	栄養疫学プログラム	中国・北京	H20. 10. 11-10. 13	中医薬学会連合会老年医学専門委員会に出席
田畑 泉	健康増進プログラム	マレーシア・クアラルンプール	H20. 10. 12-10. 16	プトラ・マレーシア大学 Dr Hazizi Abu Saad との共同研究
宮地 元彦	健康増進プログラム	マレーシア・クアラルンプール	H20. 10. 12-10. 16	プトラ・マレーシア大学 Dr Hazizi Abu Saad との共同研究

出張者氏名	所 属	出張国	出張期間	渡 航 内 容
高田 和子	健康増進プログラム	オーストラリア・ブリスベン	H20.10.25-11.2	IAEA の国際共同研究における研究手法のトレーニングコース参加及び研究打ち合わせ
渡邊 昌	理事長	ベトナム、ホーチミン・ハノイ	H20.10.26-11.1	日米医学ベトナムシンポジウム参加
森田 明美	栄養疫学プログラム	ベトナム、ホーチミン・ハノイ	H20.10.27-11.1	日米医学ベトナムシンポジウム参加
三好 美紀	国際産学連携センター	ベトナム、ホーチミン・ハノイ	H20.10.27-11.1	日米医学ベトナムシンポジウム参加
梅垣 敬三	情報センター	オーストラリア、シドニー・キャンベラ	H20.10.27-11.1	特定保健用食品等の有効性・安全性を確保するための科学的根拠の評価方法に関する研究
山田 和彦	食品保健機能プログラム	南アフリカ共和国・ケープタウン	H20.10.30-H21.1.9	FAO/WHO 合同食品規格委員会 (CODEX) 第 30 回栄養・特殊用途食品部会に出席
野末 みほ	栄養疫学プログラム	マレーシア・クアラルンプール	H20.11.6-11.10	The 40th Asia-Pacific-Academic Consortium for Public Health (APACPH) 参加
大石由美子	臨床栄養プログラム	米国ルイジアナ州・カリフォルニア州	H20.11.9-11.17	米国心臓学会発表・参加およびカリフォルニア大学サンディエゴ校との研究の打ち合わせ
渡邊 昌	理事長	アルゼンチン・ブエノスアイレス	H20.11.22-11.29	日本ラテンアメリカ老年医学・老年科学シンポジウム参加
大森 豊緑	研究企画評価主幹	アルゼンチン・ブエノスアイレス	H20.11.22-11.29	日本ラテンアメリカ老年医学・老年科学シンポジウム参加
森田 明美	栄養疫学プログラム	アルゼンチン・ブエノスアイレス	H20.11.22-11.29	日本ラテンアメリカ老年医学・老年科学シンポジウム参加
坪田 恵	栄養疫学プログラム	アルゼンチン・ブエノスアイレス	H20.11.22-11.29	日本ラテンアメリカ老年医学・老年科学シンポジウム参加

出張者氏名	所 属	出張国	出張期間	渡 航 内 容
田畑 泉	健康増進プログラム	中国・上海	H20. 11. 28-12. 1	第 2 回上海国際運動と健康フォーラム参加
曹 振波	健康増進プログラム	中国・上海	H20. 11. 28-12. 1	第 2 回上海国際運動と健康フォーラム参加
卓 興鋼	情報センター	中国・上海	H20. 12. 3-12. 10	第三回上海国際健康大会に参加(健康・栄養情報の収集)、共同研究の打合せ
三好 美紀	国際産学連携 センター	ベトナム・ハ ノイ	H20. 12. 25-12. 27	国際医療協力研究委託事業 「途上国における糖尿病予 防・治療の実態把握および患 者数増加要因に関する研究」 のための海外資料収集
笠岡(坪山) 宣代	国際産学連携 センター	米国・ワシン トン DC	H21. 1. 4-1. 13	米国 FDA・NIH など関係諸機関 への調査研究
栗澤 元晴	臨床栄養プログラム	カナダ	H21. 1. 20-1. 26	Keystone Symposium Canada 参加
矢野 友啓	食品保健機能 プログラム	オーストラリ ア・シドニー	H21. 2. 4-2. 7	中皮腫を標的にした補完成分 のヒト介入試験実施のための 打合せ
三好 美紀	国際産学連携 センター	タイ・バンコ ク	H21. 2. 17-2. 20	国際医療協力研究委託事業 「国際保健人材育成のための 研修制度、カリキュラム、教 材に関する研究」のための 海外資料収集
宮地 元彦	健康増進プログラム	米国・フロリ ダ州	H21. 3. 9-3. 13	アメリカ心臓学会 2009 での 学会発表・情報収集
三好 美紀	国際産学連携 センター	韓国・ソウル	H21. 3. 22-3. 24	国際医療協力研究委託事業 「途上国における糖尿病予防 治療の実態把握および患者数 増加要因に関する研究」のた めの海外資料収集

8. 人事異動

発令年月日	異動内容	氏 名	所属名 (転入、転出先)
H 20.4.1	採用 (転入)	大森豊緑	研究企画評価主幹
H 20.4.1	採用 (転入)	望月文明	事務部庶務課長
H 20.4.1	採用 (転入)	秋本若夫	事務部業務課長 (会計課長併任)
H 20.4.1	採用 (転入)	茅島徳幸	事務部庶務課人事・厚生係長
H 20.4.1	採用 (転入)	永田幸子	事務部会計課経理係長
H 20.4.1	併任	門脇 孝	臨床栄養プログラムリーダー (東京大学大学院医学系研究科 糖尿病・代謝内科教授)
H 20.4.1	併任	手嶋登志子	栄養教育プログラム栄養ケア・マネジメントプロジェクトリ ーダー (浜松大学健康プロデュース学部健康栄養学科教授)
H 20.4.1	併任解除	芝池伸彰	理事 (情報センター長の併任解除)
H 20.4.1	併任	芝池伸彰	理事 (国際産学連携センター長及び国際産学連携センター国 際栄養プロジェクトリーダーに併任)
H 20.4.1	併任	廣田晃一	情報センターIT支援プロジェクトリーダー (健康・栄養情 報プロジェクトリーダーに併任)
H 20.4.1	復職	笠岡宣代	国際産学連携センター付 (調整担当)
H 20.4.1	昇任 (併任)	梅垣敬三	情報センター長 (健康食品情報プロジェクトリーダーに併 任)
H 20.4.1	併任解除	岡田誠治	事務部長 (事務部業務課長の併任解除)
H 20.4.1	昇任 (併任)	内田信也	事務部業務課NR担当係長 (産学担当係長に併任)
H 20.4.1	配置換	箕浦正之	事務部庶務課主査
H 20.4.1	配置換 (併任・併 任解除)	三國良樹	事務部業務課主事 (事務部庶務課に併任、事務部会計課の併 任解除)
H 20.4.1	併任解除	中村雅志	事務部会計課契約管理係長 (業務課産学担当係長の併任解 除)
H 20.4.1	併任解除	橋本光彦	事務部業務課調整係長 (業務課NR担当係長の併任解除)
H 20.6.1	配置換 (併任)	窪田直人	臨床栄養プログラムメタボリックシンドロームプロジェク トリーダー (栄養療法プロジェクトリーダーに併任) (任期 付)
H 20.7.1	併任解除	梅垣敬三	情報センター長 (健康食品情報プロジェクトリーダーの併任 解除)
H 20.7.1	昇任	卓 興鋼	情報センター健康食品情報プロジェクトリーダー (任期付)
H 20.8.1	併任解除	窪田直人	臨床栄養プログラムメタボリックシンドロームプロジェク トリーダー (栄養療法プロジェクトリーダーの併任解除) (任 期付)

発令年月日	異動内容	氏 名	所属名 (転入、転出先)
H 20.8.1	昇任	窪田哲也	臨床栄養プログラム栄養療法プロジェクトリーダー (任期付)
H 20.11.17	配置換	卓 興鋼	情報センター健康・栄養情報プロジェクトリーダー (任期付)
H 20.11.17	併任	梅垣敬三	情報センター長 (健康食品情報プロジェクトリーダーに併任)
H 20.11.17	併任解除	廣田晃一	情報センター I T 支援プロジェクトリーダー (情報センター健康・栄養情報プロジェクトリーダーの併任解除)
H 20.11.17	併任	笠岡宣代	国際産学連携センター上級研究員 (調整担当) (情報センター健康食品情報プロジェクトに併任)
H 21.3.31	任期満了	渡邊 昌	理事長
H 21.3.31	任期満了	小早川隆敏	監事 (非常勤)
H 21.3.31	退職	山田和彦	食品保健機能プログラムリーダー (女子栄養大学生化学研究室)
H 21.3.31	定年退職	西牟田守	栄養疫学プログラム生体指標プロジェクト上級研究員 (千葉県立保健医療大学健康科学部)
H 21.3.31	退職 (転出)	岡田誠治	事務部長 (東京検疫所次長へ)
H 21.3.31	退職 (転出)	茅島徳幸	事務部庶務課人事・厚生係長 (関西空港検疫所へ)
H 21.3.31	退職 (転出)	内田信也	事務部業務課 N R 担当係長 (併任) 産学担当係長 (国立保健医療科学院研修企画部へ)
H 21.3.31	退職 (転出)	中村雅志	事務部会計課契約管理係長 (国立保健医療科学院総務部へ)
H 21.3.31	転出 (転出)	末永和義	事務部会計課主事 (福岡検疫所福岡空港検疫所支所)

9. 特別研究員

氏 名	所 属 部	期 間
河嶋 伸久	栄養疫学プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
大瀧 裕子	栄養疫学プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
谷本 道哉	健康増進プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
朴 鍾薫	健康増進プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
栗澤 元晴	臨床栄養プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
中出 麻紀子	栄養教育プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
遠藤 香	食品保健機能プログラム	H 20. 4.1～21.3.30
瀧 優子	情報センター	H 20. 4.1～21.3.30
佐藤 陽子	情報センター	H 20. 4.1～21.3.30

10. 名誉所員

氏 名	授与年月日	在職当時の職名
印南 敏	H 10.4.1	食品科学部長
宮崎 基嘉	H 10.4.1	基礎栄養部長
宇津木良夫	H 10.4.1	病態栄養部長
山口 迪夫	H 10.4.1	食品科学部長
市川 富夫	H 10.4.1	応用食品部長
伊東 蘆一	H 10.4.1	老人健康・栄養部長
板倉 弘重	H 10.4.1	臨床栄養部長
池上 幸江	H 11.4.1	食品科学部長
小林 修平	H 11.7.1	所長
江指 隆年	H 12.4.1	応用食品部長
澤 宏紀	H 13.4.1	所長
戸谷 誠之	H 13.4.1	母子健康・栄養部長
樋口 満	H 15.4.1	健康増進研究部長
岡 純	H 16.4.1	応用栄養学研究部長
増田 和茂	H 16.8.1	理事
田中 平三	H 17.4.1	理事長

11. 客員研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
佐々木 敏	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食事摂取基準策定のための文献学的研究および栄養疫学研究
太田 篤胤	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	骨粗鬆症予防における栄養疫学的研究
吉武 裕	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるエネルギー代謝
呉 堅	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食品成分と運動の併用が生活習慣病予防に及ぼす影響に関する研究
山本 祐司	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	メタボリックシンドロームにおけるビタミンA転送タンパク質の役割の解析
藤井 康弘	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	大豆醗酵食品の有効性に関するヒトでの評価
二見 順	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	ヒューマンカロリメーターによるエネルギー消費量測定に関する研究
木村 靖夫	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	中・高齢者における日常身体活動の増加と栄養指導の健康増進効果に関する研究
川中健太郎	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	運動が骨格筋糖代謝に及ぼす影響とメカニズム
真田 樹義	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
井上 修二	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	視床下部腹内側核（VMH）破壊動物の病態に関する研究
田中 千晶	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	子どもにおける日常生活での身体活動量
高橋 佳子	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
家光 素行	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
寺田 新	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	運動による骨格筋代謝機能向上のメカニズムに関する研究
引原 有輝	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	加速度計を用いた総エネルギー消費量および身体活動強度の評価法の提案
野田 光彦	臨床栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	メタボリックシンドロームにおける栄養摂取と膵島の代謝・インスリン分泌の関連に関する研究
原 一雄	臨床栄養プログラム	H 20.6.1～21.3.31	環境遺伝相互作用による日本人の糖尿病・メタボリックシンドロームの成因に関する研究
門脇 弘子	臨床栄養プログラム	H 20.10.15～21.3.31	肥満・糖尿病予防と治療のために、食後高血糖の改善を得る食事内容の確立
梶本 雅俊	栄養教育プログラム	H 20.4.1～21.3.31	青年期の食習慣と生活習慣病との関連性について
川上 純子	栄養教育プログラム	H 20.4.1～21.3.31	高齢者の食介護に関する研究—介護食を中心に—
渡辺 光博	基礎栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	分子制御によるメタボリックシンドロームへのアプローチ
亀井 康富	基礎栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	骨格筋の遺伝子発現調節に焦点をおいた生活習慣病の分子機構解明
高橋真由美	基礎栄養プログラム	H 21.1.1～21.3.31	日本人糖尿病患者に於ける食事、運動量の評価のための予備的研究
中川 靖枝	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食物繊維の生理作用
江指 隆年	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	栄養素の栄養機能代謝に関する研究
中嶋 洋子	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食品成分の健康影響に関する研究
久保 和弘	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	脂質の機能特性に関する研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
清瀬千佳子	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食品成分における生体への新規機能性の解明
梅國 智子	情報センター	H 20.4.1～21.3.31	W e b 上の栄養情報教育に関する研究
橋本 洋子	情報センター	H 20.6.2～21.3.31	子供のサプリメント利用に関する調査研究
石渡 尚子	理事長付	H 20.4.1～21.3.31	健康づくりのための栄養教育プログラムの開発
大賀 英史	理事長付	H 20.4.1～21.3.31	こころ（動機付け）と継続を可能とする社会環境に関する科学的（計量的）アプローチ

12. 協力研究員

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
岩本 珠美	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	脂質代謝とミネラル代謝の関連について
大木 和子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	高齢者の口腔保健と全身的な健康状態の関係についての総合研究－全身的な健康状態の評価とその経年変化－
武山 英麿	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラル代謝
佐藤 七枝	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	カルシウムと食生活に関する研究
島田美恵子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	高齢者の生理特性と日常身体活動との関係
児玉 直子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラルの役割
吉岡やよい	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラルの役割
森國 英子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラルの役割
松崎 伸江	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラルの役割
千葉 大成	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	柑橘系フラボノイドに着目した骨粗鬆症予防に関する研究
宇田川孝子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	地域における公衆栄養活動の評価
三宅 裕子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	INTERMAP データを用いた肥満と食生活に関する栄養疫学研究
猿倉 薫子	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	栄養調査及び栄養の指導者側のマニュアル作成やその評価
王 新祥	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	葛根の骨粗鬆症モデルマウスの骨量に対する増加作用とそのメカニズム
佐藤 裕美	栄養疫学プログラム	H 20.4.1～21.3.31	人体におけるミネラル代謝
祐成 久美	栄養疫学プログラム	H 20.7.1～21.3.31	地域における栄養モニタリング
鈴木 洋子	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	マウスの腹部臓器細胞増殖に関する研究
村上 晴香	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
大森 由美	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
河野 寛	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
安田 剛	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	フィットネスクラブにおけるプログラム開発における指導・研究
別所 京子	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	エネルギー消費量に関する研究
山元 健太	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体活動量・体力基準値策定を目的とした大規模介入研究
緑川 泰史	健康増進プログラム	H 20.4.1～21.3.31	エネルギー消費量および身体組成の評価法
片山 利恵	健康増進プログラム	H 20.4.7～21.3.31	生活習慣病一次予防に必要な身体的活動量体力基準値の策定を目的とした大規模介入研究
窪田 直人	臨床栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	栄養療法プロジェクト・メタボリックシンドロームの研究(インスリン抵抗性中心)
原 一雄	臨床栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	メタボリックシンドロームプロジェクト・各栄養素摂取量と遺伝子多型の相互作用の検討
松下 由実	臨床栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	メタボリックシンドロームプロジェクト・基礎代謝に影響を与える遺伝素因の研究
眞鍋 一郎	臨床栄養プログラム	H 20.4.1～21.3.31	代謝血管疾患の分子機構
大石由美子	臨床栄養プログラム	H 20.5.20～21.3.31	メタボリックシンドローム発症の分子機構の解明
日比野佐和子	栄養教育プログラム	H 20.4.1～20.8.31	抗加齢を目指した食事のあり方について
平川あずさ	栄養教育プログラム	H 20.4.1～21.3.31	栄養教育・食育に関する情報収集
石田 淳子	栄養教育プログラム	H 20.4.1～21.3.31	食介護に関する調査研究
山田 五月	栄養教育プログラム	H 20.9.19～21.3.31	食育の効果的な展開法に関する研究

氏 名	所 属 部	期 間	研 究 内 容
佐藤 洋美	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	補完成分のスクリーニング
木戸和貴子	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	トコトリエノール生理活性作用に関する研究
前田 剛希	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	沖縄県農産物に含まれる機能性成分の有効性評価に関する研究
花井 美保	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	生活リズム攪乱モデルラットの生殖機能におよぼす飼料栄養素の影響
石田 達也	食品保健機能プログラム	H 20.4.1～21.3.31	保健機能食品の微生物成分に関する調査・研究
高山 光尚	理事長付	H 20.4.1～21.3.31	こころ（動機付け）と継続を可能とする社会環境に関する科学的（計量的）アプローチ

平成21年3月31日 発行

発行者 独立行政法人 国立健康・栄養研究所

〒162-8636
東京都新宿区戸山1-23-1
TEL.03-3203-5721 (代)
